K2A-35
Z32-B88

金の星

大正十五年十二月五日印刷納本　大正十六年一月一日發行

第九巻第一號

一月号

国立国会
8. 3. 26
図書館

附録　童謡いろは歌留多

日本童謡作曲界を代表する大好評の

金の星童謡曲譜集

一輯二輯各金六拾錢・三輯以下金八拾錢・送料金六錢

第一輯 人買船（日曲）
本居長世作曲・野口雨情作詞
人買船、青い目の人形、九官鳥、日傘、歸る燕、十五夜お月さん

第二輯 一つお星さん（日曲）
本居長世作曲・野口雨情作詞
一つお星さん、七つの子、鯉と雀、鴨さん、象の鼻、四丁目の犬

第三輯 青い空（日曲）
本居長世作曲・野口雨情作詞
青い空、燕、雨夜の傘、でんでん虫、雀の酒盛り、呼子鳥

第四輯 赤い靴（日曲）
本居長世作曲・野口雨情作詞
赤い靴、山彦、三ケ月さん、船捨山、朝鮮飴屋、眠り龜の子

第五輯 夢とり（日曲）
小松耕輔作曲・野口雨情作詞
夢とり、おしやれ椿、つば子、十と七つ、雀の水浴、雀の機織り

第六輯 子守唄（日曲）
本居長世作曲・野口雨情作詞
子守唄、櫻と小鳥、乙姫さま、はぐれ鳥、蕨坊主、蕨の下道

第七輯 お人形さんの夢（日曲）
本居長世作曲・野口雨情作詞
お人形さんの夢、釣鐘草、啼いた啼いた雛子、老の鏡、お馬のお耳、草遊び、霜柱

第八輯 ぺんぺん鳥（日曲）
小松耕輔作曲・雄崎龍作詞
ぺん〳〵鳥、螢のお使、仔牛、赤い子馬車、紅殼蜻蛉、さみだれ

第九輯 あの町この町（日曲）
中山晋平作曲・野口雨情作詞
あの町この町、雀踊り、木の葉のお船、高野山、鼠の小母さん、霞城寺の狐囃

第十輯 名所めぐり（日曲）
本居長世作曲・野口雨情作詞
長柄の橋、柱くらべ、阿彌陀池、宮城野の萩、お乳飴、石山寺の秋の月

第十一輯 夢のお國（日曲）
藤井清水作曲・野口雨情作詞
夢のお國、兎が來い、赤い機ンぽ、猫さんお手まり、櫻の歌、砂の戲

東京本郷 金の星社 東京坂町

電話小石川五七八三番
振替東京五九五九六番

オハナシ

巖谷小波閲・鹿島鳴秋著
橋本郁助・太田三郎
細木原青竜・岡野榮
杉浦非水畫

童話も
童謡も
昔のことも
今のこともある
面白くて
爲めになる
オハナシ

四六倍判總金五冊
紙數各冊八十餘頁
定價各壹圓
送料各八錢

日本一の畫噺

巖谷小波著
岡野榮・小林鹿吉
杉浦非水畫

繪が一頁に
お噺が一頁
繪が踊れば
お噺も踊り出す
これこそ本統の
日本一の畫噺

袖珍假製金三十五冊
紙數各冊三十餘頁
定價各貳錢五厘
送料各金四錢

オトギウタエ

巖谷小波著
太田三郎・岡野榮
細木原青竜畫

歌と繪と
次々に綴いてゆく
印象の濃い本
牛若丸は？
舌切雀は？
運動會の賞品は！

四六倍判假製金三冊
紙數各冊三十餘頁
定價各八錢
送料各六錢

東京日本橋通
丸善株式會社
東京一銀田・三田・丸ビル
大阪 神戸 東京 名古屋 横浜 四國 福岡 札幌

世界少年少女名著大系(30)　金の星社編・挿畫　羽鳥古山畫伯

竹取物語

竹の筒の中から、一人の可愛い赤ちゃんが生れました。赤ちゃんは大きくなると、日本中で一番美しいお姫さんになりました。お姫さんの名は『なよ竹のかぐや姫』と申されます。

かぐや姫の坐つてゐる室は、姫の身體から差す御光で、虹のやうに照り輝やいてをりました。又、姫が何か一言ものを仰しやると、庭の小鳥は皆んな耳を傾けて、その美しい響きに聽きとれると云ふ有樣でした。その當時の皇子やお公卿さん達は、なんとかして、かぐや姫を自分のお嫁さんにしようとして、色々苦心しました。併し、かぐや姫は到々、その言葉に從ひませんでした。八月十五日、お月見の晩に、五色の雲に乘つて、遠い〳〵月の世界へ歸つてしまひました。

これが『竹取物語』の梗概です。竹取物語は今より凡そ一千年前の作で、日本古代文學中の傑作として、世界に誇り得るものであります。

四六判箱入頗美本
内容一八〇頁
挿畫三色版外十枚
定價金九十錢
送料六錢

東京本郷動坂町
金の星社
振替東京五九五九六番

世界少年少女名著大系(29)　金の星社編・挿畫　寺内萬治郎畫伯

ジャンバルヂャン

ユーゴーの大傑作『あゝ無情』を少年少女の讀物として書いたもので、前半は『金の星』誌上に掲げられて大評判を受けたものです。

主人公ジャンバルヂャンは、貧しいためにパン一切を盜みました。そのために、捕つて牢へ投げこまれました。

牢を破つて再び明るい世の中に出て來たものゝ、誰一人として相手にしてくれる者もありません。そこで、ジャンバルヂャンは再び泥棒となりましたが、エミエル僧正に救はれほんせんと悟つて、遂に眞人間となり、それから偉い働きをするやうになりました。

その間には、次ぎ〳〵と樣々の驚くべき事件が出て來ます。可愛いゝ娘のために髮の毛を切つて賣る母親もあらはれます。また、聞くもあはれな、少女コゼットの物語も出て來ます。全篇を通じて、ジャンバルヂャンの爲めに、涙なしには讀めない物語です。

本書こそ、不朽の名著でありますから、是非御一讀下さい。

四六判箱入頗美本
内容二〇〇頁
挿畫三色版外十枚
定價金九拾錢
送料六錢

東京本郷動坂町
金の星社
振替東京五九五九六番

世界少年少女名著大系(32)　金の星社編・挿畫　松政德次郎畫伯

平家物語

日本歴史の中で最も面白いお話の多いのは源平時代です。中でも、平家のお話は事實にあつたお話としてこれ程はなやかな、そして又はかない、哀れなお話もありますまい。

清盛が平家の一門を盛んにして、天下に並ぶものもない位の勢にしましたが、その清盛も不思議な病にかゝつて死んで了つてから、次第に衰えて行つて、最後に殆ど一門全部のものが、壇の浦の合戰に源氏のために亡されて了ふところまでを書いたのが此の「平家物語」です。

その間には澤山のお話があります。亡びて行く人もあれば、世をはかなく思つて坊さんになる人もあれば、島流しにされる人もあり、數限りないお話が出て來ます。勇壯な源平の合戰は到るところにあります。

ですから、一度「平家物語」を讀んだ人は、いつまでも〳〵この本を愛讀書として離さないのです。是非御一讀下さい。

四六判箱入頗美本
内容一八〇頁
挿畫三色版外十枚
定價金九十錢
送料六錢

東京本郷動坂町
金の星社
振替東京五九五九六番

小島政二郎先生著

世界名篇物語叢書第十四編　愛犬物語

一ヶ年の間『金の星』誌上に連載され讀者から非常な好評を以つて迎へられてゐた小島先生の愛犬物語が金蘭社四大叢書の一つたる世界名篇物語叢書中の第十四編として金蘭社から發行される事に決定しました。小島先生は今更云ふまでもなく現代の文壇に最も重きをなしてゐて、其名筆はあらゆる讀者を心酔せしめてなほ餘りありとさへ云はれて居ります。なほ附錄として『リツキイ・チツキイ・テビイ』を添へた事は一層本書の光輝をます物と信じます。名作『愛犬物語』の發行日近し！御期待下さい。

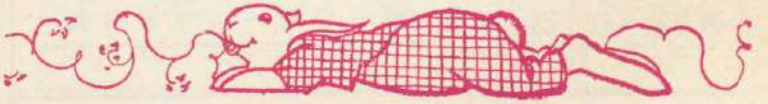
名作の發行日近し！

四六判箱入美本
本文約二〇〇頁
挿畫三色版外十枚
定價金九十錢
送料十二錢

東京市外巣鴨上駒込二八
金蘭社
振替東京六一七〇一番

目次

うれしいお年玉（表紙・石版）……岡本歸一
雪晴の朝（口絵・三色版）……寺内萬治郎
つなぎ松葉（童謡）……（四）……野口雨情
同作曲……（二）……本居長世
魔術奥義書（童話）……（六）……西條八十
竹田のからくり（童話）……（一四）……水島爾保布
漂流二百三十日（長篇）……（三）……久米舷一
漫畫毬介日記……（三）……河盛久夫
清正と大力男（童話）……（一三）……小富士逸郎
この子のお母さん（童謡）……（一四）……杜仙之介
畫物語日蓮聖人……（一六）……保積稲天
魔女の烏（長篇）……（一五）……山本二郎
紐蛇の目（童謡）……（一九）……青柳花明
これだこれだ（童話）……（二〇）……松尾孝輔



馬車屋の太吉郎さん（童話）……（六）……岡崎重太郎
冬の星（童謡）……（一三）……野口雨情選
大石主税（長篇）……（一六）……三島霜川
うさぎのとし（童謡）……（一六）……達崎龍
下駄に顔をのせて寝る男（童話）……（一八）……歌村兵六
高慢の鼻（童話）……（二六）……田中實
葉鶏頭（童謡）……（一〇〇）……野口雨情選
白帆の唄（長篇）……（一〇三）……小城庄一
貧乏神（童話）……（一一三）……西川喜平
岩を小くする（童話）……（一一八）……沖野岩三郎
暗闇城（長篇）……（一二四）……小島政二郎
この道行つたら（童謡）……（一三三）……中島允
ある月夜（綴方）……（一三四）
學校の東方（自由畫）……（一三五）
童謡いろは歌留多（新年附錄）……野口雨情作 寺内萬治郎畫

雪晴の朝（金の星畫帖）

寺内萬治郎畫

斯道教育家及圖書館より多大の好評と推奬を受けたる培風館特選良書

クリスマスや歳暮お正月にお子供達へ絶好の贈物

文學博士 森鷗外
文學博士 松村武雄
赤い鳥主筆 鈴木三重吉
東京高師教授 馬淵冷佑
四先生共著

十二版

日本童話 上下

上卷目次 桃太郎、花咲爺、猿蟹、舌切雀、カチ〳〵山
下卷目次 コブ取り、鼠の嫁入、海月のお使、猫の草紙、文福茶釜

定價 上下各冊金六拾錢 送料各冊金六錢

童話文學界の最高權威たる四大家が日本固有のお伽噺の詭傳廢滅を憂ひ、今の中に完全に整理して永久に後世に傳へようと苦心を經て大成せられたもの、内容の純眞簡潔、文の正確、一點一劃に到るまで四大家が協力一心、精選を重ねられたもの、斯界の權威たる童話、中興の祖とも稱せらるべき鈴木三重吉氏の今や東京高等師範附屬小學校牛込成城學校を始め各地の小學校に採用せられるやうになつたのは、初學年教科書代用に使用せられるやうになつたのは、更に兒童の手に入るやうに、原定價の三分の一の犧牲的廉價を以つて奉仕することにしたのは、學校の副讀本として本書ほど絶好適切なものはあるまい。贈物、家庭、愛兒、文庫及び獎學の賞品

十版

日本傳說 上下

上卷目次 浦島太郎、一寸法師、竹取物語、山椒太夫、田螺長者、物臭太郎、瘤取爺、牛若丸
下卷目次 玉取、山椒太夫、田螺長者、物臭太郎、瘤取爺、牛若丸

十版

日本神話 上下

上卷目次 世界の初、黄泉國、天の岩戸、八岐の大蛇、白兎、賊、國引
下卷目次 雄のお使、國讓、高千穗峯、人の使、海幸と山幸、橿原宮

女子學習院教授 射手矢貞三先生著

六版

少年太平記 上下

各冊定價金一圓八十錢 各冊送料金十錢

古來幾多の忠士義人を感奮せしめた千古の名文太平記の全篇を是非少年少女諸君に讀んで頂きたい。爲、平易に現代文化されたもので、華かにも溢ぐましい文字は、夕日の前に舞ひ散る櫻花のやうに、一卷の悲壯な戰繪巻であり、血と涙の哀史であり、いや上にも少年少女の血潮を鳴らせずには、おかない物語りであり、脈絡はむしろ原文以上に整然とし、加ふるに故事成語の註解詳密平易國史國文の參考書としても絶好のものであらう、

新刊

少年少女文學物語 慕はしき人々

定價金二圓 送料十二錢

石森延男先生著 高畠華宵畫伯裝幀

眼國に芽生えた文學にあまり緣遠いやうに思はれる日本の現代の兒童には恰も母性の温かさに憧れぬやうなもの足りなさがありはしまいか、遠い昔に育くまれた日本文學、隣地に生れた支那文學、今もなほ生々とした生命を有ち、美しい香をひそめてゐるこれらの文學を、兒童の世界に移植して見ごとすばらしい花を咲かせたのが本書である。著者石森氏は北海道の大自然が產める若き詩人にして氏をよく知れる吉田彌平先生は、同氏がすでにこの「慕はしき人々」の一人であらうといつて居られる。何人にも興味ふかき讀みものであると共に特に小學校上級生の讀方科の參考となり、中等學生には國語漢文科の學習に新しい見方と興味を與ふる高尚優美の名著である。

東京市神田區錦町一丁目 培風館（振替東京三二六一七）

漫畫

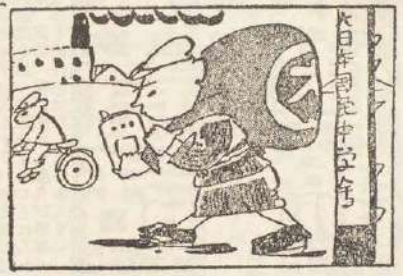
信吉ノ成功

(一)小學校ヲソツゲフシタ、ダタサンノコドモタチハ、イヨイヨノナカヘトビダシタ。ヨノナカハ小學校ニキルトキトモツタホド、タノシクハナカツタ。

小學校卒業後

いろ〳〵な事情で上の學校へ行くことの出來ない諸君は今スグ本會へ入會して日本一の中學講義錄で勉强なさい。

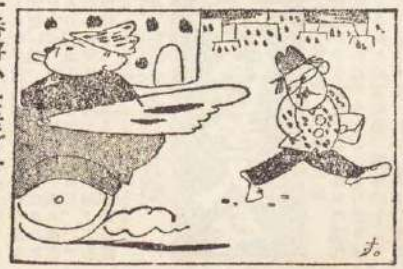
(二)シンキチハ、ウチガビンボウナタメ、デツチニダサレタカ、ヒトニマケナイキデ、ダイニホンコクミンチユウガククミイニニフクワイシテ、コーギロクデベンキヨウシタ。



僅か一ケ年半で中學卒業の學力と資格が得られる。

(三)ヨサクモ、ウチノテツダイシシナガラ、コーギロクデベンキヨウシタガ、トンキチトヨタロウハ、トウキヨウノ、チユウガクヘハイツテモ、ナマケテ、カツドウシヤシン、バカリミテアルイタ。

(四)二十ネンホドタツテ、シンキチハ、リツパナカイシヤノシヤチヨウニナリ、ヨサクハソンカイギインニナツタガ、トンキチトヨタロウハ、オナサケテ、シンキチノカイシヤニツカツテモラツテイル



◎入會するのには今が一番好いときです

講義錄見本　規則書甲込み次第無代で進呈します

東京駿河臺　**大日本國民中學會**

電話神田壹壹壹壹・壹壹壹貳・壹壹壹參　振替東京四二〇〇番

西川勉先生著・田ヶ谷信乃畫伯　裝幀挿畫

メエテルリンク童話集 青い鳥 外四篇

四六版箱入美本
内容三三〇頁
三色版外挿畫數葉
定價一圓五十錢
送料十八錢

目次

青い鳥
尼の身替り
犬
青髯爺さん
十二人の盲人

メエテルリンク作の**青い鳥**は、全世界を通じて誰知らぬ者もない有名な芝居です。その芝居をお伽噺風に直したのが西洋にあります。しかしそれは、そのまゝでは日本の子供の心にはシックリ合ひません。それで著者はいろ〳〵考へて、一つの童話に作り上げたのがこの本です。この青い鳥の外、(**尼の身替り**、**青髯爺さん**、**十二人の盲人**)の三篇も元は芝居なのです。さすがに多くある芝居の中から、著者が選り拔いただけ、それ〳〵に面白い味のあるものです。それから(**犬**)の一篇は、メエテルリンクの可愛がつてゐたブルドックのことを書いたもので、よく出來てゐます。それを著者自身が子犬を育てたことがあるので、犬の生ひ立ちの話を、面白く童話にしたのです。各家庭に於ての、子供の讀み物として、實に絶好の本であることを、自慢をしておすゝめいたします。

東京市神田區錦町一丁目一番地(神田橋際)

米本書店

振替口座東京五二三三九番

金の星社編 世界少年少女名著大系

四六判箱入頗美本・定價各冊金九十錢・送料金六錢

第一編 ロビンソン漂流記

船乘りになつて、遠い國々へ行きたいとあこがれてゐたロビンソンが、途中難船に出遇ひ、無人島へ流されて、艱難辛苦して再び本國へ歸つて來るまでの長い物語りです。世界の少年少女に、これ程澤山讀まれた本にないといはれてゐる位有名なお話です。ですからこの本を讀まない者は一生の不幸だとさへいはれてゐます。

第二編 ナポレオン物語

『ナポレオン物語』は即ちナポレオンの一代記です。地中海の小島コルシカに生れた一少年ボナパルトが、ナポレオン大帝と稱せられて歐洲を征服する榮華の時代から、遂に南大西洋の一孤島セントヘレナで淋しい死を遂げるまでの變化極りない物語をわかり易く面白く書いたものです。一代の英雄ナポレオンの面影は、必ずや讀者に大きな印象を與へるでせう。

第三編 ドン・キホーテ

イスパニヤのある村にクイザノといふ男がありましたが、毎日騎士の物語りを讀んでゐる内に、氣が少し變になつて、自分が騎士になつたやうに思ひ込んでしまひ、痩馬に乘つて本當に武者修業の旅に出かけ、到るところで大失敗をして、遂にあはれな死をとげるといふ痛快な物語です。

第四編 コロンブス物語

アメリカ大陸を發見したコロンブスの物語りです。コロンブスが苦心慘憺して遂にアメリカ大陸を發見するまでの變化極りない運命と、大きな努力には、感嘆せずにはゐられません。その面白い物語りです。偉人の傳記として、實に興味深い物語りです。

第五編 大人國小人國めぐり ガリバー旅行記

ガリバーが、難船して小人島に漂着し、それより大人國を巡ぐる、滑稽と奇拔な面白い物語りで、そこに人生の諷刺や、大なる教訓が含まれてゐます。世の少年少女諸君に、興味と有益なる讀物として此の本をおすゝめいたします。

金の星社編 世界少年少女名著大系

四六判箱入頗美本・定價各冊金九十錢・送料金六錢

第六編 ロビン・フッド物語

『ロビン・フッド』は英國に昔から傳へられてゐる面白い物語りです。シャーウッドの森に住んで正義のために戰つたロビン・フッドの一生は、始めから終りまで胸をどらせます。惡い知事や僧正や、王をやつゝけて、最後に尼のために毒殺されるあたり、涙なしには讀めません。

第七編 アラビヤン・ナイト

アラビヤに千年餘も傳へられ、世界の珍寶として尊れてゐる物語りです。昔アラビヤに惡い王があつて、毎日一人づゝお妃を迎へては翌日は殺して了ふのを、或日勇敢な婦人が現れて、自ら進んで王の妃となり、その夜から千一夜物語つたのが、この『アラビヤン・ナイト』だといはれてゐます。

第八編 ギリシヤ神話 オデッセー物語

ギリシヤ詩聖ホーマの作であつて、世界中で一番古い、そして一番面白い物語りとして『イリヤード物語』と共に有名な物語りです。トロイの戰爭に遙々海を越えて出征したオデッセーが、神の怒にふれて、途中ありとあらゆる困難に出遇ひ、遂に乞食になつて本國に歸へる迄の物語りです。

第九編 シェークスピヤ物語

有名なシェークスピヤの芝居の中で、童話として面白いものばかり特に選んで物語として書いたものです。『あらし物語』『御窟のまゝ』『ベニスの商人』『がみ〜〜女訓し』『眞夏の夜の夢』『冬物語』等、是非一度は讀んで置くべき物語りです。

第十編 グリム童話

童話の開祖グリムの童話の中で、有名な面白いものばかりを集めて一冊にしたものです。世界各國の少年少女に幾度讀まれても喜ばれるのは、このグリム童話です。

金の星社編 世界少年少女名著大系

四六判箱入頗美本・定價各冊金九十錢・送料金六錢

第十編 繪入 イソップ物語

イソップ物語は古くから知られてゐる話だけに、これまで隨分澤山の本が出てゐる。しかし本書の如く一つのお話に一枚づゝの立派な繪を入れて、お話と繪と兩方で面白く讀ませる本は他にありません。金の星社が最も自慢の本の一つとして、是非皆さんに見ていたゞきたいと思ひます。

第十二編 日本神話 古事記物語

『古事記物語』ほど立派な神話は、恐らく世界の何れの國にもありますまい。實際驚く程立派な面白い物語りです。日本の國がはじめて出來た話から始まつて、神々の誕生や、天照大神や、大國主の命の話や、それからずつと末になつて、雄略天皇の御代までの神話です。

第十三編 子供キリスト傳 新約物語

二千年後の今日まで、世界の救世主としてあがめられてゐるイエス・キリストの一生を聖書に從つて最も正確に書いた本です。この尊い人の一生を子供のために書いたものは外にありません。本書は、わが國にあらはれた最初の子供キリスト傳として廣く世に紹介したいと思ひます。

第十四編 西遊記

支那から印度へ、はる〳〵お經を取りに行つた玄奘三藏の旅を書いたもので、お供には悟空、八戒、沙悟淨の三人の怪物がついて行き、途中で樣々の魔物に出遇ふ物語です。一度讀み出したら本を置けない世界的の名作です。この本を讀まない者も不幸です。

第十五編 ローマ英雄物語

ローマの英雄を中心にして、ローマの歴史を面白く書いたものであります。はじめローマの國を開いたロミュラスとレマスの不思議な生立物語りからはじまつて、ハンニバルやシーザーなどの大英雄の物語などが順々に現れて來て、息もつけぬ程面白い物語です。

金の星社編 世界少年少女名著大系

四六判箱入頗美本・定價各冊金九十錢・送料金六錢

第十六編 聖書物語

舊約聖書は世界の最も古い文學として、これ程立派なものは無いと云はれてゐます。宗教の物語りとしても、又一つの物語りとしても、こんなに面白いものはありません。信仰深いアブラハム・イサクの嫁えらび。鹽の柱になつたロトの妻。鹿の肉の好きなイサク。ヨセフの夢判斷。實に面白い物語です。

第十七編 奴隷トム物語

奴隷トム物語を讀んで泣かぬ人は魂のない人です。此の物語は米國で盛んに使はれてゐた哀れな奴隷達の生活を書いたものです。深く神を信じ、如何なる苦しい生活にも、よく堪え忍んで行つた主人公トムの一生をお讀み下さい。世界まれに見る偉大な傑作です。

第十八編 ギリシヤ英雄物語

ギリシヤ英雄の傳記は、少年少女の讀み物として一度讀み出したら止められない程に興味のある物語りです。本篇はこれまで、世間に出てゐるものと違つて、有名な世界的文豪キングスレーが、自分の愛兒のために著した名著を、土臺にして書いたものだけに、最も理想的なものとして誇ることの出きるものです。

第十九編 アンデルセン童話

世界第一の童話作家アンデルセンの童話は何人も讀んで置かなければならいほど尊い世界の寶です。本書に收めた作は、アンデルセンの作の中でも最も代表的なものになつてゐる立派な作ばかりですから、本書一册を讀めばアンデルセンの作が全部わかるわけです。立派な傑作集です。

第二十編 小公子

『小公子』の名は古くから知られてゐます。はかない運命に生れた小公子の物語りは、少年少女の必讀書として世界各國に推薦されてゐるものです。早く父の死に出遇ひ、神の如く清き母の手に育くられながら、頑迷なる祖父の家に引取られ、絶えず悲劇の主人公として活躍する小公子の運命の物語りを御一讀下さい。

金の星社編 世界少年少女名著大系

四六判箱入頗美本・定價各冊金九十錢・送料金六錢

第二十一編　母を尋ねて三千里

本書は伊太利文豪アミチスの世界的名作『クオレ』の中から最も面白い部分を選んで一冊としたものであります。三千里の道をはるゝゝと母を尋ねて行く少年の哀話もあり、又難破船に乘り込んで自分の身を棄てゝ少女を救ふ勇敢な少年の話もあり、各篇とも一生涯忘れ難い物語ばかりです。少年少女必讀の書。

第二十二編　不思議國めぐり

或る所に、アリスと云ふおてんば少女がありました。夏の日の事、お姉さんと一緒に草原に行つて草をつんでゐるうちにつひウトゝゝと眠つてしまひました。その間にアリスは、一つの不思議なゝゝ夢を見たのです。覺めてからのち、アリスはお姉様にその話をしました。一體それは、どんな夢だつたでせうか？

第二十三編　青い鳥

メーテルリンクの傑作『青い鳥』の名を知らぬ者はありますまい。原作は劇になつてゐますが、本書はそれをお話風に書改めました。青い鳥の影を追つて夜の宮、來來の國と移り歩くチルチル、ミチル二人の姿は、ちようど活動寫眞でも見るかのように、皆様の眼の前に浮ぶでせう。何人も一讀すべき名著であります。

第二十四編　爲朝一代記

鎮西八郎爲朝！この名を聞いて胸を躍らさぬ少年はありますまい。また、英雄崇拜の雄々しい精神に燃えてゐる少女諸君にも、この爲朝の一代記は、如何にスバラシイ魅力をもつ事でせう。本書の表紙畫の、海に向つて弓を射てゐる爲朝の勇姿は、讀ますして本書の内容を語つてゐます。金の昆社自慢の本として、お薦めします。

第二十五編　ハムレット

ハムレットは、世界第一の芝居の作者シエークスピヤの傑作です。デンマークの王子ハムレットの一生にからまる悲しき運命を描いたもので、ハムレットが如何に自分の父母を慕愛したか、又、可憐な花の如きオフエリヤ姫のはかない最後など、一讀、再讀、いよゝゝ感深を覺える名篇であります。

金の星社編 世界少年少女名著大系

四六判箱入頗美本・定價各冊金九十錢・送料金六錢

第二十六編　新ロビンソン漂流記

スキスが船出した汽船が大暴風雨に出遇ひ、南洋の一無人島で難破して了ひ、一家族六人の者だけが助かります。その内四人は少年でした。この六人の者が救ひの船の來るまでの二年間の話を書いたのが此の物語で、野生で、實に面白いお話です。

第二十七編　ポムペイ最後の日

伊太利のベスビヤス山の大噴火と共に地の下に埋つてしまつたポムペイの町のお話です。妖術使や魔女のやうな悪い人間が出て來ると共に、可憐な盲目の花賣娘や、崇の最のやうな美女や、義俠に富む勇士などが現れて、歴史にながく傳へられる『ポムペイ最後の日』のあはれにして、悲しい物語となつてゐます。

第二十八編　少年鼓手

ナポレオンが伊太利征服のために雪のアルプスを越えた時、雪だれにあひました。その時だれの下から勇敢にも軍鼓を打つた『少年鼓手』の話は世界に有名です。かういふ勇敢な少年少女のお話ばかり十篇を集めたのが此の本ですから、血をどり、涙ながれるものばかりです。

第二十九編　ロミオとジユリエツト

有名なシエークスピヤの作つたロミオとジユリエツト二人の物語りは、最初から終りまで泣かずには讀めない程あはれにして、はかないものです。最後は二人の死によつて終る悲劇中の悲劇ですから、あはれな話、悲しい話の好きな方々には、きつと大歡迎を受けます。是非讀んでいただきたい世界の悲劇です。

第三十編　竹取物語

『竹取物語』は世界にほこることの出來る日本の大文學です。日本中で一番美しいかぐや姫なる自分のお線さんにしようとして、大勢の皇子やおくげ様たちが競爭をします。しかし、かぐや姫は月の世界の人であつて、かりに此の世に生れたのですから、五色の雲に乘つて月の世界へと歸つてしまふのです。

金の星社發行名著目録

偉人傳大系 第一編
ジャンヌ・ダルク
大木雄三先生著。有名なオルレアンの少女ジャンヌ、ダルクが奮ひ立つて母國を滅亡から救ふ勇壯な物語りである。各頁とも血ひたたり、涙ながるゝ悲劇的物語である。
金九十錢 送料金六錢

偉人傳大系 第二編
ローマ英雄シーザー
霜田史光先生著。シーザーは古代の大英雄である。世界歴史を通じてシーザー程の英雄は幾人と數へる程しかない。そのシーザーの變化極りない運命を書いたのが本書である。
金九十錢 送料金六錢

偉人傳大系 第三編
ネルソン
三井信義先生著。トラファルガアの海戰に名譽の死を遂げたネルソンの傳記です。その國を愛する赤心と、己の責任を重んずる觀念は偉大なる教訓を讀者に與へます。何人も一讀すべき名著です。
金九十錢 送料金六錢

偉人傳大系 第四編
リンコルン
久米敏一先生著。最も優れた立志傳として、この『リンコン傳』をおすゝめする。紙一枚、ペン先一ツ買へぬ貧しいリンコルンが、如何にして大統領の榮位をかち得たか。本書を讀まぬ者は一生の不幸である。
金九十錢 送料金六錢

偉人傳大系 第五編
太閤秀吉
三島霜川先生著。日本の英雄として世界に誇り得るものは、太閤秀吉である。本書は、秀吉の一生をあらゆる歴史書を參考にして研究し、それを三島先生の名筆によつて面白く書現したものである。
金九十錢 送料金六錢

金の星社發行名著目録

偉人傳大系 第六編
ナイチンゲール
入交縕一郎先生著。女神様のやうに氣高い心を持つたナイチンゲールの一生を書いた本です。この人の傳記を讀んだものは誰でも、本當に清い心の人になります。少年少女の爲に書れたはじめての本です。
金九十錢 送料金六錢

偉人傳大系 第七編
ワシントン
三井信義先生著。アメリカを獨立させて最初の大統領になつた大偉人ワシントンの傳記です。艱難辛苦して遂に偉い人となつたワシントンのお話は、誰が讀んでも勇氣をつけられます。
金九十錢 送料金六錢

偉人傳大系 第八編
大楠公
三島霜川先生著。楠正成の傳記を正しく書いた本として、これ以上の本はありません。この本を讀んだ人は成程と正成の偉かつた事に感じるでせう。面白くてそして本當の正成のお話が解る本です。
金九十錢 送料金六錢

偉人傳大系 第九編
ロシア英雄ピーター大帝
大月喜一郎先生著。文明に後れてゐたロシヤを盛んにする爲めに、帝王の身であり乍ら造船職工にまでなり、また自分の子や妻までも殺さなければならなくなつた變化極りないピーター大帝の物語です
金九十錢 送料金六錢

偉人傳大系 第十編
お釋迦様
齋藤佐次郎先生著。お釋迦様ほど立派な方は恐らくこの世の中に生れなかつたでせう。そのお釋迦様の一生をわかりやすく、面白く、そして正しく傳へたのが此の本です。得がたい本です。
金九十錢 送料金六錢

（通卷第八拾六號）

好評嘖々たるアディア書院の兒童圖書館叢書

加藤武雄著（最新刊）

長篇童話 子鳥は空に

★ ★ ★

有名な「小公子」飜案です。輕妙なる著者の靈筆は、日本の小公子「義雄さん」と、母信子夫人を圍ぐる祖父の岩村老伯爵、愛犬タマルその他數々の數奇な運命を開卷第一頁から最後の美しい結尾曲まで一息もつかせず物語つてゐる。

四六版 一八〇頁 定價一圓三十錢 送料（書留）十二錢

童話 すゐじん樣の話（最新刊）齋田喬著 一、四〇

傳說 竹取物語（最新刊）田中耕耘編 一、四〇

童話 地獄の門（忽三版）山村暮鳥著 一、六〇

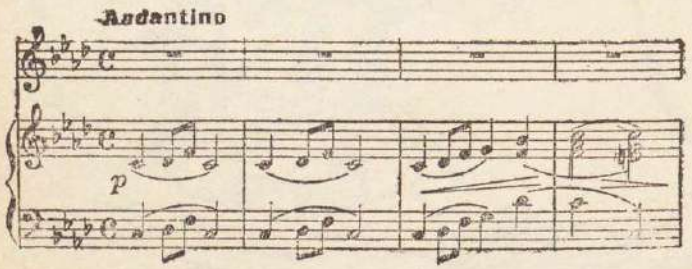
物語（トルストイの童話）四つの話（忽四版）田尾一一編 一、四〇

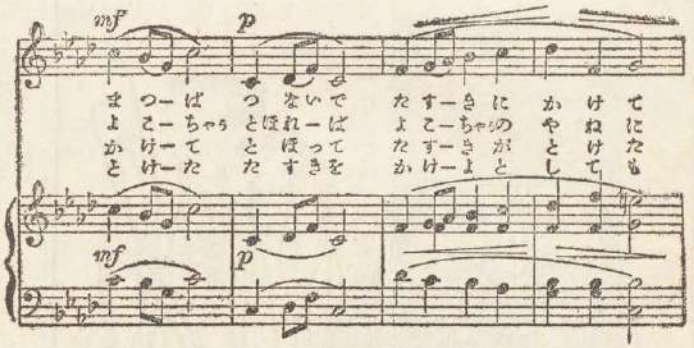
發兌 東京市牛込區東山町四一 アディア書院 電話牛込三六五六 振替東京一五四二六三

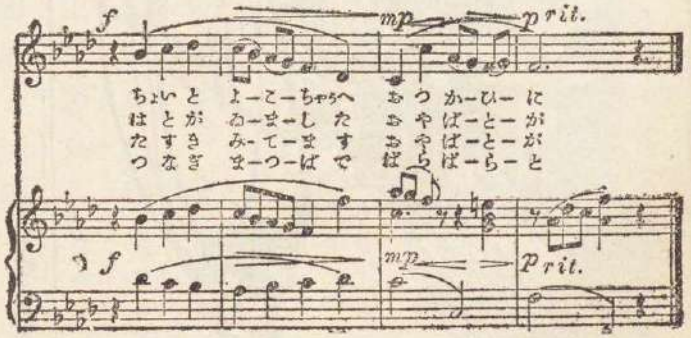
つなぎ松葉

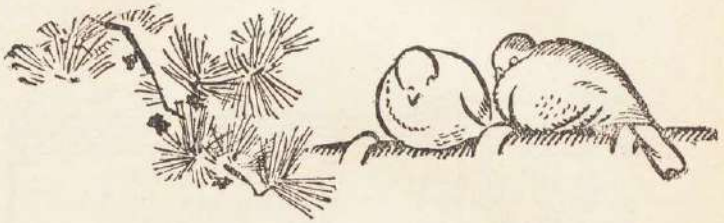
作曲　本居長世

作詞　野口雨情









つなぎ松葉

野口雨情

寺内萬治郎畫

松葉つないて
褌にかけて
ちよいと横町へ
お使ひに
横町通れば
横町の屋根に

鳩がゐました
親鳩が
駈けて通つて
褌がとけた
褌見てます
親鳩が
とけた褌を
掛けようとしても
つなぎ松葉で
ばらばらと

魔術奥義書

西條八十

岡本きいち画

一

宿屋のことをスペイン語では『ポザダ』と言ひます。今でもスペインの田舎を旅行する人たちはそのポザダの汚ないことをこぼしますが、このお話の起つた千七百何年頃のスペインの宿屋と言つたら、それはお話にならないひどいもので、旅商人も騾馬も土間のやうなところにひとつになつて、寢るていらくでした。

でも中でごく上等な家には、厩とひろい食堂があり、屋根裏が室と名のつく幾つかのものに仕切られ、お客はそこへ梯子でのぼつて行くやうになつてゐました。

生れは貴族で、しかも學士の立派な肩書を持ちながら、現在所持品とては身につけた古洋服一着と、ふところの二圓なにがししきや無いまで、尾羽うち枯したドン・ジョゼが、ある雨の日、ふらり泊つた

のはさうした一軒の宿屋でした。

ジョゼはまだ三十を越したか越さないかの男ですが、學校を出てから、今までいろ〳〵な職業に手を出して見ました。が、どれもこれも失敗で、たうとう自分に愛想がつき、せめてはこのレオンの町に大きな土地を持つてゐる昔馴染のアロンゾオ・マンドス伯爵を頼つて、そこで何かに使つて貰はうかと考へ、さてこそこの町へやつて來たのでした。

ところが宿屋の閾をまたぐなり、そこの主人に聞いた第一の知らせが、ジョゼをひどくがつかりさせてしまひました。それは、かんじんの目あてのそのアロンゾオ伯爵が一月ほど以前に病氣で亡つたといふことでした。

『アロンゾオ伯爵が死んだ？』

ジョゼは自分の耳を疑ふやうに、その言葉を口に出して繰返して見ました。

しかし宿の主人のつけ足すところによれば、その

お葬式もすでに濟み、自分も當日お墓までお送りして來たとのことですから、話にまちがひのある筈はありませんでした。

『遙々それだけを目的にこの土地へやつて來たのに何といふ間の惡いことだらう！』

ジョゼはあまりの落膽に泣きたくなりながら、それでも念のためその後の伯爵家の樣子などを訊いてみますと、なんでも伯爵の相續人にはその甥と云ふのがなり、甥は相續すると直ぐに、その大きな土地を賣物にするやうに公證人に頼んだので、何でも明日あたりそれが競賣になる筈だといふ話でした。

『して見ると、誰かがその土地を買ひうけるに違ひない。さうすればきつとまたその土地の面倒を見る人間が入用になるだらう。ことによると、そこへ使つて貰へるかも知れない。』

ジョゼは困つたあげく、こんな心細い希望を絞りだしました。さうして、とにかくその地所の賣買が

濟むまでこの町に止まつて樣子を見ようと決心しました。

『いやまつたく、それがいちばんいゝ御思案でございますよ。へい、自分で申しちや何ですが、ご贔屓下された通り、室の設備萬端が手前どものやうに整つた、またお賄ひに十分注意してある宿屋はこの近邊どこへ行つたつてございませんからな。』

と、宿屋の主人が小鼻をひよこつかせて傍から勸めました。

ジョゼが案内されて自分の室といふのに通つて見ると、なるほど設備萬端が主人の云ふとほり整つてるのに感心しました。と云ふのは、四つしきや無い窓の玻璃が、三枚まで跡方なく缺けてゐて、居ながらに、ひろびろした空が眺められました。その窓枠は荒繩に括られて、天井にぶら下つてゐました。

家具はと云ふと、汚ない蔓蒲團ののつた木製の跛な椅子が一脚、それにぐら〳〵するテイブルが置いてあるぎり、ただ主人のいつた行屆いた設備と云ふのはこれかなと想はれるのは、ところどころ壁に龜裂われが出來たり、穴が明いてゐたりしてゐるのが、うまく戸棚や押入れの代理になつて、そこへ擦褸布だの、缺けた德利だの、そのほかがらくた道具がごた〳〵突込んであることでした。中でもジョゼが驚いたのはその突込まれてゐる品物の中に、書物や古い手帳らしいものが混つてゐることでした。

宿屋の主人は、これらの品物は、近頃までこの室に永く滯在してゐた或る老つた學者が殘して行つたものだと說明しました。なんでもその學者は、この室に籠つてて本を讀んだり、書物をしたり、また時々は化學の奇妙な實驗をやつたりして靜かに暮してゐたのですが、どうも素性がムーア人らしいと云ふので、ムーア人と名のつく者は一切この國から追出せといふ王樣のお布告が崇つて、或日その學者は、急に、荷物も何もかも置きぱなしにして、この町を立退くことを命ぜられたのだといふ話でした。

ひとり室にとり殘されて、ドン・ジョゼは、玻璃の無い窓から小雨の絲の白くひかる大空を眺めて、深いもの思ひに耽りました。學校を出てから今日まで何に手を出しても成功したためしの無い腑甲斐ない自分、――その失敗つづきの生涯が寂しく省みられました。世の中には自分とちがつてひどく幸運な男があつて、かなり何をやつても思ひ通りになる、さうしてトン・トン拍子に出世をしてしまふ者もある。さうした身の上に一日でもなつたらどんなに樂しからう、――などと考へると、あてにもならない事をあてにして、この知りあいも無い遠い町に、ぼんやり逗留してゐる自分が、しみ〴〵情けなくなつてきました。

で、ぢつと考へてゐれば考へてゐるほど、氣がむしやくしやしてくるので、何か氣をほかに移さうと、とりあへず壁の割目に突込んである例のムーア人の學者の殘した書物を一冊ひつぱり出して見ました。見るとそれはラテン語で書いた宇宙の組織を委しく說明した本でした。ジョゼは更にもう一冊の本を引き出して見ました。それは星によつて人の運命を占ふ術を論じた本でした。かうしてあちこちの本を拾ひ讀みしてゐるうちに、ジョゼにはこの室に逗留してゐたその老つた學者と云ふのが、魔法の研究家であることがわかりました。と云ふのは、この時代のスペインには、すべての物を黃金に變へたり、又自分の姿を、魚や鳥や獸やなどに自由に變へるやうな不思議な妖術を研究する人が尠くなかつたからです。

さう氣がつくと面白くなつて、ジョゼは今度は書物をやめて、手帳の方を檢めにかかりました。それには、忍びの術、雲を起し雨を降らせる術、變身の術、など、さま〴〵な魔法の永年の研究が、その實驗の結果と共に、細々と認められてゐましたが、そ

のうち、何やら錫の小さい筒に大切さうに納められた紙きれが、手帳の間に挾んで在るのを見つけました。

『はて、何だらう？』

かう思つて、ジョゼはその羊皮紙をとりだし、讀んで見ました。

と、何よりもまづ、その第一行目に書いてある文字が、ハッと彼の心を躍らせました。

汝の望みを
即座に遂げる法

それにはかうはつきり書いてあるではあり

ませんか！　ジョゼは、それを見て飛上るほど、うれしくなりました。

『なんてすばらしい術だらう。自分の望みを即座に遂げる法なんて！　もしこの法がうまく行きや、この地球の上の幸福はおれの獨占になつてしまふんだ。だが待てよ、有難い術だけに、覺えるのによほど骨が折れるんぢや無いかな？』

ジョゼは嬉しさと心配で、おつかなびつくり、次の行に書いてある文字を讀んで見ました。が、想つたほどそれは難かしい方法ではありませんでした。いや、頗る簡單で、それを行へる身になるには、そこに書いてある祈禱の文句を三度唱へてから、錫の筒の底に入つてゐる罎の藥を飲めばいいとのことでした。

ジョゼは、さつそく筒の底を探して小さい罎を見つけました。栓をとつて覗いて見ると、中にうす黑い、妙な匂ひのする水藥のやうなものが、ちよつぴり入つてゐました。

『これを飲めばいいんだな。』

さう思ひながらも、ジョゼはさすがに氣怯れがしました。なにしろ一向得體の知れない藥なのですから、飲んだあと自分の身體が、果してどうなるものか、そこはまつたく無鐵砲な冒險でした。

念のため、ジョゼは、何か罎に貼札でもはつて在りやしないかと。檢めてみました。すると、貼つて在ることは在りましたが、それは藥の處方書ではなくて、もう古びてほとんど讀めなくなつてゐる格言のやうなものでした。

われらにその力無きは、愚かなる行ひを爲さしめざるやうとの神の御配慮なり。

と、書いてありました。

『ハ、ア、ムーア人の魔法使先生。お爺さんだけにここにお說教を書いてゐるな。つまりこれはやたらの者がこの藥を飲まないやうにとの心づかひから

だな。ところがおれは、今どうしてもこの藥を飲まなけりやならないやうなどん底にゐるのだ。もしこの藥を飲んで、おれの生命が無くなればそれは運命だ。何一つ思ひとほりにならない世の中にのめ〳〵いつまでも生きてゐるより、一かばちかやつて見て、うまく行けば天下取り。わるく行つて死骸になる方がよほど男らしいやりかただ。どれひとつ勇氣を起してやつて見ろ。』

ジョゼはかう呟いて、その小さな罎を持つて立上り、祈りの文句を三度唱へると同時に、それを口にあてて、

『一！　二！　三！』

で、ぐつと飲みほしました。

と、その藥が喉を通つたか通らないうちに、彼の兩眼の瞼は自づから垂れふさがり、かれはそこへ仆れたなり、昏々と死んだやうになつて眠てしまひました。

× × × × × × ×

ドン・ジョゼはそれから何時間眠りつゞけたのか自分にはさつぱり分りませんでした。ただ窓からさし込む日の光が眼に泌みて、ふと人心地に返りました。

かれは骨を折つてやつと、床の上から起き上りましたが、氣分はちやうど午睡を急に呼起された時のやうに、朧朦としてゐました。

が、そのうち少しづつ、頭腦がはつきりして來ました。眼の前に轉がつてゐる古びた羊皮紙と、錫の筒と、空虛になつた小さい罎とが、前夜の出來事を、彼に想ひ出させました。

ジョゼは呆れたやうに急に、自分の身のまはりを眺めました。

『なんだい、何もかも舊の儘だ。ムーア人の魔法使の處方なんてちつとも利きやしないぢやないか。』

かれは咄差にさう想ひました。

『おれはやつぱり着古しのボロ服を着て、空財布を抱いて、この汚ない屋根裏で目をさましたんだ。さう思ふと、昨夜の喜びもやつぱり、糠喜びだつたのか！　おれは又、この空財布が、金貨でいつぱいになつてでも呉れゝばいいと念じながら、あの藥を飲んだんだつたが……。』

と、情なさうに呟きながら、ジョゼが何心なくズボンの衣匣の空財布に手をやつて見ると、びつくりしました。それは誰が入れたのか、金貨と覺しいかたいもので、いつぱいに重く膨れ上つてゐました。

（つゞく）

竹田の からくり

水島爾保布
作並畫

大阪の竹田近江のからくりといへば、誰知らぬものもない有名なものでありました。

高さ三寸の棗の蓋がひとりでに開いて中からひよつこり唐子人形が跳び出す。人形のせいは一寸八分ほどしかないが、目鼻の形手足の振り、さながらに生きてゐるかと思ふばかり、それが棗の周圍をぐるりと一廻りすると、あいてゐた蓋が又ひとりでにパツタリふさる。その上へ跳び上つて手拍子足拍子面白く踊り出す。逆立ちをしたり、とんぼ返へりを打つたり、さまざまの身振りを見せた上に、懐から豆つ粒のやうな鞠を三つも四つも取り出して手玉にとる。……

さうかと思ふと、木作りの卵が二つに割れて雛子が出る。その雛子が見てゐるうちに羽色が變る。忽のうちに立派な鶏冠が生へ立派な尾が生へて立派な牝鶏の姿になる。さうして羽ばたきをする。首を動かす。やがて一聲高くコケコツコーと鳴く。……

何れも木で拵へたもので、體の中には歯車とぜんまいが仕かけてある。これが人間業かと驚き呆れるやうな細い細工だ。世界はどれ程廣いか知らないが、恐らくこんな名人は二人とあるまい。——と、そのからくりを見た人は云ふ迄もなく、見ない人までが傳へきいてとり〴〵に評判しました。

その頃西の國に大さう珍らしいものの好きな殿様がありました。ふとある時家來たちの話してゐる竹田近江の評判を耳にして、矢も楯もたまらぬ程その不思議なからくり、珍らしい細工が見たくなりました。見るばかりではなく、さういふものを手に入れたくなつたのです。

さつそくに家來の右近といふのを、竹田近江の許へ使ひにやつて、からくり細工の注文をする事になりました。

『天下に只一つしかないといふものが欲しい。代金は望みのまゝにつかはす。充分に骨を折つて拵へるやう取り計らへ。明日とはいはず即刻に出立しろ。』

と、性急な命令です。

右近は御前を下ると直ぐとその場から支度をとゝのへて、大阪へと旅立ちました。

竹田近江は向ふ二た月といふ日限で、殿様の注文をこゝろよく引き受けました。細工の品揃へ入用として手つけに二百金、あとは滞りなく出來上つてお手渡しの際にといふ約束、右近はその旨をさつそく狀にして、お國表へ飛脚を立て、自分は注文のかゝらくり細工が出來上る迄二た月の間を大阪で暮すことになりました。旅の手當は殿様から充分に貰つて來てゐる。これと極つた用事があるんでない。誠に呑氣この上なし結構過ぎたお役目です。しかも性來の剽輕ものと來てゐるので、こんな時こそとばかり、今日は道頓堀の芝居、あすは住吉さんへお詣り、淀川筋を船で上れば京の都もつい雜作なく行けるといつたわけで、物見遊山の間に期限の二た月はばたばたと立つて了ひました。

てうどその二た月が明日で切れるといふ日に、近江の許から使ひが來ました。

『御注文の細工ものが漸く出來上りました。直にお手渡し申し上げた上に、尙一通り口づから御傳授致さねばならぬ儀が御座ります。御足勞恐れ入りまするが明日早朝に御越し下さいますやう……。』との口上です。

あくる朝を待ちかねて、右近は近江の許を訪れました。

近江の手からうやうやしく右近の前に置かれたものは、……高さが五寸あるかなし、はゞが一尺ぐらゐ、見るから粗末な白木の箱が一つ、たゞそれ丈でありました。

『箱の中には屋形船が一艘仕込んで御座ります。それを盥になり、又は他の器になりに滿たした水の上に浮べて御覽下さい。どういふ事、どういふ働きを致しまするかは、申し上げませぬが、兎に角に今迄に私の拵へたからくり……ざつと百通り餘りは御座いますが、それ等とは全く趣向を變へたもの、御注文通り天下只一つのものといつても恥かしからぬ品だと、私は考へて居ります。』

近江は、その木箱に向つて少し意外だといはぬばかりの顏、怪訝な顏、いく分疑ひを持つた顏をしてゐる右近に、かういつたのでありました。

『なる程、……さうで御座るか、中には船が入つてゐるので御座るな、一寸内見させては下さらぬか。』

と、右近はその箱に手をかけようとしました。

『いや、お待ち下さい。只御覽になる分には差し支へもありませぬが、からくりをお試しになるのは、殿様の御目にかける迄は御差し控へ下さい。これ丈は必ずお忘れにならぬやう。お歸りの途中などには殊更に心にかけて嚴しく御守り下さらぬと、とんでもない間違ひに相成ります。決して細工には手を觸ぬやう、お供廻りの衆にも屹度お申しおき下さい。』

と、近江は堅くいましめました。

二た月あまりの物見遊山に殆ど太平樂の限りをつくして來た右近には、瀨戸内海の美しい景色、靜かな海の色、麗な島山の姿も、來た時程には珍らしくはなく、來た時のやうな愉快な氣持ちで眺め暮してばかりはゐられませんでした。海にも山にもうまい食べものにも酒にも飽き果てたとでもいつた風で、ともすれば自分で自分を持ちあつかひ兼ねるやうな退屈さが、だんだんと骨身にこたへて來ました。

『こんなことと知つたら、船に乘るのではなかつた。』

などと思ふことさへありました。日にならし八里十里と歩いてゐたら、朝から欠伸をしつゞけるなんて事はよもや無かつたらう。碁を打たうにも對手はなし、將棋をささうにも駒も盤も無い。……と右近はそんな事を腹の中で呟きながら、けだる氣に遠く

近く海の上に浮んでゐる島々の影や船の影を眺めてゐました。その時、ふいと……竹田近江の拵へた御座船の姿が、幻のやうに、ちらりと眼を掠め頭を掠めて通り過ぎました。

『近江からはあれ程堅くいましめられてゐるが、……高がからくり仕掛けの慰みもの、一度や二度、下見をしたところで、どうしてそれが知れやう、よしんば知れたところで……さうだ。本來ならばあれを近江から受取る前に、箱を開いてどういふ品でどういふ仕掛けのものか、とつくりと吟味しなければならなかつた筈だ。なる程近江は、天下の大名人かも知れないが、出來上つたあの品が果していふ通り天下無類のものかどうかは一應見ての上でなければ判らない。萬一子供の手遊同樣他愛もない品であつた時には、自分としての責任はどうなる。腹を切らねばならない。……一通り見ておく必要はある。さうだ。さうだ。』

と、右近は一人でさう決めて、直ぐと近江から受取つた木箱の蓋の封じ目を解きました。中には近江のいつた通り朱塗りに金具の勾欄を渡し、目覺めるやうな美しい彩色と細い彫刻を施した屋形船が入つて居りました。右近は近江に云はれたやうに、有り合せの小盥に水を張つて、その上にその屋形船を浮べてじつと見てゐました。

と、その屋形船は盥の縁に沿つて廻り出しました。まるで中に人がゐて幾丁かの艪をそろへて漕いでゐるやうな具合に、ゆらりゆらりと動いて行くのです。しばらくするとその動きがぴたりと止りました。すると屋形の廻りに張り廻してあつた金襴の幔幕がすると〳〵と卷上りました。中には豆人形のやうな、男や女がずらりと並んで酒盛りをしてゐる體、扇拍子を取るもの、三味線を彈くもの、笛を吹くもの、太鼓や鼓を打つもの、それが一度に動き出したのであります。と、座の隅にゐた二人の少女が一禮して立あがりました。手にはめい〳〵扇をもつてゐました。長い袂を振り動かして差す手引く手も鮮かに舞ひはじめました。やがてしてそれが終る。一座はやんややんやと喝采する模樣。パチ〳〵と手をたゝく音が聞えると同時に、さつと幕が卷き落ちました。その幕の間から、今度は一人の小坊主が出て來ました。船のへさきに立つて、あたりの景色を眺めて居ましたが、しばらくすると腰にはさんだ長い烟管を拔き取りました。烟草入れから烟草を一つまみ出してその烟管につめました。その手の器用さどう見ても普通の人間と少しの變りがありません。で、それを口へくはへる。パツと一ぷく吸ひ込むと、口からは白い烟がすうと靡き出ました。一吸ひ吸ひ終つて、ポンとはたく。雁首から小さな火玉がコロ〳〵と、

船の板敷の上へころげ落ちた……と思ふとたんに、シューといふ音と一しよに線香花火のやうな火花、バチ〳〵と四方に散亂する間もなく、屋形船は忽ちに一かたまりの白い烟となつて了ひました。あつと思ふ間に、影も形も無くなつて了ひました。

驚いたのは右近です。どんなに驚いても慌てゝも、青くなつても赤くなつてももう追ひつきません。

『このまゝ御前にどうして立ち歸れやう。……。』

やゝしばらくしてから氣がつきました。切腹より外に途はない。――と、さう覺悟を極めたのであります。

愈々覺悟をきめて立あがると、俄に世の中がからりと明るくなつたやうな氣がしました。

『腹を切るなどは容易いこと、いつだつて出來る。何も早まる事はない。』

持ち前の剽輕な性質が俄によみがへつたのでありました。

右近は惡びれもせずに殿樣の前へ出て、惡びれもせずに申し上げました。

『竹田近江のからくりは滯りなく仕上りまして御座ります。白木作りの箱が一つ、中には美事な屋形船が一艘仕込んで御座りました。水に浮べますると、その船中に數多の男女が現はれ船遊山の體を見せるのださうに御座ります。ところが、愈々歸國に際し天保山より船に移しまする際、はしけ人足の疎匆からその箱を海の中に取り落して了ひました。素破こそ一大事と、直ぐさま水練達者の者を海中に潜らせ、かたはら網まで入れてそこらあたりを探らせましたが、かいくれ所在が判りませぬ。憎つくき奴はその人足奴に御座ります。その場で手打ちにもと、既に刀の束に手をかけましたが、いやいや、かうなる事も、もとはといへばすべて手前の不行屆きからに御座ります。のみならず、如何に殿の御心にかけられた大切な品とはいへ、高がからくり細工の慰み道具、お家重代の寶といふでは御座りませぬ。人の命にくらべるにしては餘りに輕る過ぎはしませんまいかと、その場でふと氣がつきました次第、そのまま差し許るしてつかはしました。』

『ウム、……。』

殿樣は腹立しさをじつと堪へて、息づまつたやうな顏をして默つて右近のいふことを聞いてゐました。

『そこで手前又考へまして御座ります。これはもう一度近江を訪ね、事情を話して再度の細工を依頼した方がよい。近江と雖も必ず引き受けてくれるに相違ない。……』

と既に引返さうと即座に船を戻しましたが、その船の半ばに又しても考へ直しまして御座ります。』

『よく考へるな。何と考へた。』

『たとへ近江には承引致したとしても、既に二た月の期間も切れて居ります。如何に延引致しましても、尚一月半月

とは猶豫なりかねます。さすれば自然細工も疎漏になりがち、殿樣のお望みのやうな天下一品の勝れたものは出來かねませう。既に天下一品でもないものを天下一品として御前に御披露致す事は、近江の名譽にかけても氣の毒、又手前としても君を欺く事に當ります。誠に心外の至りに御座ります。……と、思ひ返へしまして、一旦戻りかけたはしけを又もや本船へと漕ぎ着けさせました。さりながらこの度の不首尾はもとより手前一身にかゝる事、誠に輕からぬ罪と辨へては居りまする。かやうの場合腹切つてお詫び申し上げる事ももとより能く存じては居りまするが、尙篤と考へますると、この切腹も滅多には出來兼ねまする。と申しますのは若しこの場で手前が腹掻き切つて相果てさすると、事は自然世上の噂にも上る道理、竹田のからくりが紛失した爲めに侍一人が腹切つた、などと取り沙汰の果ては、やがて君のおもの好きに對して兎や角と口さがなく申す輩も無いとは限りませぬ。これが隣國への聽へなど致しては餘り好ましからぬ儀と考へまして御座ります。結局、手前の切腹は却つて君を世上の口の端にかけるやうな事に相成りまする。……と思ひ直してかくはおめおめと立ち歸つた次第で御座ります。とはいへ御成敗は君の御心次第に如何やうに遊ばされませうとも手前有難くお受け致しまする。」

と、平伏しました。

「う……む。」

とばかり殿樣はやゝしばらく思案の體でしたが、やがて、ハタと膝をお叩きになりました。

「右近、よく練めてくれた。禮をいふぞ。」

と、頭を下げられました。

（をはり）

漂流二百三十日

久米舷一

岩岡ともと枝畫

一、出帆

私は、英國ロンドンに住んでゐる、カザロンと云ふ者です。

今から三十年ほど前、私は商用で、アメリカのチャーレストンと云ふ港へ參りました。その歸り途に、私は、よせばいゝのに、わざと小さい帆前船に乘つて、英國へ歸らうとしたのです。

私が或る日の事、チャーレストン港の棧橋を散歩してゐますと、ふと、一艘の美しい帆前船に眼がつきました。大きさは八百噸ほどもありませうか、白と青のペンキで綺麗にお化粧した、見るからに氣持のいゝ、速力の速さうな船でした。

『こんな船に乘つて、大海原を馳つたらどんなにいゝ氣持だらう。』

私はかう思ふと、もう矢も楯も堪らなくなつて、直ぐにその船室の一ッを借りる約束をしました。

船の名は、チャンセラーと云ひました。

『いゝ名だな。』

私は名前まで氣に入つてしまひました。

チャンセラー號は九月十五日の朝、いよ〳〵碇をあげて、英國のリバープールに向つて出帆しました。

飛は、そよ〳〵と氣持よく吹いてゐます。船は、主帆と中帆に、ハチ切れるように風を孕んでおだやかな波の上を滑るように走りました。

チャンセラー號の積荷の大部分は、アメリカ產の綿花です。綿は御承知の通り量ばつたものですから、まづ、水壓機械にかけて、量を小さくして置いて、船底に積み込むのです。我々はこの「綿」の爲に、のち〳〵飛んでもない災難に、あはなければなりませんでした。

船には、二十一人の船員と、八人の船客とが乘つてゐました。

船長は、ヘンリーと云つて、五十ばかりの背の低い、あまり風采のあがらぬ男でした。この人は、しよつちう兩手をズボンの隱しに突つこんで、首を右肩の方へ曲げてゐる癖があります。眼はドンヨリと曇つて、いつもキヨロ〳〵四邊を見廻してゐるところを見ると、どうも落付きのない、決斷力の鈍い人のように思はれます。

『何か船中に事件が起きた場合に、この人は無事にそれを切り拔けて行く事が出來るだらうか。』

私は、かう疑はずにはゐられませんでした。併し、ヘンリーは、もう三十年の餘も、海の上で暮して來た男です。チャンセラー號の船長です。この船に乘つてゐる以上、私共は何處までも船長に、信頼して、その命令に從はねばなりません。

實を云ふと、チャンセラー號には、もう一人、船長らしい人が居ります。

『この人に船長の服を着せて見たいなア。』

と思はれる人がをります。それは、一等運轉士のカーチスです。

カーチスは、體格の堂々とした見るからに頼もしさうな男です。額は廣く、鼻すじはとほり、兩肩の肉附きのいゝ事など、まるで拳闘の選手のようです。言葉は、ハツキリと透きとほつて、朗らかな聲で高く笑ふ時などには、どんな人でも愉快にせずには置かないでせう。私は、たッた初め一日で、すッかりカーチスが好きになつてしまひました。

船客の中に、フランスの紳士でレイモンド親子と云ふ二人連れがゐます。父親は、もう七十餘りの

背の高い、上品な老人です。ふさふさとした白い顎ひげを持つてゐます。その子供は、アンドレと云つて、まだ二十才ばかりの青年です。このアンドレは、可哀さうに右足がビッコなのです。何時も杖にすがつて、危なつかしく甲板の上を散歩してゐます。その後から父親のレイモンド氏が、何時も悲しさうな顔をして從いて行きました。父親にとつては、この不具の子が、可哀さうで堪らなかつたのです。アンドレは、本を讀むのが好きで、將來は小説家になりたい希望ださうです。

その他、チャンセラー號には、まだ〳〵御紹介したい人が澤山居ります。併し人の名前などは、皆樣が御退窟の事と思ひますから、後に讓ります。

二、怪しき物音

毎日、穏やかな日が續きました。船は張れるだけ帆を張つて、一時間約十一海里の速力で、東へ東へと進行を續けました。

後部甲板は、我々船客達の集會所のようになつてゐました。海の見晴らせる涼しい所に腰をかけて互ひに面白い話をして、きやッきやと笑ひ合つてゐました。

出帆してから十二日目の朝、運轉士カーチスは、チャンセラー號の現在の位置を報告しました。それによると、船は今、北緯三十二度三十分、西經六十五度の處にあつて、丁度、ベルムダ群島の沖合に差かゝつてゐるとの事でした。

その晩の事です。

私は自分の船室へ歸つて、蠟燭の光りで一時ばかり讀書した後、寢に就きました。すると真夜中に何か騒々しい物音に、ふと眼を覺されました。

丁度私の頭の上にあたる甲板の上を、水夫たちが急がしく走り廻る音が聞えます。それにつれて、何か物を引ずッて行くような、重重しい音が聞えます。かと思ふと、二等運轉士の聲らしく、

『早く、早く、……何をしてゐるんだ！』

と嗄鳴る聲も聞えて來ます。

私は、どうしたんだらうと思つて、直ぐに寢卷の上へ外套を着こんで、甲板へ出て行きました。

船は波のウネリの度に大きく前後にゆれてをります。

私は、甲板の上を透して見ました。併し、もう此の時は、出來事は濟んだと見えて、あたりはヒッソリとしてゐます。水夫等の影も見えません。

その時、防水マントを着けた二等運轉士が、私の傍を通りかゝりました。併し私が聲をかけやうとする間もなく、さッさと梯子段を駆け下りて、自分の室へ這入つてしまひました。

『一體、どうしたつて云ふんだらう。』

私は幾ら考へても分りませんでした。

次の朝、私は集會所で、レイモンド氏に會ひました。

『レイモンドさん。貴方は昨晩の騒ぎを知つていらつしやいますか？』

海は暗く、星影も見えません。夜になつて風が出たと見えて、

私は見るなり聲をかけました。
『騒ぎ？　あゝ、あの眞夜中の物音ですか。……えゝ、よく知つてをります。たしか、一時過ぎだつたでせう。私は餘ッぽど起きて見ようかと思ひましたが、アンドレがよく寢てをりますので、そのままぢいッとしてをりました。』
丁度そこへ、運轉士のカーチスが上つて來ました。私は直ぐ傍へ行つて、昨晩の物音は何んであつたかと訊ねました。
カーチスは、チラと私の顏を見ましたが、やがて事もなげに、
『あゝ、あれですか。なアに、なんでもないんです。たゞ一寸夜中に風の向が變つたものですからね帆の位置を變えたまでの事です。』
と云つて、平氣な顏をしてゐます。私はそれ以上、問ひたゞす事も出來ませんでした。
ところが、その翌日の夕方の事です。
私が夕御飯をすませて、甲板の上を散歩してゐますと、艙口の所で、何か騒がしい物音が聞えました。
私は、直ぐに驅けつけて見ました。艙口と云ふのは、船底の荷物倉へ降りて行く入口の事です。いつも、チャンと蓋がかぶせてあります。
五六人の水夫達は、帆木綿を水で濕めして、艙口の隙間々々につめこんでゐました。
私は、傍にゐたカーチスに向つて、
『どうしたんです、何事が起つたのです。』
と訊ねました。
カーチスはこの前と同じようにチラと私の顏を見ました。そしてニコ〳〵笑ひながら、
『いえ、なんでもないんですよ。波が荒くなつて來たものですからね、船底の綿に濕氣が這入つてはいけないと思つて、隙間を塞いでゐるのです。』
と、答へました。
併し私は其時、
『はゝア、何か隱してゐる事があるな。』
と感づきました。
『船底に何か事件が起きたに違ひ

ない。』
私はかう思ひました。けれどそれが何んであるか、幾ら考へても分りませんでした。
それから三日目の朝早くの事です。
私は、馬鹿に船室の中が蒸暑いので眼が覺めました。この二三日は、船が低緯度の所へ來たためかひどく蒸暑くなりました。
私は戸をあけて、甲板へ出ました。
東の空は橙色に染つて、今まさに太陽が顏を出さうと云ふ所です。曉方の冷いやりとした潮風が心地よく頰をなでて行きました。
甲板の上では、もう五六人の水夫達が、カーチスに指圖されて、せッせとポンプを働らかせてゐました。ポンプで海水を汲み上げて甲板の上を掃除するのです。
汲み上げられた水は、瀧のように甲板へ吐き出されて、あたりは淺い川のようになつてゐます。
私はそれを見て、自分も跣足になつて、お手傳ひをして見ようと思ひました。子供の頃の、水遊びの愉快さを思ひ出したのでした。
私は靴をぬいで、素足のまゝ甲板へ降りました。その途端、私は『あッ。』と一聲、思はず叫聲をあげました。足の裏が、燒けつくように熱かつたのです。
私の叫聲を聞いて、水夫達は一齊にこつちを見ました。カーチスは、ポンプの傍を離れて、私の方へやつて來ました。そして、私の兩手を取つて、ぢいッと私の顏を見ながら、
『カザロンさん。船には今、火事が起つてゐるのです。』
と云ひました。

三　眼を大きく見張つて

私は驚きの餘り、言も云ふ事が出來ずに、眼を大きく見張つて、カーチスの顏を見つめました。
『船底の倉庫に、今火事が起きてゐるのです。』カーチスは、もう一度繰りかへして云ひました。
『火事は、今から五日前に發見されました。……さうです。貴方が怪しい物音を聞いたと仰しやつた

事がありましたね。あの晩の事です。水夫の一人が私の所へ驅けつけて、艙口から白い煙りが出てゐると云ふのです。私は大急ぎで驅けつけて見ました。なるほど、確かに船底の綿が燃えてゐるのに違ひありません。併し、運の惡い事に、その火事の起きてゐる場所が船の中央部なのです。我々は到底その場所まで降りて行く事は出來ません。私は仕方なく、艙口の隙間と云ふ隙間を、ピッタリと帆木綿で詰めさせました。かうして、空氣を倉庫へ入れないようにして自然と火の消えるのを待つより他仕方がないのです。火は一時消えたようすでしたが、この二三日、又々燃え上つたと見えて、甲板の上などは熱さの爲めに、靴なしでは到底歩るかれません。……カザロンさん。私は皆さんをお騷がせしてはいけないと思つて、今まで此事は、確く秘密にしてゐたのです。』

と、カーチスは云ひました。

『一體、一體、……。』

と、私は其時、漸く聲を出しました。

『一體、どうして火事が起つたのです。水夫の粗忽火ですか。』

『いえ、さうではありません。綿花の自然燃燒です。綿が充分に乾燥してゐないと、船艙内の空氣の流通の惡いところで、自然と火を起すと云ふのは、よくある事です。私は、二三度その例を聞きました。』

『まアいゝ、まアいゝ。そんな火事の起きた原因などはどうだつていゝ。それより何故早く消さないのです。甲板に穴をあけてどしどし水をつぎ込んだらいゝぢやありませんか。』

『いや、それは駄目です。今、甲板に穴をあけたら、火は新しい空氣の爲に勢ひが盛んになつて、忽ち、甲板へ燃えぬけてしまふでせう。空氣を船倉内に入れると云ふ事は、今の所、最も恐ろしい事です。』

『ぢやア、なぜ早く船を岸につけないのです！　貴方は私共を見殺しにしてしまふのですか！　貴方はこの船の運轉士ぢやありませんか！』

私は眞赤になつて叫びました。カーチスがいやに落附いてゐるのが、癪に障つてたまらなかつたのです。

『まア、カザロンさん。靜かにして下さい。船には、御婦人の方もゐられます事ゆえ、この事は成るべく、愈々と云ふ時まで秘密にして置きたいと思ひます。私は決して惡いやうには取りはからひません。現に、船は今、方向を變えて南米のダイヤナに向つて一直線に走つてゐるのです。風の向が變らない限り、我々は約二十日間で陸地へ着く事が出來ます。』

と、カーチスは云ひました。

私はもう云ひやうのない怖れのために、膝頭がガタ〳〵と慄へるのを感じました。

我々の立場は容易ならぬものになつて來ました。

チャンセラー號は、今や航海者の最も恐れる船火事に罹つてゐるのです。

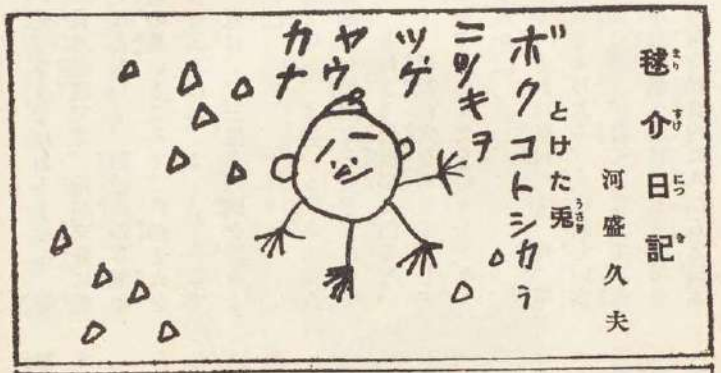
あと二十日！

その間チャンセラー號は、果して無事に持ちこたへる事が出來るでせうか。

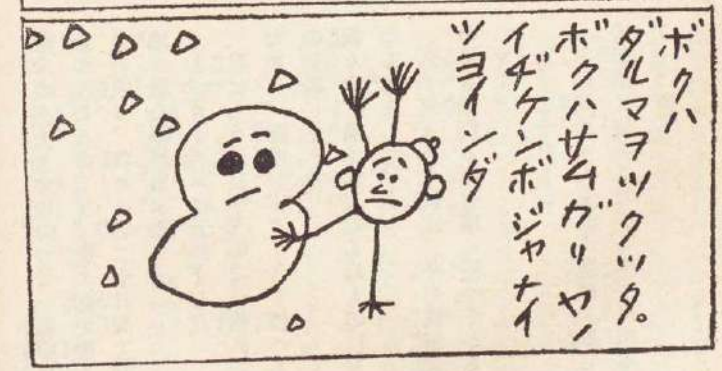
（つゞく）

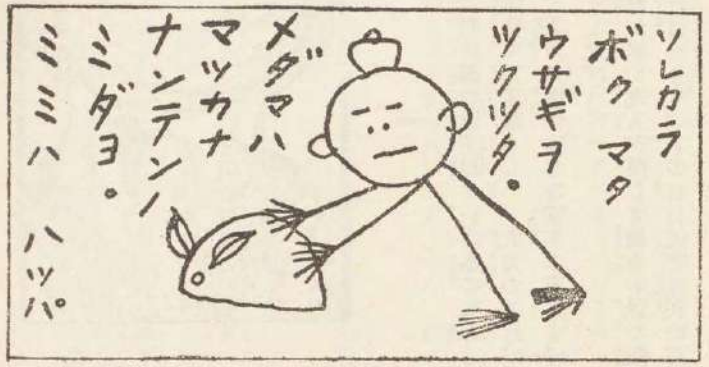
穂介日記

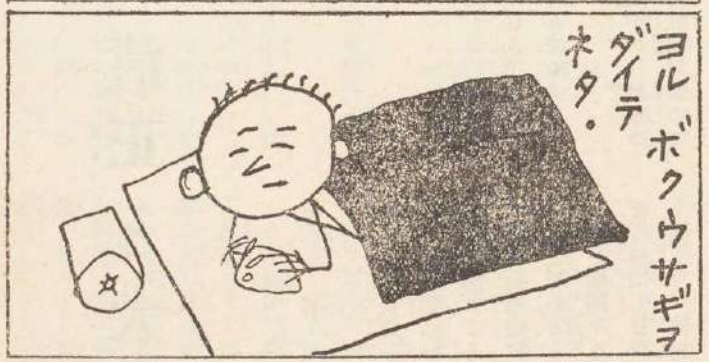
河盛久夫


ボクコトシカウ
とけた兎
ニツキヲ
ツケ
ヤウ
カナ

ケフハ
ユキガフツタ。
タクサンツモツタ。


ボクハ
ダルマヲツクツタ。
ボクハサムガリヤノ
イヂケンボジャナイ
ツヨインダ


ソレカラ
ボク マタ
ウサギヲ
ツクツタ。
メダマハ
マツカナ
ナンテンノ
ミダヨ。
ミミハ ハツパ


ヨル ボクウサギヲ
ダイテ
ネタ。

ソシタラ ボク
ネショウベンヲ
シチマツタラシイ。
ミタラウサギハ
ヰナカツタ。
タツプン
ビツクリシテ
ニゲテツテ
シマツタンダラウ。

清正と大力男

小富士逸郎

羽島古山畫

一

昔肥後國の横手村といふ處に五郎といふ、正直で疳癪持で又素晴らしい、大力の百姓が住んでゐました。人々は彼のことを横手の五郎と呼んでおそれてゐました。

秋が來て刈入が濟むと鎮守の社で賑やかな秋祭りが行はれます。その日は近郷近在の百姓達が集つて奉納の宮角力をとることが習慣になつてゐました。

そして五郎はいつもこの宮角力の大關で、誰一人五郎に打勝つことの出來るものは居ませんでした。横手村の百姓達はこれが大の自慢で、平常でも一寸したことがあると直ぐ、

『何を愚圖々々云ふんだい。俺の村には五郎が居るぞ。口惜しければ秋祭りの角力で來い。』と言つた樣な調子で、他村の者を輕蔑するので、近郷の百姓達

は大變殘念がつてゐました。それで、今年こそは今年こそはと強い若者を出して見ますが、とても五郎の大力には足許へさへ寄りつけませんでした。

そこで他村の連中は、こつそり集つて協議をこらしました。

『どうもあの五郎の奴を打負かさないと俺達の村は何時までも横手村に頭が上らぬ。何かいい考はないか。』

一人の百姓が言ひますと、この堺隈で智慧者と言はれた忠太といふ老人が進み出て、

『俺がいい方法を知つてゐる。何しろ五郎といふ奴は化物見たいに強い奴だから、尋常一樣に勝負をしては、例ひ村の者全體でかかつたところで勝味はない。そこで少し卑怯の樣だが、お城下から柔術取りを傭つて來るのだ。幸ひ此間俺が町へ出たら俺の知つてゐる家に、西國の武士で柔術の先生が泊つてゐた。あの先生を賴んで來たら、五郎がどんなに力ばかり強くても一息に捻り潰されて了ふだらう。どうだ此考は。』

『成程名案だ。』

一人の百姓が膝を打つて答へました。

『なあに一寸聞くと卑怯な樣だが、これも横手村の高慢の鼻をへし折つて此の近在の村を平和にするためのことだ、決して遠慮することはいらん。』

『そうだ〳〵。ではそれに決め樣。』

得手勝手な理屈をつけて皆讃成して、忠太に柔術の先生を賴ませることにしました。

さて其日が參りました。晴れた空に、鎮守の森から打鳴らす太鼓の音が威勢よく響渡つて、押寄せて來る人の群は黒山の樣に社の境内にたかりました。そして年に一度の宮角力がいよ〳〵始まつて、番組が進むと共に群集の熱狂は高まり、遂に五郎の出る番となりました。出る者〳〵片端から手玉にとつて投出して了ふ五郎の力倆の鮮かさに、敵も味方もわ

い〳〵喚き騒いでゐますと、やがてのそ〳〵と土俵に現はれたのは骨格逞ましい大男です。ついぞ見慣れぬ顔ですから五郎も見物人もおやおやと思つてゐますと、その男はさつさと行司に名乗りを上げさせて勝負を挑みました。

行司がさつと軍配を引くと、五郎はやつと掛聲諸共起上り相手の胸をどんとつきました。相手は素早く身をかはしてそれを避け、手を取るより早く逆に捻じ上げ様とします。

『こいつは柔術取りだ、逆手を使ふぞ。』

五郎は思はず叫びました。一體角力では決して柔術の逆手などは使つてならぬもので、これを使つた者は負けなのです。ところが相手は知らぬ顔でいよいよ烈しく締め上げます。

『畜生！　卑怯な眞似をするな。』

正直な五郎はかつと怒り立ちました。と同時に、滿身に力を入れてうーむと足で土俵を踏むと、四本柱はぐら〳〵と搖れ始め、土俵の土は裂け凹んでまるで大地震が始まつた様です。餘りの事に驚いた相手がはつと手を放すと、躓掛つた五郎がぐわんと平手で横面を張りましたので、もんどり打つて宙にかへると、そのまゝ、血へどを吐いて死んで了ひました。

見物人は一齊にワアーッと鬨の聲をあげました。併し治まらないのは五郎です

『他村の奴等よくも人をだまして柔術取りを出したな。それ程俺が憎くければ皆でかかつて來い、片端から踏潰すぞ。』

さあ五郎がかん〳〵になつて怒り出したから事です。行司は蒼くなつて慄え上り、他村の連中はこそこそと逃出し、目出度いお祭りは散々の有様。五郎は尚地團駄踏んで憤慨してゐます。すると、さしも高く盛上げた土俵の土がぼく〳〵と凹んで、低い窪みになつて了ひました。

その日は忠太を始め他村の者達が手をついて詫びたので、やつと事なく治まりました。柔術取りの先生だけが、『何を土百姓、なんぼ力が強くても知れたものだ』と、多寡をくくり、忠太から頼まれて好い氣になつて出掛けたばかりに、飛んでもない目に會つて死損をした譯です。

二

それから後の五郎の名はいよ〳〵近郷に響渡りました。併し五郎は、格別それを鼻にもかけず眞面目に働いてゐますと、或年のこと領主の加藤清正公からお達しがあつて、五郎は川普請の人夫に召出されました。

それは、この平野を貫いて流れてゐる球磨川が、毎年梅雨の頃になると洪水を起して田畠を荒らし、百姓達が大變難儀をするので、清正公がそれを不憫に思つて、球磨川に大きな堤を築くことを計畫し、

力の強い若者を集めて山から石を切出させることにしたのです。そして五郎もその役目を仰せつかつたのです。

五郎はよく働きました。見上げる樣な大岩石をしつかと強い綱で結へ、それを首にかけて平氣でのそのそ運ぶ姿は、まるで仁王樣の再來の樣に見えました。役人達もこれには膽をつぶし、それからそれへと噂を立てましたので、わざ〳〵城下から數多の人が五郎の働くのを見物に來るといふ騷ぎで、噂は遂に清正公の御耳にまで達しました。

元來勇ましいことが御飯よりも好きで、朝鮮征伐の時には鬼將軍の名を轟かした程の清正公は、この話を聞くと大變面白がつて、わざ〳〵自分で普請の監督に出掛けて見ると、成程噂に違はぬ大力無双です。しかも蔭日向なく熱心に働いてゐる樣子にほとほと感心して、五郎の側につか〳〵と歩み寄つて、『おい、横手村の五郎とやら。仲々お前は力が強い喃。一體何人力位あるか。』と尋ねました。五郎は讃められて顔を赤くし乍ら頭をかきました。

『未だ私は自分の力を精一杯出し切つたことがございませんから、何人力あるかは存じません。けれ共本當に一生懸命になりましたら、お城の石垣位は一人で押崩せ樣と存じます。』

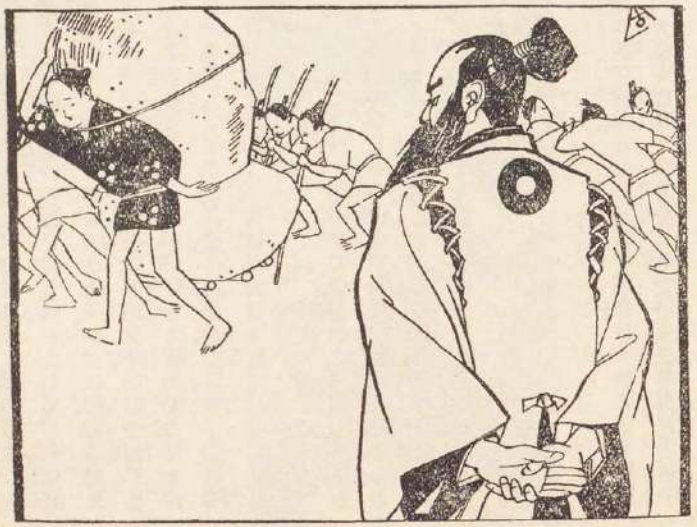
この答に清正公は思はず苦笑をしました。清正公は城を築くことの名人で、殊にその石垣は日本一と言はれた位、丈夫で巧みに出來てゐました。清正公もまた自分でそれを大變自慢にしてゐるのに、この正直な若者は自分で思つたことを平氣で言つてのけて、殿樣の天狗鼻をへし折つたのです。

『身體が大きいだけあつて、仲々大きなことを申す喃。面白い奴ぢや。併しそんなに休みなしに働くと草疲れるだらう。少し腰でも下ろしたらどうだ。』

『いいえお殿樣、勿體ないことで御座ります。かうして働いてゐるのはお殿樣の御命令とは申し乍ら、つまりは私達のためでございますから、末は此の堤も我物だと思つて樂しみに働くのでございまする。』

今度は清正公は變に險はしい眼つきをして五郎の顔をじろりと見ました。五郎は正直一圖な心から、この川普請はお殿樣が自分達百姓の難儀を救ふためにして下さるのだ。して見れば自分達の物を自分達が築いてゐる樣なものだから、決して怠けたりなどしては濟まない、といふつもりで言つたのですけれ共、清正公はさうは取らなかつたのです。

どうもおかしな奴だ。力はどれ位あるかと問へばお城の石垣位は押崩すといふ、疲れはせぬかと言へば、この堤も末は自分達のものだと思つて樂しみにしてゐるから疲れない、と答へる。さてはあ奴は、自分の力に慢心して、謀反を起し、此國を自分のものにし樣と思つてゐるのだな。そんな氣があるからうつかり妙な返事をしたのに違ない。油斷ならぬ奴だ。と清正公はそんな風に氣を廻して了ひました。



それからといふものは、清正公は五郎のすること爲すことに深い疑ひの眼を注ぎ始めました。一旦疑ひ始めると、何でもないことまでが妙に怪しく見えるもので、とう〳〵清正公は五郎を今の中に殺して了はうと思ひ立ちましたが、何しろ餘り大力だものですから、一寸のことでは手に合ひ相に思へません。そこで何喰はぬ顔で川普請が濟むと直ぐ、

『お前は大變よく働いたから、俺の家來に加へてやる。』と、申しますと、五郎は大喜びで、名も横手五郎と世間の呼名をその儘名乘つて、家來になることになりました。勿論清正公がそんな疑ひを自分にむけて、怖ろしいことを企んでゐるとは、知る由もなかつたのです。

三

清正公の家來になつた横手五郎は、いよ〳〵眞面目に忠義を勵んで、身分は低いが立派な男だと藩中の人々から賞められる樣になりました。そして劍術や柔術の稽古を勵むので、一層強くなりました。五郎がさうなればなる程、清正公の心の中は穩やかでありません。

或日清正公は、加藤家で剛力の噂高い三人の武士を呼んでひそ〳〵と何事かを言ひつけ、其後で五郎を呼出して、

『お前は、近頃龍田山に化物の出る話を知つてゐるか。』と、眞面目な顔で尋ねました。

『いいえ存じません。』

『さうか。實は三匹の鬼が夜な〳〵山に現はれては荒廻つてゐるといふ話ぢや。どうだ、お前ひとつ退治に行つては。』

『かしこまりました。』

五郎は數ある家來の中から自分が撰ばれたことを大變名譽に思つて、早速、其夜龍田山に出掛けました。

低い山ではありますが、隨分樹木が繁つてゐて、晝さへ暗い細路は晩秋の闇に包まれ鼻をつままれても判らぬ位です。梢に光る星の色が何となく神秘に見えて、すうつと吹いて來る風が物凄く身に泌む中を、平氣で山の中腹まで登つて來た五郎は、一つの小さなお堂を見つけて、其處に腰を下ろしました。

すると、ヲォーといふ怪しい聲が森の反響をよんで堂の後ろから起ると、青い火がちら〳〵と樹々の間に見え隱れして、間もなくがんどう提灯を左手に金棒を右手にのそ〳〵と三匹の鬼が現はれました。

『下郎の癖にかやうな場所に來るとは生意氣な奴、それっ！　引裂いて喰つてしまへ

と鬼は叫んで打掛つて來ました。大抵の男ならこの凄い樣子に腰を拔かすところですが、何がさて底拔け力の横手五郎です。びくともせずに打込んだ鐵

棒をうんと拳で受け止めると、十五六貫もあらうと思はれるその鐵棒がかーんと跳返つて了ひました。そこを飛込んで脾腹を輕く蹴上げたので、先頭の鬼は先づ目を廻してぶつ倒れました。しまつたとばかり後の二匹が更に打込んで來るのを物ともせずに鐵棒をひつたくつたので、今度は腰の刀を拔いて切込んで來ましたが、あべこべに鐵棒をぶん廻して見せると、膽を潰したのか一散に逃出しました。

『弱い鬼だ。』五郎が笑乍ら落てゐたがんどう提灯の火で氣絕してゐる鬼を檢べて見ると、豈はからんやそれは鬼の面を被つた加藤家の家來です。びつくりして活を入れてやると息を吹きかへしたので、

『鬼が出るといふのは貴方達の惡戲ですか。私が本氣で毆らなくて幸だつたが、何故こんな馬鹿な眞似を爲さる。』

といふと、武士は面目なげに、

『實はお殿樣がお前を試して見ろといつて言ひつけられたのだ。』

これを聞くと五郎はかつとなりました。そして直ぐお城に引返して清正公の前に出て、

『お殿樣。貴方は家來を大切とはお思ひになりませんか。面白半分にあんなことをさせて、若しどちらかの生命がなくなつたらどうします。私が今夜も少し力を出したら、あの三人は木葉微塵になる筈だつたのです。家來をだまして喜ぶ樣では立派なお殿樣とは言はれませぬ。』

ときめつけました。あの三人一緒なら大丈夫勝つだらうと思つてゐたのがあべこべに子供扱ひにやられて、其上諫言を喰つたので、流石の清正公もぎやふんと參りました。そしてとても力づくのことでは五郎を負かすことは出來ぬと思ひ乍ら、

『俺が惡かつた。一寸坐興でやつた事ぢや。まあさう怒らないでくれ。』

と、好い加減に宥めて歸しました。

その後清正公は、いろ〳〵考へた末、一計を案じ出して、五郎に命じて城中で一番深い井戸の底を浚へさせました。

企みがあるとは知らぬ五郎が井戸の中に這入つてゆくと、清正公は上から大きな岩を投入れて五郎を水底に突落さうとしました。

いきなり大きな岩が降つて來たので、驚いた五郎は石垣の割目に足をかけて、身體を支へつつひよいと片手をあげてそれを受止め、

『誰だこんな卑怯な事をするのは？』

と叫びますと、清正公が勝誇つた聲で、

『誰でもない清正だ。お前が謀反の心があるのを見拔いて計略にかけたのだ。お前は力こそ強いが智慧では俺に勝つまい。アハハ、、、、。』

そしてどん〳〵岩を投入れさせますが、五郎は一向平氣で岩を受止め乍ら、

『情けない事を仰言います。私が何で謀反など大それた考を持ちませう。併しもうかうなつては言ひ開きしたとて、お聞き入れもありますまい。五郎も男です。諦めます。併しお殿樣、私を殺さうとなさるならこんな岩などを投げても駄目でございますよ。譬へ井戸の口まで積重ねたとて、私は片手ではね上げて了ひます。それよりも砂を入れて御覽なさい。砂は力では防げませんから。』

そこで清正公は砂を入れさして、とう〳〵五郎を生埋めにしてしまひました。

清正公は遂に目的を達する事は出來ましたが、五郎の最後の言葉が何だか自分を馬鹿にした樣で、力ばかりか智慧でまでも負けた樣な氣がして、不愉快でなりませんでした。

併し正直な五郎は、この時も或は自分の思つた儘の事を殿樣に申上て、忠義をつくしたつもりだつたかも知れません。

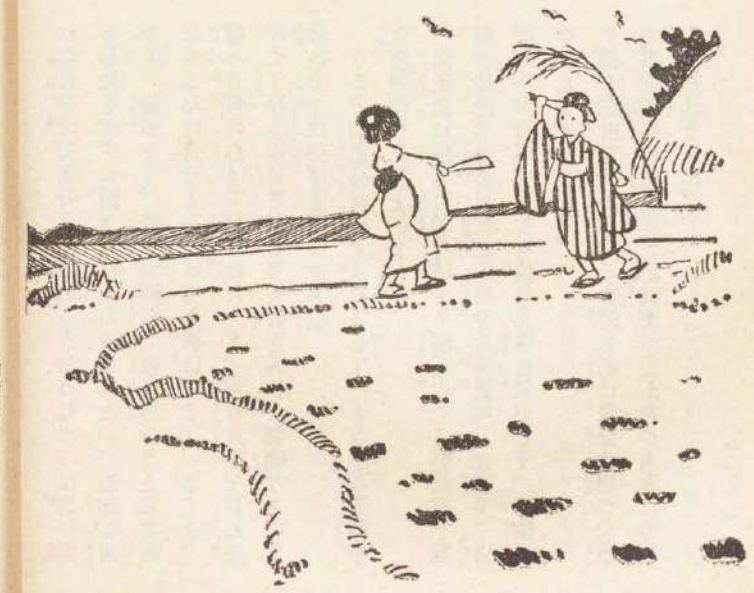
（をはり）

この子のお母さん

杜　仙之介

岩岡とも枝畫

この子のお母さんは
どこまで行った
この子をおいて
あの山越えて
お母さんは里へ
おせつに行った



厩の背戸に
雀が啼いた
日ぐれはちかい
かつこ〳〵鳥
この子のお母さんは
どこまで行った

（註、美濃の國では、年賀に行くことをおせつに行くと云つてゐます。）

日蓮聖人
保積稲天畫
房州小湊の磯村に漁をすこかたは手習師匠をしてゐる夫婦がありました。それは北條時政の爲めに平家再興を企てるものと邪推されて、此處に流された貫名次郎重忠夫妻でした。

重忠は妻梅菊との中に二人の子供があり、貧しい中にも村人から敬はれて不自由なく暮してゐました。そして
貞應元年二月十六日午の刻、玉のやうな男の子が生れました。日輪夢みて懷姙したのに因んで善日麿と名づけました。これが後の日蓮聖人であります。

善日麿は、近所の子供等と遊ぶやうになつても、爭論したことがありません。友達が蜻蛉を釣つたり蛙たいじめたりするのを見てよく誡めました。

大變に神佛を敬ふ心が厚く、親孝行の性質で、十歳ばかりのときは大人のやうな立居振舞でした。善日麿は、或日の夢兩親に私を出家させて愚問をさせて下さいと願みました兩親は大層よろこんでゆるしました。

天福元年五月十二日、善日麿十二歳の時、父の次郎重忠にかれて
喝仰
ざしてゐた清澄寺の住職道善師の許に運れて往つて、徒弟にとねんごろにたのみました。

道善師はよろこんで引受ました。そして名を藥王麿と改めさせました。賢い藥王麿はすん〳〵學業が進んで記憶のいゝことと手蹟の立派なのにみんな舌を捲いて驚きました。

母の梅菊は清澄寺の藥王麿がさぞ親等た墓ふことだらう、もしや病氣しはせぬかと思へば矢も精もたまらず、藥王麿が好物の梨や蕎物なぞ

持つて、清澄寺に登りました。ところが如何せん女人禁制の寺なので這入ることが出來ず、傍の石に腰をかけて思案にくれました。

寺男の知らせでそれと知つた藥王麿は、出て來て母に會ひ取縋つて泣きました。藥王麿は容をあらためて、私が法弟になつたのは、廣い〜すべての人を救ふ爲に親子の恩愛をも斷つたことは御母樣の方がご承知の筈です。

私の事を思つて下さるなら、安否をお尋れ下さぬ方が情と思ひます。と雄々しい決心なのに母は悲哀交々の涙のとめどがありません。

嘉祐三年十月八日、藥王麿十六歳のとき、剃髮して名を是生坊蓮長と改め法衣をまとふ身となりました。

蓮長は諸宗の一切の經を研究しました。佛法と云へば釋迦一代の法なのに、今諸宗に分れていづれも他宗を謗し有樣に疑念を起しました。

清澄寺の本尊虛空藏菩薩に願をたて、諸宗の是非を明かにし、無明の闇を照して、衆生利益を得させんために、私を日本第一の智者となさしめこの大願を成就せしめ給へと二十一日間の斷食して祈りました。

蓮長は滿願の日、虛空藏菩薩から智惠の大寶珠をさづかりました。その時、今迄の疑はとけて、諸宗門の教法は釋尊の聖い御言葉を忘れて勝手な法を加へた凡夫の教法だと悟りました。

魔女の鳥

山本二郎
岩岡とも枝畫

一、提燈祭の夜

支那の都の北京から、日本の里數にして、二三里ばかりも離れたところに、東泰と云ふ小さな村がありました。

昔、ビルマとかシャムとかさういふ南の國々から、都の北京へ出かけて來る旅人たちは、みなこの東泰の村を通るのでした。この村まで來ると、もう北京の都にある、王様の宮殿の美しく輝いてゐるのが、遙か北の方に眺められるのでした。その宮殿と云ふのは、屋根も、柱も、壁も、何處から何處までが、全部陶器で出來てゐたのです。村の人達は、毎日遠くに見える、この王様の宮殿を眺めては、

『ほんとうに、世界中で、こんな立派な景色はまたとないに違ひない。朝日に照らし出された、神々しい、氣高い、殿かな王様の宮殿は、何と云ふ美しさだらう。』と、心からうつとりとして云ふのでした。

この立派な陶器の宮殿には、神統王と云ふ慈悲深い王様が住んで居られました。そして王様は一年に一度、提燈祭の日だけは、美しい噴水や、緑の滴る樹影の道や、雅びやかな橋のある宮殿のお庭を、すつかり開け放して、誰にでも、自由に樂しく遊べるやうに、お許しになるのでした。次のお話も、恰度その提燈祭の、或晩にあつたことなのです。

その夜宮殿は、いつものやうに到る處、提燈で飾られてゐました。さうして紙で拵へた龍が、涼しい風にゆらり〳〵と搖れ動き面白い繪を描いた行燈が、樹の間樹の間につるされて、何とも云へない美しさでした。

一方では、宮殿の中で、宮中の樂人達が、銅鑼や太鼓を、面白く囃し立て、人々の心を浮々とした心地に誘ひました。その間を、綺麗に着飾つた見物人達が、ゾロ〳〵行つたり來たりして、大變な賑ひでしたが、さてその見物の群れの中に、餘り目立たないみすぼらしい身裝をした、二人の親子が居りました。

母親らしい人は、淋しさうな顏付きをして、背の高い、元氣さうな少年と一緒に銀色に光つてゐる、綺麗な玉をごらんなさい。』と云ひました。

『お母さん、この宮殿は、燒き物で出來てゐるつて、眞當ですか？』

と少年は、高く聳えた、宮殿の屋根を眺めて、母親に訊きました。宮殿は、數限りもない提燈の光で、夢のやうに浮き出して、塔は白く銀色に輝き、ゆるやかな曲線をつくつた屋根は、ふだんよりも一層高く、くつきりと秋の空に聳え立つてゐました。

『達麻や、それは眞當なんだよ』

と母は答へました。そして、宮殿の壁のところ〳〵に光つてゐる、紫色の玉を指さして、

『あの、壁に光つてゐる、綺麗な玉をごらんなさい。』と云ひました。

『お母さん、僕達も、眞當にあんな美しい宮殿に住みたいものですねえ。』

少年がさう云つて、何氣なく母の方を振りかへると、その時母は、何事かを考へてゐましたが、急に、我にかへつたやうに、云ふのでした。

『お前は、ほんたうに、あのやうな御殿に住んでゐたのですよ。それも象牙のお城でした。そして、その御殿の飾りは、何でも彼でも、みんな黑檀で出來てゐましたのよ……』

さう云ひかけて、それなり、ふつと默つてしまひました。

すると、それを聞いた達麻の眼は、俄かに例へやうもない輝きで、いつぱいになりました。

『お母さん、それから何うしたのです。もつとお話し下さい。僕は一體、どんな身分なのです。お母さんは、まるで王妃様のやうに、お美しいではありませんか。では、お母さんは、王妃様だつたのではないのですか。』

達麻は、熱心に訊きつゞけましたが、その時、裂けるやうな音響がして、大空に美しい花火が、スーッと二つ打ち上げられました。

それで、二人の話は、ふと途切れました。花火は空の眞中で、も一度パッと擴がつて、それが五色の砂を撒いたやうに、四方に降つて來ました。これを最初の合圖に續いて色々な花火が上りました。火の龍が空一面に現れたり、宮殿の屋根に、黃色い滝がかゝつたり、まるで空は、赤や綠や紫や青や、色とりどりの星で一杯になつたやうでした。

すると、この時、宮殿の望樓の上に、銀蕾蕊と云ふ、一人の王女が、お出ましになりまし

たが、その王女の美しさは、本當に言葉にもつくせない程でした。こんな美しい王女さまを、きつと誰一人、今までに見たものはなかつたでせう。けれども、逢麻は、別段大して驚きもせず、

『れえ、お母さん。お母さんは、あの王女さまの樣に、お美しいではありませんか。』

と云ふのでした。母はたゞ默つて、微笑んだまゝ、それを眺めて居りましたが、

『さあ逢麻や、もうそろ〳〵と歸りませう。まだ早いんだけれど道が遠いのだからね。』

と少年を促しました。二人の家は、此處からは、二三里もあつたのです。それは、あの東春の村だつたのです。

少年は名殘り惜しさうに、宮殿のお庭の、白い大きな門を出て、東春の村の方へ、お母さんと一緒に歸りました。が、その途々、逢麻は先刻ふとお母さんの言つたことを、それからそれへと考へつゞけました。

『若しや僕が、象牙のお山に住んでゐたのだとすると、ひよつとして僕は何處かの國の王子ではないのかしら。』

さう思ふと、ます〳〵その理由が、知りたくて仕方がありません。

『お母さん！ もつと、先つきのお話を、詳しく聞かせて下さい。』

と逢麻は云ひました。

『あゝ、いゝともれ。』と母はうなづいて、『もう、今は、何も彼も話していゝ時が來たのです。ではね、私たちの身の上を、すつかり話して聞かせて上げませう。實はね、先つきあなたが云つた樣に、當本はお母さんは、ビルマの王樣の妃だつたのです。だからあなたは、王子だつたのです。』

『えッ！ 僕が、あの、王子だつたのですつて？』

『さうですとも、立派な王樣の世繼ぎだつたのです。そしてこのお母樣はビルマへ來る前はペルシヤの國の王女だつたのです。私がまだずつと若かつたころは、三國に聞えてゐたくらゐ、美しかつたのですよ。私には深山な、お嫁さんの貰ひてがありましたが、併し、たつた一つを除いては、私の氣に入いたところは、何處にもなかつたのです。そのたつた一つと云ふのは、ビルマの王樣のところだつたのです。それでお母さんはビルマの王樣のところへ、お嫁に行きました。さうしてビルマの國へ行つて、美しい象牙のお城に住むやうになりました。其處でお母さんは、本當に幸福だつたのです。けれども、間もなく、思ひもかけない不幸が來ました。王樣のお母さん、つまりあなたのおばあさんといふのが、私の美しさがかへつて氣に入らなかつたのか、私を憎んで、あなたが生れた時に、とう〳〵私を宮殿から追ひ出してしまひました。おばあさんは、或る日、私のところへ來て、お前達にいゝ贈り物を持つて來て上げたよと云つて、二つの眞球の首飾りを出しました。そして、其の首飾りを一坊やとお前とに、一つゞつ、私が掛けて上げませう。』と云つて、あなたと私の首に、それを巻きつけて呉れました。すると、急に、私の手の拇指が、チク〳〵と痛み出した。

で、私は直ぐ、これは魔法の首飾りだなと氣がついたのです。さう氣が付いたので、私は、あなたの眠つてゐる搖籠の方へ駈け寄つて、あなたを抱き上げ、首から首飾りを取り外さうとしました。すると意地の惡いおばあさんは、怖ろしい聲で、「眞球の洞の黒鳥よ、千里もあるやうな遠いところへ、二人を連れてお行き。」と叫びました。

おばあさんの言葉が、まだ終らないうちに叡ち大きな鳥が、何處からともなく、霹靂の上へ現れました。すると、不思議にも、ぐい〳〵と引つぱられるやうに、私は知らず〳〵、あなたを抱いたまゝ、戸の外へ出て行つたのです。ところがほんの暫くして、大きな鳥の背に乘つて、スウッと、空へ浮び上がつたやうな氣がしましたが、それからは、何うなつたのやら少しも氣がつかなかつたのです。それから、何時間かたつて、ふと氣がついて見ると、私は、何處か知らない土地の淋しい小徑を、歩いてゐたのでした。その時には、もう、あの大鳥も、又首飾りも、すつかり消えてしまつてゐました。私は、あたりを見廻ながら、小徑を歩いて行きました。すると、その徑の端れに、一軒の小さな、小屋がありました。それが、今私たちの住んでゐる、あのお家なのです。すると、その小屋の前まで來ますと、それは〳〵年をとつた支那人のおばあさんが、その中から出て來て、私達を小屋へ入れて呉れました。おばあさんはなか〳〵親切で、私が着てゐた、薄い絹の着物を見ると、すぐに丈夫な着物を呉れました。それから、永い永い間私達を養つて面倒を見てくれたのです。そして、おばあさんは、たうとう亡くなつてしまつたけれど、私達は、まだその小屋に、づつと住みつゞけて、今では、あなたも知つてゐる通り、私が刺繍の仕事をして、やつとその日暮しをしてゐるのです。けれど、逢麻や……私も近頃では、だん〳〵眼が弱くなつて、こゝろぼそく仕方がありません……』

母の長い物語は、それで終りました。さうして悲しさの餘りおろ〳〵と泣いてしまひました。

すると逢麻は、何かしら決心をしたやうに、きつぱりと答へるのでした。

『お母さん、決して御心配なさつてはいけません。僕は、二人の暮せるだけのお金位なら立派に儲けて見せますよ。いえ、それぢかりではありません。僕はきつと、いつか、さうだ、いつかは、お母さんをもう一度、ビルマの王妃様のお位におつけしなければなりません。きつとさうしてお目にかけます。』

逢魔の元氣のいゝ言葉を聞いて、母は嬉しさうに、涙の瀬に笑ひたゝへました。けれども、もう一度、あの象牙の宮殿に住む身の上になれるなどとは、決して思ひもしなかつたのです。

二、壊れた宮殿

こんな話をしながら、やうやく二人が小屋の方へ歸つて來ますと、不意に、何處からともなく、ゴロ〜〜と云ふ恐ろしい地響がして、地面がグラ〜〜と搖れ動きました。

むろんそれは、地震だつたのですが、妙なことには、この東泰の村では、きつと毎晩のやうに、小さい地震があつたのでした。それはもう、すつと以前からのことでしたから村の人達は、すつかり、それになれてしまつて、今では地震だと云つても、誰も大騒ぎをしなくなつてゐました。けれど、それにしても、この夜の地震は、珍らしくいつもの地震よりは強くてその上、又時間も長かつたのでした。

話變つて、其の晩、あの王様の御殿の、提燈祭に集つてゐた人々も、最初のうちは、この地震にも一向平氣で、氣にも止めずに、見事な花火に興じてゐたのでしたが、そのうちに、地震がだん〜〜激しくなつて來て、大きな宮殿の建物が、ゆさ〜〜と搖れ動き、さては高い塔が、ぐら〜〜とゆるぎ出しました。それで、思はずたくさんの人々は、

『そら大變だ！』

と我先に、先を爭つて逃げ出しました。

その時、もう一度强い震動が、グラ〜〜と來たと思ふと、突然、大きな音響とともに、宮殿の一方が、ばら〜〜と壊れて、大きなひび破れが出來ました。お庭では提燈の灯が、波の様に搖れ動いて、そこからは、

『うわあッ！』

と云ふ人々の恐ろしい叫びが起りました。それもその筈です。國中の誇りとしてゐた、あの立派な王様の宮殿が、見る影もなく、亀裂が入つてしまつたのですから。

宮殿の中に居られた神統王は、四十人の、青龍刀を持つた、護衛兵に守られて、そこを逃げ出しましたが、王様の身の圍りは、澤山の松明で、晝のやうに明るく照らされてゐます。

王様が、ホッと一息ついて、綺麗な陶器の宮殿を振りかへつて御覽になりますと、その立派な宮殿の屋根から壁にかけて、今は醜いひび割れが、深く長く刺み込まれてゐるのでした。それを御覽になると、王様は、垂れ下がつた髭の端に、ハラ〜〜と涙をお流しになつて、聲さへ立てゝ、お泣きになりました。

それも道理です。王様にとつては、この宮殿は、命よりも、大事なものだつたのですから

ち。

しかし王様も、やつと氣を取りなほして、今は地震も止んだので、又四十人の護衛兵に守られて、壊れた宮殿の中へ、お這入りになりました。王様は其處で、直ぐに大臣達をお呼びになつて、御相談になりました。

さうして、早速この壊れた宮殿を、修繕すると云ふことに定つたのです。ところが何分にも、それは非常な難しい問題でしたから大臣達も色々智慧を絞つたあげく、一つの方法を考へ出しました。そして早速、大臣たちは、五十枚の紙を出して、それ〜〜そこに王様の、お振れを書き上げました。

やがて、ものゝ半時と經たないうちに、五十人の、大きな鐘を持つた口上云ひが、王様の宮殿を出ました。それから、まだ宮殿の庭に集つて、騒ぎ立てゝ居た人々の中を、思ひ思ひにふれ歩るきました。

口上云ひは、カン、カン、カン、と鐘を叩きながら、人々を集めては、さて、大きな聲で叫びました。

『え！、お集りの皆な様方に、唯今、お情深い國王様からの、お傳へがございました。唯今の恐ろしい大地震で、御覽の通り、立派なこの御殿には、ひびが入つてしまひました。就きまして、王様の仰せられますには、誰でも、この宮殿の破損を繕ろひ、元の通りに、少しもわからないやうに修繕した者は、御褒美として、王女様の銀黄薇姫様のお婿様に、取り立てられるとのことでございます。そのため、私よりの口上、この通りにございます。』

カン、カン、カン、カン、と聲をからして述べ立てました。

一と通り、お庭の中を口上云ひがふれ廻ると、

『さあ、大變な出世の道が、天から降つて來たぞ。』

『よし、俺が一番工夫をして、立派な王様のお婿様に選ばれやう。』

と、見る〜〜うちに、六百人ばかりの若者達が、宮殿につめかけました。

『恐れながら、私が、是非この御修繕役を、お引き受け致したうございます。』

『いや、私こそ、立派に、お氣に入る通り

に、仕遂げて御覽に入れます。』

と、口々にさう云ひました。王様は、それ等の若者を、早く來た者から順々に、すつと長くお庭へ並ばせて、一人一人、その修繕の方法をお問ひになりました。

先づ、列の一番初めに控えてゐた若者が、呼び出されて、王様の前に出ると、うや〜しく一禮して、

『私の考へますには、あの御殿の裂け目へ銀を溶かして、流し込み、其の上から、白い膏の具を塗りましたらば、立派に跡形もなく、元通りになりますと存じます。』

と申し上げました。王様は、それを聞くと、大きく頭を横に振つて、

『いや〜、馬鹿なことを申すものではない。そんなことで修繕が出來ると思ふか。下れ。』

と叱りつけられました。第一番目の若者は頭をかきながら、引き退りました。さて、次に、第二番目に並んでゐた若者が、王様の前へ出ました。

『私は、大きなゴムを用意いたしまして、それをつめ込んで、裂目をふさぎます。』

と申しますと、みなまで聞かず、

『そんなことでは、駄目ぢや〜。下れ、下れッ！』

と追ひ拂つて、第三番目の若者をお呼びになりました。三番目の若者は、しかつめらしい顔付きで、王様の前に進み出ると、叮嚀に一禮して、

『私は、充分自信を以て陛下に申し上げます。私の方法は、確かに成功するものと確信致します。』

『ふむ、早くその方法を言つて見よ。』

『ハイ、私の方法と申しますのは、ほかでもございません。白い膏藥を煉り合せて、それで破損の個所をうづめるのでございます。ハイ。』

と眞面目くさつて云ひました。王様はこんな下らないことを、如何にも悧巧振つて云ひ出したので、すつかり腹を立て、

『馬鹿ッ！ もういゝ。誰か十人の首斬り役人を呼んで來い。そして、今までの三人の若者の首を斬つてしまへッ！』

と怒鳴りつけられました。

王様は、極めて慈悲深い方で、今までに、こんなに怒つたことは、一度もなかつたのでしたが、大事な宮殿が襲れたところへ、若者達の言ふことが、あんまり馬鹿げてゐますので、たうとう眞當に腹を立てゝおしまひになつたのでした。

ところが、今までいゝ加減な慈から、出鱈目に宮殿を修繕すると申し出た、殘りの連中は、

『さあ王様がお怒りになつた。うつかり間違つたことを申し上げて、首を斬られては大變だ。』

と、我一に列を離れて、一目散に逃げ出してしまひました。

王様の折角のお考へもむだになつて、集つた者はみな逃げ散つてしまひましたので、大臣達は、王様が取り卷いて、又心配さうに、顏を見合せて居るばかりでした。

三、怪しい人影

話かはつて、達麻とお母さんとは、急いで、小屋の方へ歸つて行きましたが、思はずお互ひに、

『今日の地震は、毎もとは違つて、隨分大きかつた。』と話しあひました。

二人が恰度小屋へたどり着いた時、一層大きく、ぐら〜と小屋は搖れ動いて、お皿や茶碗は、全部破れてしまひました。その大きな震動は、ちやうどあの王様の宮殿が、破壞した時だつたのです。

けれども、暫くすると、地震も止みましたので、二人は、やがて寢床に入りました。だが達麻は、仲々眠るどころではありません。

と云ふのは、先刻のお母さんのお話で、頭の中が一杯になつてゐたからです。

その時分、小屋の外では、王様の宮殿へ提燈祭を見に行つた人たちが、ぞろ〜と歸つて來ました。そのざわ〜とした話し聲が騒がしく聞えて來ますので、何氣なく達麻が、

それを聞いてゐますと、

『……何と云ふ、ひどい龜裂なんだらう。』

『まあ、王様の御損害は、どれ程だか知れないね。』

『あの美しい、銀薔薇樣が下さるんだと云ふから、大變な御褒美だなあ。』

『だが、あの御殿の龜裂が、修繕出來るだらうか？』

『やり損なへば首が飛ぶんだから、うつかり手が出せないね。』

そんな話が、切れ切れに聞えて來ます。

達麻は、この意味有り氣な話を聞くと、堪らなくなつて、跳ね起きてしまひました。そして、大急ぎで着物を着ると、一目散に戸口へ駈け寄つて、明るい月夜の往來へ飛び出しました。と見ると、村の子供が一人、王様の宮殿から歸つて來ますので、大急ぎで、其の後を追つかけて、

『君、君！ 一體、王様の御殿では、何事が起つたのだい？』と訊きました。

達麻に呼び止められた少年は、吃驚して振りかへりましたが、達麻は、せき込むで、

『れえ、先つきから、みんなの話してゐるの

た、一寸聞いたが、あの宮殿の龜裂だとかそれの修繕だとかつて云ふのは、何のことだれ。』

となほも、訊きつゞけました。

『あゝ、あれはね、先刻の地震で、王樣の宮殿が壊れたんだよ。』

『えッ！　あの宮殿が？』

『さうだよ、そしてね、誰でも、それを修繕したものは、王女の銀蕾薇樣のお婿樣となつて、支那の王子になれるんだよ？』

『え？　本當かね、それは？』

『本當とも、今宮殿で、王樣が口上云ひを出して、集つてゐた者に、お云ひ披らせになつたんだよ。』

『ふむ、さうか。』

それを聞くと、達麻は、血が湧き立つ樣に思ひました。

『さうだ、機會はこの時だ。この時をはづしては、もう出世をする時はない。』

さう思ふと、達麻は何とかして、その陶器の宮殿の大きな龜裂を元の通りに、修繕ふ方法が見付からないものかしらと、色々に考へ始めました。

『もしや僕が、立派に仕上げたら何うだらう。僕は大軍を率き連れて、支那の大陸を、歩き廻ることが出來るのだぞ。いやそんなことよりも、お母さんをもう一度、立派な女王樣にして、おあげ出來るのだ。あゝ何とかして宮殿をもとのとほりにする方法はないのかなあ。』

一生懸命に、そんなことを考へながら、達麻は、小屋の中へ引きかへして、窓にもたれながら、ぼんやりと考へてゐました。窓の外の、明るい月夜の往來では、まだ人影が、澤山あちこちに動いてゐました。樂しさうに戯れたり、手を繋いで踏つたりしてゐる、面白さうな人影を見てゐると、達麻は又、もう一度外へ出て自由に歩きたくて、堪らなくなつて來ました。

其處で、一たん床に就きかけたのを、また起きなほつて、戸の外へ出て行きました。

外へ出ると、そのまゝ思はず、北京の都の方角へ、大急ぎに歩き出しました。そこを暫く行くと、道は大きく曲がつてゐましたが、その曲り角まで來ると、あの、陶器造りの宮殿が、ひよつこりと、目のまへに現れて來るのでした。宮殿は、月光を浴びてうつとりとする程の美しさに、立つてゐましたが、よく見ると、月の光に照らされたその屋根から、白く輝いてゐる壁にかけて見るも恐ろしいひゞ割れが入つて、それが、ずつと下の方までも、喰ひ込んでゐるのでした。

『あゝ、あれだな、成る程、隨分ひどい龜裂が入つたものだなあ。』

と、達麻は、思はず叫びました。

その時です。恰度、達麻が今來た道を、一人の人影が此方に向つて、近寄つて來る樣子でしたが、一心に宮殿を眺めてゐた達麻は、それとは少しも氣づかずに、たゞぼんやりと、立ちつくしてゐるのでした。その人影は、一體何者だつたのでせうか。

（つゞく）

紺蛇の目（推薦）

青柳花明

こんこん蛇の目
紺蛇の目
開けばこんこん
雪がつむ
—遊びに行きましよ
おとなりへ　おとなりへ—

こんこん蛇の目
紺蛇の目
つぼめりやさらさら
雪が散る
—遊びに來ました
今日は　今日は—

これだく

松尾孝輔

寺内萬治郎畫

一

お正月がすむと、田舎では直にお麥の畑の手入れで忙がしくなります。暫くするとよく實つた麥の收獲、それがすむと田植に田の草取り、と言つた風に、農夫たちは一年中忙がしく立働いて居りますが、それでも冬になつて、お米の收獲がすつかり濟んで終ふと、暫くの間仕事が手すきになります。

五郎吉さんの村でも、この野良仕事の手すきの間に、町に出て、種々のご馳走などを買込んで來て、佛事をしてお先祖のお祭をしたりお客を招いて、豊年のお祝をしたりする習慣でした。

ある日のこと、この五郎吉さんの宅に、若い人たちが五六人集まつて、御馳走を喰べながら、賑やかに種々な世間ばなしをして居りました。するとその内の一人が、急に眞面目になつて、

『時に皆の衆、物は相談だが、なんと一つ思ひ切つて、狐退治と出かけようでねえか。』

と言ひ出しました。村から町に出るのに、如何しても通らねばならない道筋に、廣い〳〵芭茅の原があつて、其處には、昔から澤山の狐が棲んで居て、村の人たちが切角買つて來たお魚を捕つたり、連れの人をはぐらかされたり、老人などは、よば〳〵してやつて來ると、屹度道に迷はされるので、村の人たちは、長い間困りきつて居るのでした。

『よからう〳〵。今日も隣り村の與作さんの話によると、あの新田の三平さんが、二三日前の夕方、町の方から笊を擔いで歸つて來ると、何時の間にか、後ろの方の荷を、大分捕られたつてことだ。明日と云はず、今から此の同勢で出かけようでねえか。』

と外の一人が直に賛成をして申しました。

『左樣言へば、俺も妙な話をきいたぞ。何でも町の人だつてことだが、村の佛事に招ばれたので、羽織袴で芭茅の原にさしかゝると、急に體の中がむづ〳〵して來たので、帶を解いて見たが、別段蟲などが入つてゐる樣子もねえので、其まゝ、袴もつけ羽織も着てやつて來ると、如何したことか、今迄になく歩きづらく、段々と日も暮れかゝるので、道を急がうとすると、袴が邪魔になつて、ころころ轉ぶといふ騒ぎさ。あんまり轉んだので、袴はめちや〳〵に破れるし、羽織は泥だらけになつて、やつとのことで村に入つて氣が着いて見ると、芭茅の原で、帶をしめ直した時に、袴の片方の筒に、兩方の足を入れてゐたんで、それで歩かれなかつたてことだ。全く狐の奴の仕わざに違ひないわさ。』

と又他の一人が話しました。こんな風で狐退治の相談は、直にまとまつてしまひました。それで日の暮れかかるのを待ち兼ねるよう

にして、五郎吉さんたちは芭茅の原へ出かけて行きました。

二

芭茅の原では、寒い風が、凄いやうな音をたてゝ、吹いてゐました。狐退治の連中は、皆目じるしに赤い毛布を頭から被つて、大きな松の樹の根元に、一かたまりになつて隠れてゐました。暫く待つてゐると、町の方から、五郎吉さんたちと同じやうに、赤毛布を被つて、笊を擔いだお爺さんが、小走りにすた〳〵とやつて來るではありませんか。

『來たぞ〳〵。』

と一人が言ひました。

『なる程巧く化けやがつたな。だけど俺達が赤い毛布を着て出たことを如何して知つたんぢやろ?』

と他の一人が感心しきつて申しました。

『其處が狐さ。だけど皆の衆、しつかりしろ。今夜こそ詐されちやならねえぞ。死ぬほど打ちのめして呉れようぜ。』

と五郎吉さんも言ひました。

『いゝか、一二の三で、一緒にとび出して、この狐を取り圍むこつたぞ。』

と又他の一人が言ひました。

その内に爺さんは、何くはぬ顔をして、皆の隠れてゐる處へ、さしかかつて參りました。一二の三と云ふ聲がしたと思ふと、木の影から大勢の人が飛び出して來て、自分をとり圍んでしまつたので、お爺さんは腰をぬかして、そのまま其處へ、へたばつてしまひました。口を利かうにも、喉がひきつつてしまつて、聲が出なくなつてしまひました。

『狐の奴、今夜こそは打殺すぞ。』

と一人が言ひました。

『新田の三平さんの御馳走を喰べたのは、お前だらう。』

と五郎吉さんが申しました。

『全く人間そつくりに化けやがつた。うつかりするとやられるぞ。』

と三人目が言ひました。

『まゝゝゝまつて下せえ。俺は狐ぢやムりません。』

とお爺さんは、やつとのことで言ひました。

『何を! 狐でねえで何で、今頃化けて出られるか。馬鹿にするな!』

と一人が言ひながら、持つてゐた棒切れで、狐に打つてかゝりました。

『お待ちなすつて、〳〵。俺はほれ、あの一軒家の七兵衛でござんす。どうぞ、勘辨しておくんなせえ。』

とお爺さんは、頭を地にすりつるやうにして、皆の者に詫りました。

『おい皆の衆、一軒家の七兵衛さんが、今日、町へ買物に出たつてことをきいたか?』

と五郎吉さんが尋ねました。

『きかねえ、〳〵。そんなことはきかねえぞ。』

『この野郎、太え奴だ。そんなことで詐されると思ふか。』

『ぶんのめせ、〳〵。』

皆の者は口々にこんなことを言つて、そのお爺さんの言ふことを、ほんとうにして呉れません。お爺さんは困りきつてしまひました。それで何か考へて居る樣子でしたが急に元氣づいて申しました。

『あゝ左樣ですかい。それだけ分つて居れば、もう仕方がありませんから何もかも申上てしまひま

す。俺は皆さんのお考の通り、この芭茅の原に、長く棲つてゐる狐です。もう今夜といふ今夜でこりこりしてしまひました。それでこの原つばにゐる狐を、のこらず引つれて、もつと山奥の方に參りますから、どうぞ命だけは助けて下さい。その代りに此處にある寶物を差上げます。若し皆さんが、何か買物などをなすつて、お金を拂ふときに、この寶物を高く差し上げて、「亭主、これだ、これだ。」と仰つしやれば、その時のお勘定は皆拂はずに濟みます。狐に詐されたと思つて、ためしてごらんなせえ。』

と言ひながら、笊の中から、變な木の葉のやうなものを二三枚出して渡しました。

『どうだ皆の衆、原つばの狐が一匹も居なくなるつて言ふなら、別段に打殺すにも當るめえ。』

と一人が言ひました。それは全々狐の持つてゐるその寶物が欲しくなつたのでせう。

『それも左樣だな。』

『まあ今度だけは助けてやるか。』

と外の人たちも贊成しましたので、それでは明日と言はず、今夜の中にも狐を引連れて、遠い山奥に行くようにと、かたく約束してその寶物と引換に、狐を許してやりました。

三

明る日、五郎吉さんたちは、早速町に出かけて行きました。そして料理屋に行つて、ひどく飲んだり食つたりしました。その内に店の亭主が、お勘定を取りに來ましたので、五郎吉さんは、昨夜狐から貰つた木の葉を、大切さうに懷から取り出して、片手で高くさし上げて、

『亭主、これだよ、これだよ。』

と言ひました。けれども亭主には、それが何のことか分らないと見えて、不思議さうな顔をして、五郎吉さんの顔を見てゐました。それを見て五郎吉さんは、まだ言ひ方が、足りないと思つたのでせう、

『亭主、これだ、〳〵。』

と聲を張り上げて申しました。

それでも亭主には何のことやら譯が分らないと見えて、

『その木の葉が如何したと仰つしやるのです。私はお勘定を頂きさへすれば、それで結構です。三十六圓二十錢、どうぞお拂ひを願ひます。』

とお勘定の催促をしました。

それをきいて五郎吉さんたちは、蒼くなつてしまひました。

『それでは、又一杯喰はされたんだ。』

『巧くやられてしまつた。』

などゝ言ひながら、昨夜の出來ごとを、詳しく話してきかせました。

『ワツハ、、、』

と亭主は腹を抱へて笑ひ出しました。

『一軒家の七兵衛といふのは、私の伯父で、それなら確かに、昨日佛事の買物に來て、私のところにも寄つて行きました。あなた方が狐だ〳〵と言うて責め立てるものだから、苦しまぎれに狐になつたつもりで、お前さんたちを詐したのでせう。』

と言ひました。

皆さん、何と馬鹿らしい話ではありませんか。

（をはり）

馬車屋の太吉爺さん

岡崎重太郎
寺内萬治郎畫

太吉爺さんの馬車が峠へ着くと、谷の間を渡つてくる風が、素敵に涼しく吹いてきました。それはそれはなんとも言ひやうのない涼しさです。木々の梢は、青葉をいつせいにゆすつて、登りで汗ばんだ白（馬の名）の髪の毛までが爽やかになびきました。

『おやかたさん！　どうで御座えますだ……又樂しみの一服をやりますべえかよ。』

白はおやかたのこつを飲みこんでゐるとみえて、峠へ着くと、獨りで停つて了ふのでした。太吉爺さんはうなづきながら、

『どれ……一服にすべえかな……』と、呟いて、馭者臺から下りました。そして、古ぼけた手拭で汗をぬぐひ、木影の切株に腰をかけて煙草をふかしはじめました。停車場から空車を引いて歸る時、いつもこれが太吉爺さんの樂しみなのです。

側には白が、涼風に吹かれながら、まだ疲れのために忙しくなつてゐる呼吸を靜めながら、くつろいでゐました。

太吉爺さんのおいしさうに吸ふ煙草の煙は、スースーと、青空高く舞つて行きます。その煙の消えて行く青空の下には、温泉町が靜かに眠つてゐるやうに見えます。峠を右に大きく曲つて、それから左に右に、幾度か廻つて最後のトンネルを一つ越すと、もうそこが温泉町なのです。

柳屋。大和館。上州屋。――そう言つた温泉宿の建物が、小さく綠の丘の上に見えます。そして、その温泉町の裏山には、二三のパンガロウ式の別莊が朱の屋根瓦をかぶつて、おとけた姿で立つてゐます。それから町の入口の方には、つい此の間建つたばかりの、細長い大きな自動車の車庫が一つ。

――かういふ景色が次から次へ、パノラマのやうに太吉爺さんの眼に映つてくるのでした。

『町もえらく開けたのう――』

今更ら乍ら、本當に今更ら乍ら、太吉爺さんはそう呟かずにはゐられないのです。

此の温泉町に來る湯治客の半分は、今まで大抵太吉爺さんと白の汗で運ばれたのでした。それだけに町が繁昌して行く事は太吉爺さんにとつて、どれだけ嬉しい事でしたらう。なぜなら太吉爺さんは、自分の町を本當に愛してゐましたから。

長いこと眠つてゐた此の温泉町に、時代の流れがたいした勢ひで押し寄せてきますと、素枯れた町の沼地は埋つて了ひ、籔は拂はれ丘や山道は切開かれ

て、みんな新しい呼吸を始め出したのでした。そして、鐵道を敷く最初の重たい鶴嘴の音から、新式の別莊の中で洋裝のお嬢さんが彈く、美しいピアノの音を聞くやうになるまでの素晴しい變りやう――。

太吉爺さんは自分の事のやうに、限りない喜びに充たされながら、夢のやうにいつも峠から眺めるのでした。昔の小さな寂れた宿場が、かうもハイカラにならうとは……。

『これも時勢だてのう。』

太吉爺さんは又うなづきました。

しかし、皆んながこんなにも新しく生れ變つて行くと言ふのに、これは又なんとした事でせう。馬車や白も古ぼけてゐますが、太吉爺さんの顏の燻つてゐることつたら……。太吉爺さんと白と馬車だけがどん〳〵燻つてくるのでした。此の温泉町で殘されて行くものと言つたら、恐らく、この三つのものを眞先に數へ上げなければなりますまい。

まだ太吉爺さんの馬車が新しく、白の先代のぶちが健脚を誇つてゐた頃は、太吉爺さんは本當に若々しい、はち切れそうな氣元で、町へ入る人力車をぐん〳〵追ひ越して、一人で十人前も町のために働いたのです。

けれども、それから峠の姿さへ――草や樹木や谷川や山道の小石までが――生々としてゐるのに、なんと言ふ悲しい事なのでせう。先代のぶちは死んで了ふ。代つた白も、初めの若々しい元氣はだん〳〵失はれ、今では太吉爺さんに負けない位ゐ老いてゐます。馬車は馬車で、スプリングはいたみ、方々修繕だらけになつて了ひました。それに淋しい事に、太吉爺さんは、町へくるお客さん達から、忘れられやうとしてゐるのです。いや、もつと悲しい事は、町の人からさへ忘れられそうなのです。

『婆さんは先へいつて了ふたし……せめて、子供でもあつたらのう……』獨りぼつちの太吉爺さんは

しみ〳〵考へ出さずにはゐられなくなるのです。もう商賣は下り坂を越して、生活の上に不自由を感じ出してゐるんですからねえ。峠の下には新しく建てられた車庫が見えるでせう。――此の温泉町へも乘合自動車が出來たのです。――その中に納められる自動車こそ太吉爺さんの生活にとつて、全く恐ろしいものでした。

停車場の外で、自動車屋と客を爭ふ時の淋しい氣持つたら……。

『旦那！　すぐ出しやすが如何で御座えますか。お嬢ちやんも坊ちやんも、この爺の馬車に乘つてやつておくんなさい――』

でも、お客は一と眼太吉爺さんと馬車の方を向いたきり、皆んな自動車の方へ行つて了ふのでした。その時の淋しい氣持つたら……。

太吉爺さんは煙管をくわへたまゝ、ぼんやり紫色の煙をながめながら、深い溜息を洩らしました。今も客がなくてあぶれて來たのでした。今日はこれで三度目です。……昔の華やかな夢は煙のやうに消えて、決して二度と太吉爺さんのところへ戻つてはきませんでした。

『白こう！　お前がもうちつとんべえ若くつて足がきくんだつたらのう。――そして修繕てばつかしゐないで、新しい車をお前に氣張つてやつたらのう……。』太吉爺さんは白に話しかけました。白は涼風に當り乍ら、太吉爺さんの方を覗きました。恰度こう言つてゐるやうです。

『でもおやかたさん！　こうなにもかも年をとつちや、駄目で御座えますだ。相手は氣持のよさうなハイカラ自動車ですだ。スースーと、峠へかかつたつて、輕そうに走れますだ。それが、わしらの方とくると、峠へかかつちや、からお話にはなんねえだ。……おやかたさんは、あせつてやけにわしが尻さ叩きなさるだが……なにせえ、悲しい事に身體が言ふ

事聞かねえで御座えますだよ。……わしもおやかたさんのために一生懸命ふんばつちやみますだが…」

太吉爺さんは無理もないと、情け深そうに、うなづきました。そして言ひました。

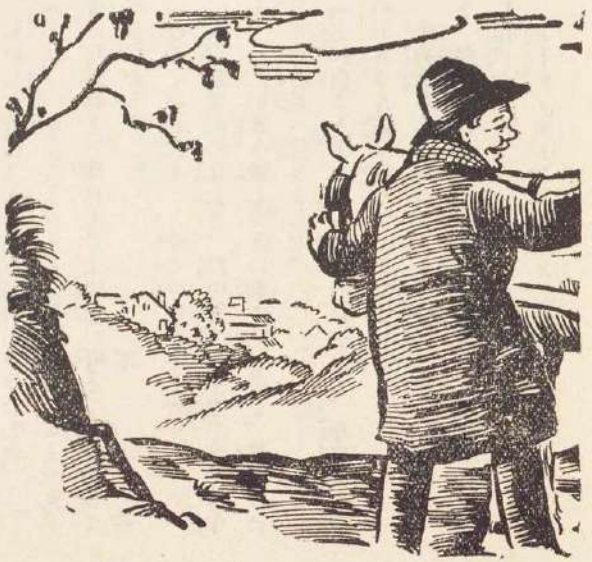
『もつともだ、仕方がないのう——。機械の力ぢやしやうがないだ。この梅干爺が、いくらあせつたつてのう。——それにより、一體全體都の人は贅澤すぎるだな？　白こう——』

太吉爺さんは再び溜息しました。そしていろ〳〵の事を考へ、樣々の事を思ひつゞけました。家へ歸つても米びつには、數へる程しかお米が殘つてゐないこと。——未だ今日のかせぎが、ほんの少しばかりで、夕方までにお客をとらないと、明日の生活にもさしつかへると言ふ心配——。

『これで病ひでもするとのう——』

獨りぼつちの太吉爺さんは、次から次へ不安に襲はれて行くのでした。そして終ひには、石のやうに默つて了ひました。

俯向いた太吉爺さんの黑い頸筋には、梢を漏れる



日光の淡い蔭が點々と染みこんでゐました。

それは恰度、忘れられて行く、太吉爺さんの、淋しい心のくらい影を語つてゐるやうでした。その姿が、そばに立つてゐる白にさへ哀れにみえたのでせう。

『神樣どうかこの可哀さうなおやかたさんを助けてやつて下せえまし……お願ひで御座えますだ。』

白は身動き一つしないで、さう祈つてゐるやうでした。峠は靜まりかへつて、ただ涼風の音だけが聞えてゐました。

『やあ——お爺がゐるだ！』

暫くして、峠が急に賑やかになつたと思ふと、太吉爺さんは耳元で元氣そうな聲を聞きました。三人の町の小學生でした。

『お爺！　其處でなに考へてゐるだよ。』

『おゝ！　兼作に久太に三郎でねえか……今學校の歸りかな……毎日大變だのう——』

『お爺！　顏色が惡いだせ、頭痛でもするだか？』

町の子供達は、皆んな太吉爺になついてゐるだけ

に、心配さうに尋ねました。

『なあに、あんまし涼しいだから、今ちつとんべえ居眠してただよ。ハツハツハツハ……』

しかし太吉爺さんの笑方は淋しさうでした。

『どれ、一走りちよつくら温泉町さ行つてくべえ。皆んな乗れ！　乗れ！　太吉爺が町まで乗せてつてやるだから……』

『ほんとかお爺！　ちやこいなあ――』

太吉爺さんは立上り、白の鼻ずらを撫でてやり乍ら、三人が車へ嬉しさうに乗り込むのを、満足げに見て馭者臺へ登りました。

『どれ白こう！　又一番たのむべえよ。今度は上等のお客さん達が乗つてゐるだ！』

太吉爺さんはさう言つて、はげみの一鞭はじくと、白は心得たとばかりに、バカ〳〵と駆け出しました。

トーテトテトー本式にラッパを吹いて、先づ下り坂を右へ大きく曲りました。乗つてゐる三人の小さなお客様たちは、愉快さうに聲を擧げて、喜びました。

『皆んなそんなに嬉しいか？』

と、太吉爺さんは急に明るい氣持になつて、もうなにもかも忘れて、このお客様達のために、熱心に力一杯手綱を握りしめました。白も勿論一生懸命です。――若い昔に返つたやうに。

峠の上から眺めてゐますと、木の間隠れに馬車は山道を勇しく下つて行きました。もう谷合に入つて、姿は見えなくなりましたが、太吉爺さんや白の元氣さが眼に映るやうです。

トーテトテトー。太吉爺さんの吹くラッパの餘韻だけが、静まり返つた峠へ一入物淋しく幽かに流れてきました。

（をはり）

童謡

野口雨情選

（大人篇）

冬の星（賞）

小堀　義夫（靜岡）

冬星　小星
木枯しに
吹かれて
お馬がもどります

手ぬぐひかむつて
ふところ手
馬子もだまつて
行きました
大寒む小寒むの
すその原
すゝきの小道を
ゆきました

お馬が通る（賞）

湊　一訓（東京）

ほそい　この道
まんなかお行き
首こ　ふりふり
おんまが通る
うらゝ　春の日

草の芽　木の芽
田圃　あちこち
蛙が動く
そこのけ　そこのけ
このみち　細い
あんよぽッかぽッか
おんまが通る

一つ星

中村　武男（東京）

お屋根の上の
一つ星
暗い夜空の
一つ星
お耳をすまして
聞いてゐた

遠い渚の
波の音

お星さん

川島　秀雄（東京）

ピッカリ
寒そな
お星さん
からから
枯れた
木の間
ピッカリ
寒そな
お星さん

冬の窓

種田　實（東京）

北風　から風
大寒　小寒
朝から　お窓を
吹雪がたたく
冬のお窓は
さみしいお窓
しめてしまつた
くうらいお窓

豚の子

名方　和郎（大阪）

鼻で土堀つて
遊んでる
豚の子ア啼いたぞ
ぐうぐうぐう
足が短い
尾が小さい
耳で蠅追ふ
ぴッこぴッこぴッ
なんでもかんでも
食べてゐる
豚の子ア歩いた
ちよこちよこら

梅のつぼみ

坂野　潤（大阪）

お庭の梅は
知らぬ間に
ポッカリ　つぼみが
つきました
向ふの　お山の
あち　こち　に
まだ〳〵　白い
殘り雪
梅のつぼみは
雪のよに
きれいに　ポッカリ
つきました

山道

林　湖花（山形）

山道ほそくて
長い道
それでもこゝは
近い道
峠は見えるに
まだ遠い
山道ほそくて
石の道
それでもこゝは
近い道
峠はじきだに
はかどらぬ

歸る鳥來る鳥

高橋德三郎（茨城）

渡り鳥わたる
ならんでわたる
お庭の雁來紅
紅つけた
渡り鳥わたる

そろつてわたる
軒端にさびしい
つばめの巣

どんぐり

吉村　光雄（東京）

どんぐり
ころころ
招のふち
姉さん
たもとで
おねんねだ
どんぐり
ころころ
山のみち
ころんで
落葉が
笑つてた

山みち

川口　洋（東京）

森まで
來たみち
くさのみち
じめじめ
しめつた
森だつた
青空
小さく
光つてた
子供が三人
越えてつた
ザクザク
お馬も
越えてくか

仲よし

千葉　仔朗（東京）

鼠の子
鼠と仲よし
もぐらの子
ちやが芋畑に
藏たてた
ちやが芋ならべて
藏たてた

雁がきた

河野　牧草（朝鮮）

雁が來た雁が來た
雁來紅が
赤くなつたから
雁が來た
すゝきの穗が
出たから雁が來た
南の國から雁が來た
もぐらと仲よし

大石主税

三島霜川

羽島古山壷

一、三人兄弟

赤穂四十七士が、主人、淺野内匠頭の讐敵、吉良上野介を討取ッたお話――たいがいの人が、この話を知らない人はないでしょう。それが、どれだけ『眞ンと』で、どれだけ『嘘』かといふことは別にして。

この大石主税も、すゐぶん、古くさいお話の人かも知れません。四十七義士が、『討入』の時に、裏手の方の大將として、キビ〳〵と働いた勇士として。

その時、主税は、數え年の十五歳でした。それで、立派に、一方の大將の役目を爲遂げました。

逢ふ時は、語りつくすと思へども
別れとなれば、殘る言の葉

これは、『討入』の前に、主税が、小野寺十内に書いて與へた歌ですが、字も、すてきに、うまかッたと云ひます。そのくせ、『討入』の二時間ほど前に、集まッた義士たちが、別れの酒を汲みかはしてゐる間、ぐう〳〵、鼾を立てゝ眠ッてゐたといふ、のんきなこともありましたけれど。

あらためて、云ふまでもなく、主税は、大石内蔵助良雄の長男でした。その良雄は、赤穂萬二千石の城代家老――城代家老といふのは、殿様の留守の時なぞには、主人に代ッて城を護るといふ大切な役目で、つまり、一番上の家來でした。

ところが、この良雄も、ふだんは、のんきなところがありました。お城へ『おつとめ』に出ても、よく、居眠をしてゐることがありました。

そこで、『遊行燈』といふ、あだ名がついてゐました。『遊行燈』といふのは、遊の燈火ですから、『役に立たない』とか『ぼんやりしてゐる』とかいふ意味があッたのです。

赤穂の町は、播磨（兵庫縣内）の西南の端の方にあります。城趾には、今も石垣が昔のまゝに殘ッてゐて、西の方の山を一ッ越すと、もう備前です。一方は、瀬戸内海で、千種川が、城の東の方を流れ、たいそう、景色が好く、『赤穂鹽』と、云ッて、昔から、鹽が、その地方の名産になッてゐます。

主税は、この赤穂の城内の大石の邸で生まれました。その邸の趾も、ちやんと殘ッてゐます。そこには、大石神社といふ良雄を祀ッたお宮もあれば、良雄の『遺愛の櫻』といふ櫻もあります。

さて、この『お話』は、主税が十四の年、主人の内匠頭が切腹してから、五日後の午後から始まります。その時はまだ、赤穂では誰も、内匠頭が、江戸城の御殿で、上野介を斬りつけたことも、また、それが爲に、腹を切らせられたことも知りませんでした。

ハッキリこふと、二百二十六年前、元禄十四年の三月十八日の午後。彌生の空は、少し、ドンヨリして、赤穂の浜は、靜でした。

『ア、ア、ア……』

九ッになる代三郎は、ふいに、手をたゝいて、けたゝましい、そして、頓きような聲をあげました。

代三郎は、主税の次の次の弟でした。

『しッ……』

主税は、『騒ぐのではない』と、いふやうに、ちよッと嫌な顔をして、靜に、弟の方を見ました。

とたんに、『やッ、獲れたぞ〳〵』

と、吉千代は、よろこびの聲をあげて、飛上がりました。そして、持ッてゐた狐をつる『餌ぞ』抛り

出して、バタ〳〵駈出しました。

主税は、『何事か』と、いふやうに、じッと、吉千代の方を見ました。袴をはいた吉千代の小さな細い脛が、まるで、宙づりにされた兎が、足だけを、ぴよん〳〵やるやうに、ひどく滑稽に見えました。

『吉千代、吉千代……』

と、主税は、いつもの大人のやうな、太い聲を出して、落ちついて呼びかけました。

吉千代には、それが聞えないやうでした。兩足と兩手を、一緒に跳らせて、振り返りもせずに駈けて行きました。と、代三郎も、主税の袖の下をくゞッて、バッと、飛出すやうに駈出しました。

主税は、一心ふらんに、狐をかける罠を作ッてゐたのですが、その時、始めて、『ア、さうか』

と、氣がつきました。そして、『可かんぞ、吉千代。逃がして了ふぞ』

と、かんたんに、命令するやうに云ひました。

兎が曲藝をするやうに飛んで行ッた吉千代の足はゆるみました。代三郎も、振りむいて、立ちどまりました。主税は、スタ〳〵と、小走りに、弟たちの後を追ひました。吉千代は、主税の次の弟でした。

主税のゐたところから、凡そ、四五十歩ほど離れて、そこに、雜木まじりの籔がありました。すもゝぐみ、はたんけう、くりなどの木もまじッて、みんな、薄緑の芽をふきかけてゐました。もう、お城の外廓の石垣に近いところでした。その石垣の上には、大きな松の木が、並木のやうになッて、こんもりと、茂ッてゐました。その松の木の茂りを洩れて、沈みかける夕日が、にぶい銀色の光を、チラ〳〵と、籔のなかへ投げてゐました。

その籔のぐみの木の枝に、そまつな、鳥籠が吊してありました。鳥籠のなかには、鶯が、何にかに、びッくりしたやうに、しきりに、バタ〳〵、やッてゐました。その鳥籠の上に、四五尺ほどの長さの細い竊竿が、さしてありました。その竊竿にも、一羽の鶯が、羽翼の下と足とを竊にくッつけて、バタ〳〵、やッてゐました。美しい羽が逆さに少し亂れて、片羽翼を、ウンとひろげてゐました。

吉千代を先きに、代三郎と二人は、足の爪先を立てて、拔足差足、籔ぎわに沿ッて、すゝみました。二人ともに、眼を丸

くして、竊竿の鶯を見つめ、そして、口を引きしめて、大しんけんでした。

『しッ、しッ……』

と、吉千代は、主税の眞似をして、ともすると、はづむで、先きへ出ようとする代三郎を、肘で、小突きました。代三郎は、慌てゝ、後へさがッては、すぐにまた、兩手を、吉千代の袴の腰板にかけたりして、夢中で、體を前へ伸ばしました。吉千代は、それが嫌ッて、いく度となく、體をひねッて、その手をはづしました。

おしまひに一度、『うるさいなッ』

と、叫ぶと、吉千代は、かんしやく紛れに、思ひ切ッて、體をひねりました。代三郎は、はづみを喰ッて、ぐらりと前へ踣ッたと見ると、バッタリ、兩手をついて、轉びました。

『ひどいなア、吉兄様。ひどいぢやないか』

と、代三郎も、かんしやく聲を出して、叫びました。

『ひどいが、どうしたんだ』

と、吉千代も、やりかへしました。

主税は、背伸をして、輕く、竊竿の鶯をおさへようとしながら、チラと、二人の方へ振返りました。そして、『小さな者を、やッつけるなよ』

と、おうように云ひました。

『わたしが、爲たンぢやないンです。代三郎が、勝手に轉ンでおいて……』

『嘘つきッ、吉兄様が、意地惡をしたンだ』

『なにッ』

と、吉千代は、ヅカ〳〵と代三郎の傍へ立ちよッて、その肩さきを小突きました。

代三郎は、よろ〳〵と跟けて、いよ〳〵、かんしやくを起して了ひました。そして、手當り次第に拾ひ取ッた竹の棒きれを振り廻して、滅茶苦茶に打ッてかゝりました。

吉千代は、ひよい、ひよいと身をかはして、逃げました。代三郎は、勢、するどく、すゝみました。吉千代は、後へ後へとさがッて、やがて、手頃の棒きれを拾取ると、『やッ』と、劍術の段構――棒きれの先きを、ピタリと、代三郎の鼻つらへつけました。

その時、主税は、傍目もふらず、出來るたけ、そッと、出來るたけ、親切に、非常に注意して、鶯を、竊竿から引きはなしました。そして、劍術で鍛えた大きな掌に、そッと、握りました。

『代三郎、亂暴をするンぢやない。お前が向ッても、かなふか』と、主税は、いつもの聲で云ッて、『これ、獲ッたぞ〳〵』

と、大きな拳を、輕くふッて、見せました。

吉千代も、代三郎も、棒きれ、竹きれを投出して、『やア、すてき〳〵』と、手をたゝいて、歡の聲をあげました。そして、けんくわは、昨日か一昨日したといふやうな顏をして、主税の傍へ寄ッて來ました。

『吉千代、あの籠を持ッて來てくれ』

『籠ですか……』

と、吉千代は、面くらッてゐたので、きよろ〳〵しました。

『あすこにあるぢやないか』

『うん、さうか』

と、吉千代は、ブン廻しのやうに、クルリと一ッ、體を回して、右へ左へ首を振ッて、また、少し、きよろ〳〵しました。そして、籔ぎわの、すもゝの樹の下にある、もう一ッの鳥籠へ飛びついて行きました。

『見せて下さいよ、お兄様』

と、代三郎は、主税の大きな拳の下へ來て、精一ぱい、背のびをして、鶯を覗いて見ようとしました。代三郎が、精一ぱいに、背伸をしなければ、主

税の拳まで、顔が屆かないほど、主税の長が、ぱッぐんに、高いのでした。

主税は、默ッて、すなほに、拳を下げて遣りました。代三郎は、その拳に、小さな手をかけて、『大きな手だなア』と、かんしんしたやうに、兄の顔を見上げました。そして、それから、鶯を見ました。寶玉のやうに美しい鶯の眼は、『怖れ』におのゝいてゐました。

そこへ、吉千代が、カラの鳥籠を持ッて來ました。主税は、こゞむで、大事に〳〵、鶯を籠のなかに入れました。二人の弟も、鳥籠の右へ左へ、こゞみました。三人兄弟の三ッの頭は、三ッ巴のやうになッて、かたまりました。

恰ど其の時、お城の櫓で、暮六ッ（午後六時）の太鼓が、ドン、ド、ド、ド、ドン……と、いつもよりは、少し籠ッて鳴渡りました。石垣の松の茂りにも、夕霞が、薄ッすりと、たなびいて來ました。

しばらくすると、三人兄弟は、罠を作ッてゐたところへ歸ッて來ました。主税は、鶏竿と、ぐみの木に吊した鳥籠とを持ッて。吉千代は、鶏についた鶯の籠を持ッて。

すると、そこに、まるで木で彫上げたやうな顔の爺さんが、丸い大きな紋のついた短い羽織を着て、ノソリと突ッ立ってゐました。木綿の『よそゆき』の着物が、ひどく、つんつるてんでした。

『やア、爺や……』

と、代三郎は、駈けよッて、爺さんの手に、ブラ下がるやうにしました。

『オ、、坊ン樣、御機嫌で可うございます』

と、爺さんは、ゴッ〳〵した手で、代三郎の首筋を抱きかゝへるやうにしました。そして、主税の方に向いて、『若樣も、吉坊ッ樣も、御機嫌樣で……』

と、地べたに手のつくやうになッて、ていねいにお辭儀をしました。

『しばらく來なかッたな、丈夫か』

と、主税は、親しさうに云ひました。

『はい、先月ぢふ、珍らしく病ひましてナ、ハ、、、』

『フム、もう快いのか』

と、主税は、その涼しい眼を、爺さんの顔へそゝぎました。

『はい、おかげ樣で、もう、すッかり、元の體でござりますよッハ、ハア、こりや、えらい事が、おッ始まりましたな。狐をお獲ンなさる罠でござりますかな』

『ム』

『なりは、大きくあらしやッても、惡さは、やッぱりな…ハ、、、』

と、爺さんは、どこか、とぼけた大きな鼻を、空に向けて笑ひました。

主税は、『然うだ〳〵』と、いふやうに、にこついて、また、罠をいじり出しました。

爺さんは、白紙にくるめた干柿を、五ッ六ッ、ふところから取出して、代三郎に遣りました。そして、

『吉坊ッ様にも、お分けなさるですよ』と、云ッて、また、主税に話しかけました。

『若様、不思議な蜂合戦があッたといふではございませんか』

『ム、あッたよ』

と、主税は、やはり、かんたんに云ッて、何故か、ちよッと、暗い顔になりました。

『若様、見においでなさらなかッたかね』

『う、うん……』

と、主税は、頭を振りました。

『わしは、見に行ッたよ』

と、吉千代は、代三郎から貰ッた干柿を、一口、ムシャリとやりながら、慌てゝ云ひました。

『然うでございますか、爺は、生まれてから、まだ、蜂合戦といふものは、見たことも聞いたこともないのでございますが……何ンにしても、よくない兆だと申して、みんな、心配して居りますよ』

『うん……』

主税は、やはり、

『そんな話は聞きたくない』

と、いふやうに、生返事をしました。

『旦那様は、何んと有仰ッて、おいでゝございますネ』

『お父上は、別に何んとも有仰らないよ。世の中には、思もかけない不思議なことや、災難があるものだと有仰ッて』

『フム、……』

と、爺さんは、首をふッて、大きな頭を傾げました。そして、マジ〳〵と、何か考へるやうにしてゐました。

すると、吉千代が、

『爺や、爺や、蜂合戦、面白かッたせ。話してやらうか』

と、干柿を、ムシャ〳〵やりながら、大急ぎで云ひました。

『はい、仕て下さいよ』

『今夜な』

『はい、それでは、今夜、吉坊様の蜂合戦の話を聞きますかネ』

と、爺さんは、また、のんきらしくなッて、氣輕に云ひました。

『爺や、今夜、泊るの』

と、代三郎は、爺さんの袂を、自分の首筋に巻きつけるやうにして云ひました。

『はい。泊めて戴きますよ』

『悦しいなア』

代三郎は、ぴよん、ぴよん、三度ほど飛上がりました。

もう、邸のうちにも霞が下りて、内藏助の居間に行燈が入りました。そして、その火影が、霞のなかに、ぽーッと、浮上がッてゐるやうに見えました。

爺さんは、尾崎村の八助と云ッて、内藏助がまだ吉千代位の時分から内藏助のところに奉公をしてゐた下男でした。

それが、二年ほど前に暇を取ッて、半里あまり離れた村へ歸ッてゐるのですが、蜂合戦の惡い『取沙汰』を聞くと、もしや『御城内』に、何か、よくない事でも起ッてゐるのではないか——それが、不思議なほど氣になッて、久しぶりで、舊の主人をたづねて來たのでした。

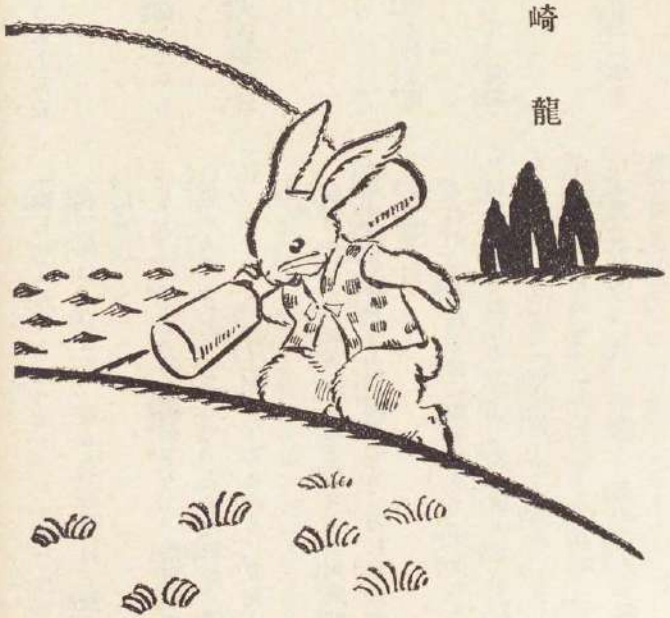
（つゞく）

うさぎのとし

達崎龍

兎のせなかに
乗つかつて
うさぎの新年
もう來たヨ

カチカチ山の
山越えて
トントン杵を
持ちながら
うさぎの正月

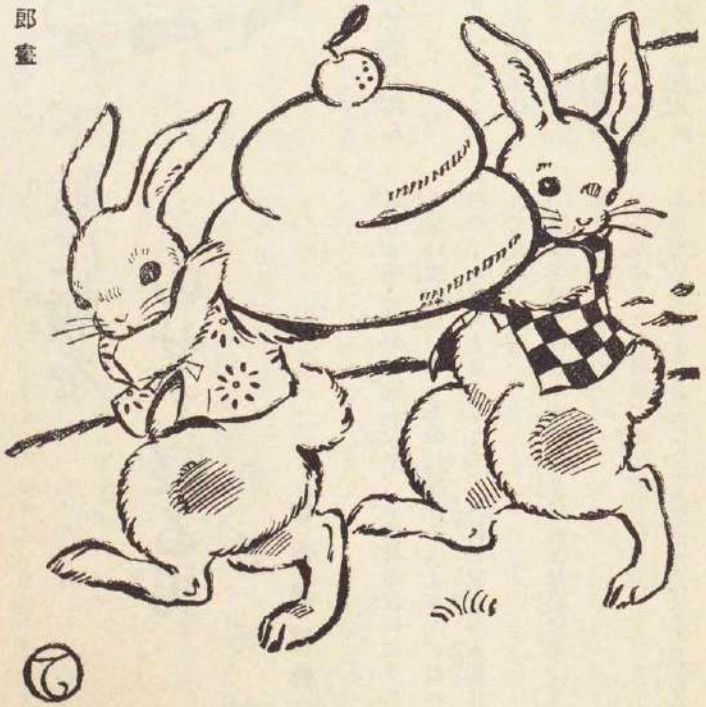


もう來たヨ

イナバのクニの
海越えて
スイスイ耳を
立てながら
うさぎの正月
もう來たヨ

兎のせなかに
乗つかつて
うさぎの新年
もう來たヨ

寺内萬治郎畫



下駄に顎をのせて寝る男

歌村兵六

寺内萬治郎畫

むかし、或る八幡様の境内に、一匹の白犬が住んでゐました。

白犬は、畜生の内で最も人間に近いものださうで、來世にはきッと人間に生れ更つてくるとか云はれてゐます。

この八幡様の白犬も、大さう悧巧な犬で、參詣の人々の云ふ言葉がよく分ります。

『一寸、お嬢様、ごらん遊せ。こんな綺麗な白犬が居りますよ。かう云ふ犬が、この次の世にはきッと人間に生れ更つてくるのに違ひありません。ねエ、白や、お前おとなしくして、來世は立派な人間に生れておいでね。』

通りすがりの人々は、口々にこんな事を云つて行きます。

白犬はそれを聞いて思ひました。

『して見ると、俺も來世には人間になれると見える。併し、來世だなんて、何時の事だか分りやしない。なんとかして、今直ぐ生きながら、人間になる工風は無いかしら?』

白犬は色々と考へた末、これは矢張り、人間と同じやうに、神様に願かけするより他に仕方がないと思ひました。

白犬は、三七二十一日の間、斷食をして、一心に神様に願をかけました。その願ひが聽かれたのでせうか、丁度滿願の二十一日目の朝、白犬が一心不亂にお祈りをしてゐると、突然身體中の毛が、バッバッと飛び始めました。『おや。』と思ふ間もなく、白い犬の毛は、すつかり飛んで行つてしまつて、その代りスベ〳〵とした、美しい人間の膚となりました。

『やれ嬉しや、さては願ひが聞かれたか。』

と、白は大さう喜こんで、神様に厚く御禮を申上ました。

さて、かうして芽出度く人間にはなつて見たものの着物一枚着てゐない、眞裸の事ですから、寒くて堪りません。何か無いかと四邊を見廻すと、丁度幸ひ、神前の手洗鉢の所に、たくさん『奉納』の手拭がぶら下げてあります。『これは有難い。』と、早速、二三枚外してきて、腰のまわりにまとひました。

それから、ブラ〳〵と町の方へ歩るきださうとしますと、何しろ今まで四本足だつたのが、急に二本で歩るかねばならぬ事になつたものですから、ヒョロ〳〵して、中々旨く歩るけません。尻餅をついたり、四ん這ひになつたりしながら、やッとの事で烏居の所まで參りました。

すると、向ふから伊勢屋の主人がやつて來ました。この伊勢屋と云ふのは、雇人口入業をしてゐる、親切な男でした。

白『もし、もし、今日は……。』

伊勢『あゝ吃驚した！　いきなり聲をかけるもんだから、膽を潰してしまつた。おや！　なんです、お前

さん眞裸で……一體どうしたんです。』

白『へえ、私は、この近所の者でございますが。』

伊『近所の方！　おかしいね、私は、ついぞ見かけた事は無いが……あゝ分つた。お前さんは田舍の方なんでせう。親に默つて、こッそりと東京へ出て來たところが、惡い案内人にひッかゝつて、お金はすッかり卷き上げられた上、着てゐる着物まで剝がれてしまつたと云ふんでせう。いや、よくある事です。お前さんも多分そんな事でせう。』

白『えゝ、まア、そんな事にして置きませう。』

伊『なんだか云ふ事がおかしいね。併し、まアいゝや。それで、私にどんな御用があるんですね。』

白『私は、どこかのお邸へ、奉公をさせて戴きたいのです。』

伊『奉公を？』

白『へえ。』

伊『なるほど、私は周旋屋だから、そりや幾らも心配してあげませうがね。だが、お前さんには證人も何も無いんでせう。』

白『そんな者はありません。』

伊『まアいゝや、人間と云ふものは、大概その顏つきだの、眼つきだのを見れば、心の中が分るものだ。お前さんは見た所、別段惡い氣もないらしい。よろしい、承知しました。何處かいゝ所へ世話してあげませう。』

白『ありがたうございます。どうか何分よろしく。』

伊『オイ〳〵、何もそんなに四ッん這ひになつてお辭儀しなくたつていゝよ。……ところで、そんな裸のまゝぢやア往來が歩るけやしない。この羽織を貸してあげるから、着ておいで……。』

白『ありがたうございます。』

伊『オイ〳〵、そんなに頭から羽織を冠つて、どうするんだ、まるで犬のやうだね、羽織と云ふものはチャンとかう兩手を通して着るものだよ。』

兩人は連れだつて、伊勢屋の家へ歸つて參りました。するとお上さんが出迎へて、

上『お歸りなさい。大さうお早うございましたね。』

伊『うん、途中でいゝ奉公人を見つけたものだからね……さア、お前さん、お上りなさい。……あゝ跣足ぢやいけない。裏へ廻りなさい。裏へ、おや〳〵何をグル〳〵廻つてゐるんだね、まるで犬の『お廻り』のやうだ。……おい〳〵〳〵、跣足のまゝ板の間に上つちやいけないね。ごらん、板の間が泥だらけになつてしまつたぢやないか。雜巾でよく、跡を拭いておき。……おや、これは妙だ。雜巾がけが馬鹿に旨いぞ。四ん這ひになつて、いかにも素早こい。さア、出來たら、こつちへ來てお坐り……おや、なんと云ふ坐り方だい、それは。……もつと行儀よく坐れないかね、ちやんと膝をそろへて…さうだ〳〵中々行儀がいゝ。』

白『御褒美は？』

伊『御褒美？　なにを云つてるんだ。犬ぢやあるまいし。……ところで、お前さん。どう云ふ所へ奉公したいんだね。』

白『どう云ふ所ッて、別段望みはありませんが、なるべく魚を食べさせて下さる所へ行きたいと思ひます。』

伊『魚を？　贅澤を云つてはいけないね。奉公人などは、中々魚などは頂けぬものだ。』

白『骨も駄目ですか？』

伊『骨なんか、お前。食べられるものかね、齒がかけてしまふよ。』

白『私は大丈夫です。』

伊『さうかい。それは重寶だ。……あゝ、さう〳〵、お前さんお腹が空いたらうね。御飯をご馳走しよう。……さア、此處へお鉢を置いておくからね、いゝだけお上り。遠慮しないでね……。』

伊勢屋さんは、かう云つて奥へ這入りました。

暫くして臺所へ來て見ると、男はもう食事が濟んだと見えて、長い舌をだして、しきりと口の周りを舐めまわしてゐます。

伊『もう濟んだのかい。』

白『へえ、すつかり戴きました。』

伊『すッかり？　おや〳〵、これは驚いた。お鉢がすつかり空になつてしまつた。おそろしい大食家だね……。』

白『その代り、二三日食べずにゐられます。』

伊『そんな事をしてはいけない。身體に毒だ。御飯と云ふものは、日に三度々々戴くものだ。』

白『あゝ、さやうでございますか。』

伊『さやうでございますかッて、お前さんの云ふ事は、一々變な事ばかりだ。……さう〳〵、横町の隱居さんの所で、何か一風變つた、面白い男があつたら世話して呉れと云ふ事だつたが、さうだ、お前にはあすこが一番だ。毎日火鉢の前に坐つて、御隱居さんとお話してゐればいゝんだからね。』

白『どうでせう、御飯を食べさせてくれませうか。』

伊『そりや、御飯を食べさせない所があるものかね。それにあの家は、他に男と云つては一人もゐないから、お前が行くと泥棒の用心になつていゝ。』

白『えゝ〳〵、泥棒がやつて來たら、いきなり踵へ嚙み附いてやります。』

伊『大へんな元氣だね……では、そろ〳〵出かけやうか。……あゝ、これ〳〵、跣足のまゝ驅けだす奴があるものかね。ちやんと下駄を突いておいで。なに、下駄は未だ穿いた事が無いつて？　呆れた男だね。では教へてあげるから、その下駄をこつちへ持つておいで。あゝこれ〳〵、下駄を口で喇へる奴があるものか。穢いぢやないか。』

二人は連れだつて門口へ出ました。すると塀の所に、一匹の黑犬が寢そべつてゐました。

白『ウー、ブッ。ウー、ブッ。』

伊『これ〳〵、何を唸つてゐるのだ。』
白『へえ、あそこに黒が寢てゐますから、嚙みついてやらうと思つて……。』
伊『そんな亂暴な事をしてはいけない。さア早く行かう。』
二人は、横町の御隱居さんの家へやつて參りました。御隱居さんは、七十餘りの、白い顎ひげのふさ〳〵とした、品のよいお爺さんでした。
伊『今日は……。』
隱『おゝ、これは〳〵、伊勢屋さんか。さあどうぞお上り……。』
伊『へえ、ありがたうございます。…御隱居さま。今日は、いつぞやお話しのありました變りものを連れて參りました。こゝにをりますのがそれでございます。』
隱『あゝさうかえ。それは〳〵……。』
御隱居さんは眼鏡越しに、ヂロリと男の顏を見て
隱『なるほど。これはよささうだ。さアお前さん。遠慮せずとお上り。……何かい。お前さん、今年いくつになつたね。』
白『さアそれがよく分らないんでございます。』
隱『自分の齡を知らないと云ふ者があるもんかね。なるほど、これは變り者だ。それで、お前さん何處で生れたんだね。』
白『この横丁の突當りで生れました。』
隱『横丁の突當り？　それぢやアお前。豆腐屋さんの家ぢやないか。』
白『いえ、豆腐屋さんの裏でございます。』
隱『豆腐屋さんの裏はお前、芥捨場だよ。』
白『そこで生れました。』
隱『なんだか云ふ事がおかしいね。……それで、兄弟は何人あるんだね。』
白『三匹をります。』
隱『三匹といふ奴があるものか。三人だらう。男か

ね、女かね。』
白『皆んな牡でございます。』
隱『牡だなんて、そんな事を云つてはいけない。なにかい、皆んな丈夫かい？』
白『いえ、一匹は、いや一人は、車に轢かれて死んでしまひました。』
隱『まア可哀さうに……それで、もう一人は……。』
白『これは、生れると直ぐに、首に石をつけられて、溝の中へ棄てられてしまひました。』
隱『えッ、首に石をつけられて……おい〳〵お前、正氣でそれを云つてるのかい。俺は何んだか氣味が惡くなつてしまつた。……伊勢屋さん。一寸この男を外へ出してくれないか。そして、お前さんとだけでよく相談しよう。』
伊『よろしうございます。では、お前さん、暫く門口で待つてゐて下さい。あんまり遠くへ行つてはいけませんよ。』
白『遠くへ行つてはいけないッて、そいつは困りましたな。私は時々フラ〳〵と何處かへ行つて見たくなるんです。』
隱『厄介な性分だね。フラ〳〵と行かれちや、こつちが困るぢやないか。』
白『ぢやア、濟みませんが、首に繩をつけておいて下さい。』
隱『馬鹿な事を云ひなさんな。』
伊勢屋は、門口に男を待たせて置いて、自分は奥へ入り、御隱居さんと、何かヒソ〳〵聲で話してをりました。
やがて話が濟みました。伊勢屋は、門口へ出て見て、『あッ。』と驚きました。例の男は、伊勢屋の駒下駄の上へ、自分の顎を載せて、手足を投げだして、ぐッすりと眠つてをりました。口の先から、舌が一寸出てをりました。

（をはり）

高慢の鼻

田中實
水島爾保布畫

昔、鎌倉に、上野屋萬右衛門といふお金持がありました。年とつてから一人の息子が生れましたが、その子は大變可愛い子供なのに、たゞ一つ變なのは鼻があろかない位低くて丁度霰石を一つ取てつけたやうでした。

その形の惡い鼻を見て、萬右衛門はその子が可哀さうでなりませんでした。それで、ある時相撲の大山へ登つて、お不動様や大天狗小天狗などへ願かけて、

『どうぞ悴の鼻が高くなりますやうに。』と祈りしました。

それでもまだ安心が出來ないので、どうしたらいゝかといろ〳〵と考へました。

『うん、さうだ。』萬右衛門は暫くしてよい事が思ひつきました。『さうだ、この子を高慢に育てゝやれば低い鼻も高くなるに違ひない。よい事に氣がついた。』と、自分の考へに自分で感心しました。そして、乳母を呼んで

『乳母や、この子の鼻を高くしてやりたいと思ふのだが、これからはこの子が、自分より偉い者はないと思ふやうにさせてやつてくれないか。さうすると、きつとあの低い鼻も高くなるに違ひない』とたのみました。

それから萬右衛門は、店の番頭や手代などにもよく云ひつけておきました。

萬右衛門のたつた一人の子の萬吉は、かうして廻りの者から、何かにつけて褒められるので、だん〳〵大きくなるに從つて、高慢になりました。おしまひには、自分より利巧で器用で綺麗な子は世の中に滯山ないと思ふやうになると、不思議にも、低い鼻が少し高くなりました。

萬吉が丁度五つの年でした、その頃江戸で名高い鞠遊ケ嶽、逢ケ關、出雲川などの强い角力取が、鎌倉の町へ遊びに來ました。

これを聞き込んだ萬右衛門は、早速その角力取達を自分の家へ呼んで、お金をうんとやつて、御馳走するから、一つ悴の萬吉と角力をとつて負けてくれないかと頼みました。

角力取達は、たつた五つばかりの子供に負けるのは馬鹿々々しいと思ひましたが、しかし損な話しでもないので、すぐに承知しました。——勿論角力取強は美事に萬吉に負けてやりました。さあその時の萬吉の喜び様といつたらありませんでした。たとへ何でも、今江戸で一番强い角力取達を投げ飛ばしたのですから嬉しくてなりません。それに、角力取達もいゝ氣になつて、

『さて〳〵殘念なことですわい。どうも無念でなりません。』

『や、若旦那には叶はぬ。若旦那は小さくても馬鹿になりませんれ。』

などと終んにほめ上げるものですから。もう萬吉は有頂天になつてしまひました。それから鼻が大分高くなりました。

萬吉は八つになつて、手習ひを始めました。その時一緒に畫も習ひ出しましたが、とても下手で見られる程ではありませんでした。けれどもお父さんの萬右衛門はもつと萬吉を高慢にしようと思つてゐますから、家中の人は勿論の事、近所の人達にもいろんな物をやつて下手でも何でもかまはぬからどうぞ褒めてやつてくれと頼みました。そこで、近所の人達は、

『あゝ、上野屋の萬吉様のやうに、字や畫を上手に書く人は見たことがない。』と、嘆なするやうになりました。

とにかく、萬吉を褒めさへすれば御馳走してお金をくれるのですから、一寸も損をしないので、誰も彼も上野屋へ來た者は、むやみに萬吉をほめて〳〵ほめ拔きました。

『この年頃で家の悴ほど書くものはありませまい、中々書きなります……』と萬右衛門は自慢さうに云つて、萬吉が書いた字や畫を見せますと、客はわざと感心し乍ら、

『さうです。支那に王羲之とか、趙子昂とかいふ書の大家がありますが、しかし中々萬吉様にはとても及びませぬ。全くこの筆の勢はすごいものですな。』とほめました。

王羲之や趙子昂こそ飛んだ褒詞です。——でも萬吉に、支那の書の大家以上に見られたのですから、惡い氣持はしません。

萬吉の鼻はまた大分高くなりました。

萬吉は十四才になつて、素讀を始めました。素讀といふのは、漢文の本を勉强することです。しかし萬吉はむづかしい本はあまり讀みませんでした。が、萬吉が十五になつた時に、萬右衛門は店の番頭や手代などに云ひ

つけて、江戸中にも萬吉位の學者はあるまいと云はせました。

また一方では、萬吉の先生が、近所の無學な人にお金をやつて、

『上野屋の萬吉さんは大學者だから、あの人の所へ行つて字を敎はりなさい。』とすゝめました。そこで、その人達が萬吉の所へ出かけて行くと、萬吉は大分高くなつた鼻をヒクヒクさせ乍ら、さも偉さうに

『子曰、吾十有五而志于學と仰つてゐる支那の孔子は、十五の時から學問をなさつたが、あれ程の偉い人でも、私などのやうに十五で講義をなさるやうな事ではありませんでした。』

萬吉はそれから、學問でむやみに偉がつてもうこの上の高慢はないといふ位になりますと、鼻はぐゝと高くなつて立派な形になりました。

ところがどうした事でせう。ある日萬吉が外へ出かけると、ふいに天狗が出て來て、いきなり萬吉をつかんで、空高く舞ひ上つてしまひました。

さあ大變、可愛い大切な一人息子がゐなくなつたのですから、家では大騒動をし出しました。萬右衛門は血眼になつて方々を探し廻りましたが、萬吉の行方は分りません。いよいよ困つた揚句に、いつも上野屋へ來る天明院といふ占者をよんで來ました。

すると、天明院が『はゝあ、成程。いや、これは御心配なさるに及びません。あまり日頃の高慢が過ぎまーたから天狗がどこかへつれて行つたものと見えます。しかし生命には別條もなく、三十日のうちにはきつとお歸りなさると占に出てをります。』といひました。

ところで、お話かはつて、萬吉をさらつた大天狗は、すぐに大山へ歸つて來たのです。そして深山の天狗が集つてゐる中へ投げ出して、

『お前は何でも彼でも偉がるが、それが嘘か本當か一つ試してやらう。まづ角力の手並から見てやらう。』と云ひました。

そこで大天狗は、木の葉天狗の子供で、今年五つになる豆天狗を呼んで、萬吉と角力をとらせました。

『やつとな。』『やつとな。』とお互びにいゝこをふんで組みついたと思ふと、もう萬吉は投げられてゐました。その時鼻を土へひどく打つけたので、折角の鼻が少し低くなりました。

萬吉は鼻をなで乍ら起き上つて、

『ハテ、かうではない筈だが、殘念な事をした、鼻がひどく痛い』と呟きました。

偽り呆氣ない勝負ですし、たつた五つばかりの豆天狗が勝つたので、見物をしてゐた天狗達はは やし立てゝ

『小僧、出かした、出かした。』

『やつたな、上出來々々。』

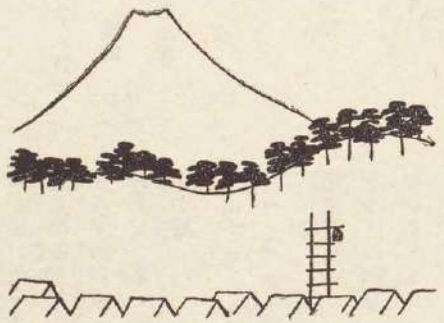
と、叫びました。しかし萬吉はまだ高慢な心をなくなさずにゐましたので、

『なあに、角力には負けても、書や畫には敵ふものか。』と負け惜しみを云ひました。

『よし、では、一つ書き比べをして見よう。』

さう云つて、豆天狗は紙や繪の具などを持つて來て、二人で書き比べをしました。ところが、出來た書や畫を比べ合せて見ると、萬吉のはてんで豆天狗の足許へも及ばない位まずいのでした。あまりひどい出來なので、豆天狗は怒つて、いきなり萬吉へ躍りかゝつて爪で萬吉の鼻をポーンと彈きました。すると萬吉の鼻は又少し低くなりました。

かうして萬吉の鼻は大分低くなりました。



が、まだ高慢の心が少し殘つてゐましたから、豆天狗はまた、學問のほんの始めの方を少し訓れて見ますと、萬吉はつ一としてはつきり答へが出來ません。

それで、いよ〳〵あいそをつかした大天狗は、羽團扇で萬吉の鼻の先をなでますと、萬吉の鼻はいよ〳〵低くなつて、とう〳〵生れた時の通りの鼻になつてしまひました。

『それではこれから返してやるから、ほんとに心を入れかへて勉強するのだぞ。』

大天狗はまた萬吉をつかんで、大山を下つて、萬右衛門の家へやつて來ました。

『萬吉の父の萬右衛門、こゝへ來い。』

大天狗は空の上から萬右衛門を呼びました。

『お前は生れつきの萬吉の鼻を高くしようとして、無理にも惡く育てたから、悴をとうとうこんな役に立たぬ者にしてしまつた。悴には一寸も罪はなく、これは皆親が惡いのぢや。これからは氣をつけて、悴を一人前の人間にするがよからうぞ。……お前が可哀さうだから、今度は特別に悴を返してやる。さあ受取れ。』

大切の息子が歸つて來たので、萬右衛門は大層喜びました。そして自分が不心得をした事が分つたので、大天狗を神樣のやうに有難がつて、いつまでも〳〵手を合せて、その後參を拜みました。

（をはり）

童謡

野口雨情選

（子供篇）

葉雞頭（賞）

神奈川　鈴木　英夫（十五才）

枯れた竹垣
白かつた
黄色い田圃に
向いた家

明るい秋日の
照る庭に
はげいと〳〵
伸びてゐた

月がさ（賞）

埼玉　岡田　シン（尋三）

でんしんばしらが
かささした
お月さんの
かささした
まるできれいな
およめさん
きれいな〳〵
かさだけど
あるけないのが
かはいさう

木枯

大阪市　中村　速生（十五才）

チラリホラリ
木の葉が散るよ
枯葉の道を
一人で行けば
ゴウゴウ寒い
山の風

ツラ、

東京　延原　正代（十二才）

山のそばの
ツラ、の御家
ギン〳〵ツラ、
ギンツラ、
アメンボツラ、に
ポーツラ、

ひかる

群馬　高橋　秀雄（尋四）

あをく高く
すんでる空に
とんぼのはねが
ちら〳〵光る

晝の螢

朝鮮　河野　青雨

晝の螢は
ほたる草のかげで
こつくり
こつくり
ゐねむりしてる
可愛い夢みて
ゐねむりしてる

雀

東京　榛名たけし（尋四）

お寺の
いてふの
木の枝で
雀がチユツチユツと
啼いてゐる
あたりは薄々
暗くなる

にはとり

埼玉　栗原　康哉（尋三）

朝とりがなきました
目がさめました
早くおきなと
なきました

百舌

茨城　寺山　茂（高一）

百舌が柿の木で
きい〳〵とないた
柘榴は
大きな口あいた

小めじろ

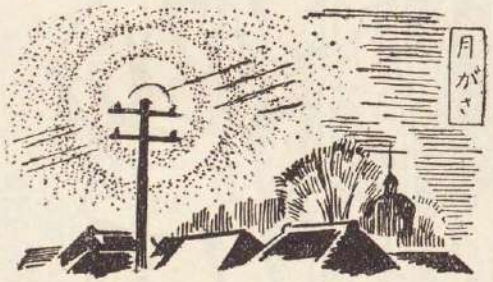
茨城　安武　夫（高一）

前の畠の桐の木で
小さな〳〵
小目白が
お日様お早よと
言つてゐた

からすまど

吉川セツ子（尋四）

からすまどに
あかい
お日がさしてゐる
おまどの



おかをは
あかかつた
あかい夕日の
しづむころ
おまどもしづかに
ねんねしよう
ふいふい〳〵
かぜがふいてきた
おまどはしづかに
となりの
おまどと
そうだんし
がたごと〳〵
おこりだす

朝

山口　木村　勇（尋六）

朝風が涼しい
には鳥が
ひとりごと言つて
ゐをあさる

白帆の唄

小城庄一

寺内七郎画

一

伊豫國の片端の浪靜かな濱邊の村にも、目出度いお正月は近づいて參りました。村の大人も子供も皆嬉しさうに顏を輝かして、それぞれお正月の支度をはじめました。

しかし春之介少年の一家ばかりには、その溫い光りは惠まれて來ませんでした。いや、村の人々が喜びにさざめけばさざめく程、春之介の心は重く沈んで、深いためいきが出るのでした。

今日も少年はしよんぼり、暮れてゆく濱邊の砂原に佇んで、物思ひに耽つてゐます。落日の色は蒼い海原を金色にそめて、島々のかげに泛んだ白帆の數數が、冷えきつた夕風をはらみつつ、濱近く漕ぎよせて來るさまが、繪の樣に美くしく見えます。

ふと後ろの砂丘から、わあ—つといふ人聲が聞えましたので、少年はびつくりして後ろをふりむきました。すると砂の上から圓い頭が三ツ四ツちら〳〵と出て又かくれました。

『また村の子供等のわるさだな。』少年は哀しげに呟いて、そこを歩み去らうとすると、

『やあい、父無し子の貧乏士族やあい——』

『おちぶれ武士の父無し子やあい——』

といふ聲と共に、惡たれ子僧らしい二三人が砂丘の上に姿を現はして、バラ〳〵と石を拾つて少年目がけて投げつけるのでした。それ等はみんな村の漁師の子で、春之介が父もなく、母親と姉とに育てられて貧しい暮しをしてゐるのを、子供心に蔑すんでいつも斯うした惡さをするのでした。それには又春之介が士族の子で、村の子達の樣に漁りの手傳をしたり、つまらない遊びに耽つたりしないで、お寺の和尙樣の所に通つて讀書の稽古を勵むのが、みんなのねたみを受けてゐるといふ點もあつたのです。

生れつき考深くて溫和しい子である春之介は、滅

多にこんな事で怒る樣な事はありませんでしたけれ共、村の子達に『父無し子』と嘲られると、唯無性に淋しくつて、ひとりひそかに唇をかみしめるばかりで、此頃はひたすらに、何故自分には人の樣にお父樣がないのだらうと、それのみ思ふ樣になつてしまひました。

少年が何時もの通り何も反抗ないと見て取ると、惡戯小僧達は張合がぬけたと見えて、

おやのない子とめんないちどり
めんないちどり
ひぐれの濱べでしよんぼり遊ぶ
しよんぼり遊ぶ

と節面白く聲合はせ、手拍子とり乍ら唄つて何處かへ行つて了ひました。

沖はもう暗くたそがれて、白帆のすがただけがはつきりと、浪と空との間に浮んでゐました。

春之介はとぼ〳〵と家路をさして歸つてゆくのでありました。

二

お正月はとう〳〵訪れて參りました。

それはどんな貧しい人の上にも、どんな哀れな人の上にも、矢張り何かしら胸のときめきを覺えさせる、うれしい日でした。

少年の家でも朝早く起きて、三人打連れて濱邊に初日の出を拜みにゆきました。そして家に歸ると、神棚を拜み、とそを祝ひ、心ばかりの貧しいお祝がすむと、お母樣は改まつて、春之介と姉の峯枝に向つて、

『さてお前達も一つ宛歳を迎えて、峯枝は十四、春之介は十二になつたのですから、今日からは一層心を張りつめて勉强しなければなりませぬ。』

お母樣を助けて縫針仕事を勵み、そのかたはら習や作法を學んでゐる姉の峯枝は、優しい眼を輝かして

『はい、よくわかりました。』

といつて行儀よく兩手をつきました。春之介もきちんと手をついて頭を下げました。

『それについて、今日は特にお前達に話して聞かせねばならぬ事があります。それは外でもありませぬお前達のお父樣の事です。』

母の言葉に二人はハツと胸轟かせました。わけて春之介の心は吾知らず躍りました。

『今迄お父樣はお亡くなりになつたとばかり言つて聞かしてゐましたが、あれはお前達がまだ餘り子供なので、本當の事を言つたら、どんなに小さい心をいためるか知れないと思つての、母のいつはり言です。お父樣は生きてゐらつしやるのです。』

『えつ？』二人は眼を見はりました。

『それはまだお前達がほんの赤坊の時でした。伊豫の殿樣から五百石を戴いて、立派な士として忠義を

勵んでゐらしつたお父樣は、或日路で病に苦しんでゐる哀れな旅の男を助けて、家に連れ歸り親切に介抱しておやりなされた。お父樣は藩中でも評判の情深いお方だつたのです。そして十日餘り經つと、旅の男はすつかり快くなつて、大變お父樣にお禮を言つて何處かに又立去りました。お父樣はいい事をしたと喜んでゐられると、後でその旅の男が百合若大次郎といふ海賊の大將で、役人に逐はれて逃げ廻つてゐた途中だつたといふ事が判つたのです。

惡い時には惡いもので、しかもそれを知つたのが大蔭齊といふ、日頃お父樣の評判のよいのをねたんでゐた士だつたので、直ぐ樣殿樣のもとに歸つて、お父樣が惡い海賊をかくまつてやつたと、いろ〳〵惡しざまに申上げたので、お父樣はあらぬ罪をきせられて殿樣からひどい罰をお受けにならねばならなくなりました。

お父樣は大蔭齊の卑怯な仕草をお憎みなされて討果さうとなされたが、大蔭は手痍を負ふただけで逃げのびて、又それを自分に都合のいい樣に殿樣にざんげんしたものですから、とう〳〵お父樣は國を追はれておしまひになつたのです。『憎いは大蔭奴きつとこの怨みは晴らしてやる』さう言つてお父樣は泣き乍ら、何もしらぬ赤坊のお前達をかはるがはる抱き上げ、いつかはお前達にめぐり會ふ事もあらう。どうぞ達者で大きくなつてくれ。と頬ずりなされた。そして大雪の降る寒い寒い日、唯一人役人の舟に乘せられて、海の向ふへ送られてお出でなされた。

それから妾は幼いお前達二人を抱いて泣き暮してゐたが、町に居てはお前達が大きくなつても肩身がせまいだらうと思つて、この淋しい村里に引込んだのです。今頃お父樣は何處かで私達の事を思ひ乍らお正月を迎えていらつしやるでせう。』

母はそつと涙をふいて、更に言葉を改め、神棚から取出した刀を其處において

『この短刀は春之介に、この懐劍は峯枝に、それぞれかたみとして殘してゆかれたものです。二本共昔から家に傳はつてゐる、備前長船といふ刀鍛冶がこさえた立派な刀ですが、銘の文字の下に小さく「梶原長兵衞」とお父樣の名前が彫りこんでありますから、護刀として大切に持つてゐなさい。そして私達は、今年こそこの村を離れて、お父樣を探すために旅に出なければなりませぬ。』

『ではお母樣、海の向ふに行つたらお父樣に會ふことが出來るので御座いますか。』

春之介は母に渡された短刀を抱きしめ乍ら、もう父に會つた樣な氣で勇み立つて言ひました。

『いいえさうではありませぬ。さつきから言ふ樣にお父樣は今頃何處に居られるか判らないのです。私達は巡禮になつて日本國中を、お父樣をお探しして歩くのです。』

母の心細さうな言葉に、峯枝も顏を曇らせましたが、春之介だけは、矢張りすぐにでも父に逢へさうな氣がして、無性に喜び乍ら

『私は今から和尙樣の所に行つてお別れをして參ります。』

といふと、家を飛出して一散にお寺の方に走つて行きました。

三

いよ〳〵三人が巡禮の姿になつて、杖を握り鈴を鳴らし乍ら、村を旅立つ日が來ました。

和尙樣を始め村の漁師やおかみさん達は、濱邊に集つて、三人が乘る小舟を見送りました。それは正月の七日で、未だ晴着を着かざつてゐる子供達もそこに顏を見せてゐましたけれ共、大勢に見送られて遠い旅に出るといふ話を聞くと何となく春之介が、自分達よりずつと偉い大人に見えて、誰も何時もの樣な惡口をつくものは居ませんでした。

『では隨分身體を大事にしてな、決してお母様や姉様にさからつてはなりませぬぞ。そして早くお父様に巡り會つて立派な人となり、一度はこの村へ歸つて來なさいよ。』

和尚様は春之介の頭を何度も撫でて聲をふるはせました。おかみさん達は默つてうつむいてゐました。小舟が岸からはなれると、春之介も胸が一杯になつて

『和尚様、御機嫌よろしう、皆様さよなら。』

とおじぎをしますと、和尚様は

『のみくひに氣をつけて病氣をなさるなよ、かせをひかぬ様に……あゝ〜可哀想に』

と同じことを二三べん言ひ乍ら、ぽろ〜と涙をこぼしましたので、見送つてゐた皆の人も一時に泣き出して了ひました。

それでも舟が沖に出ると、父と會ふことを考へて春之介は浮々と、晴れた空や蒼くうねる浪に見とれてゐました。峯枝は希望と不安の入りまじつた、案じ顔でつつましく坐つて默つてゐるし、母親は母親で、さまざまな過ぎ去つた事など思ひめぐらして、餘り言葉も交はさず、船頭の押す櫓の音のみが快よく海の上を響いてゆきました。

四

四國を後に中國に出た親子三人が、先づ西京（今の京都）を目指して行先遙かな旅を始めてから、十日二十日と夢の様に日は流れました。

晴れた日も曇つた日も三人共心をひきしめて、街道を通る人々の顔を眺めてゆきました。併しまるで父親の顔を見覺えてゐない二人の姉弟は、ただあの人が父ではないかなどと思ふばかりで、はじめて春之介もこの旅が思つた程樂しいものでないといふ事を知る様になりました。日が經つにつれて、旅の苦しみには慣れて來たものの、さうした心の淋しさが

深く胸を罩めて、雪や雨の夕暮などにはただもう世の中がさびしく哀しく、三人が三人共涙を見せまいと努めるのに精一杯でした。

それは姫路の町に辿りついた夜の事でした。三人が町外れの小さな宿屋に這入ると、直ぐ後ろから同じ宿屋についた、眼の鋭どい背の低い合羽を纏つて道中差しをさした旅の男がありました。

『ね、お母様、今直ぐ後ろから來たあの旅人は、今朝からずつと私達の後をつけてゐる樣ですが、何か惡い事でもするのでは御座いますまいか。』

悧口な峯枝はそつと母に囁きました。

『さうだねえ。』母も氣づいてゐるらしく心配相な顏をして、二人の子の顏を見くらべてゐます。昔はよく、女や子供が旅をすると、後をつけて金を盜んだり人さらひをしたりする惡い男がゐたものです。

春之介も心配になつたので、背に負ふた荷物の中から、備前長船の短刀を出して枕許に置き、まんじりともせず夜を更かしてゐると、はたして眞夜中頃室の障子がすうつと開いて灯の影に黑い人の姿が現はれました。

『誰だつ！』起き上つた春之介が鋭どくとがめつつ枕許の刀を取らうとすると、黑い人影はパッと飛込んで來て刀を奪ひ取るより早く、灯りを蹴倒して其儘室を飛出して了ひました。

『大變だ〳〵』春之介が大聲立てると、母も峯枝も起きて、宿の人を呼び起し大騒ぎになりました。宿に泊つて居た客も皆起きて來ました。その中に唯一人あの怪しい男の姿が見えないので、主人が先に立つて見にゆくと、寢床は藻ぬけのからで、男は何處へ行つたか影も形もありません。

仕方がないので引返して自分達の室をよく調べて見ると、何といふ不思議でせう。短刀ばかりか、母の枕の下に入れてゐた胴卷までなくなつてゐるではありませんか。

『あゝしまつた。』母親もさすがにびつくりして叫びました。その胴卷には長い間食ふや食はずでためて置いたお金がみんなはいつてゐたので、これを取られては明日から三人は本當の巡禮乞食にならねばならないのです。

主人の報せで町役人も飛んで來ました。そして春之介から樣子を聞き終ると

『うむそんな早業をするのは今この街道を荒し廻つてゐる朧ろ惣兵衞の奴に違ない。あいつは忍術使ひの盜人だからすばしこくて全く手におへないのだ』

と舌鼓をうちました。

三人は途方に暮れてしまひました。そして夜が明けると力なく宿を立出でて姫路の町を後にしました

『もう西京は間もなくです。西京につきさへすればお父樣の友達で秋澤主水といふ人がゐますから、その方に聞けば大低お父樣の居所も知れ樣し、又お金の事もどうでもなります。力を落さずにゆきませう』

さう言つて二人の子供を勵ましやらも、母の顏にはこれから先の旅をどうしたらいいだらう、といふ苦勞の色があり〳〵と見えました。

丁度三人が町から一里程離れた海ぞひの松原にさしかかつた時、母親は突然そこに倒れてもがき始めました。二人は驚いて

『どうなすつたのです、母樣〳〵』

と呼びましたが、唯お腹を押へて苦るしがるばかり、

『春之介や、早く水を〳〵』

峯枝は後ろに廻つて母を抱き乍らせき立てましたが、さて春之介が四邊を見廻して見ても水のあり相な處は見えません。

其時其處を通りかかつた身裝の立派な武士がありました。この樣を見ると

『どうしたのぢや』と近よつて來ましたが、

『や、貴樣は海賊をかくまつた不忠者の梶原長兵衞の妻子だな、とう〳〵乞食にまでなり下つたか』

と言ふとぺつと唾を吐きかけて又立去らうとしました。母は苦しげな眼を見開き、まじ〳〵と武士の顏を睨んでゐましたが

『おう、お前は卑怯者の大蔭齊！　口惜しい』

その聲を聞くと俄かに躍り上つた春之介が

『大蔭待て！』と氣色ばんでつめよりました。（續く）

貧乏神

西川喜平

岩枝もと岡畫

『明けましてお目出たう。』

『昨年中はいろ〳〵お世話になりまして。』

『當年も相かはらず。』と、往來の道端で、お辭儀をし合ひながら、年始の挨拶をしてゐるのは、木屋由兵衛と、成田屋金藏と云ふ、二人の商人でした。

この二人の商賣は道具屋で、木屋は木由、成田屋は成金と呼ばれて、仲間内でも人に知られた金持でありました。

年始廻りには、店の番頭を名代に出して、自分達は遊びに出掛ける所でした。

それでヒョックリ往來で出逢つたので、シカツメらしく年始の挨拶をすると、スグに打ちとけた、親しい友達の言葉になりました。

『成金さん今日は何所へお出掛けだね。』

『木由さんも何所へ行くのだ。』

『わしはこれから、七福神詣りをしやうと思つてゐるのさ。』

『それは丁度いゝわしもおつきあいをしやう。』とこれから二人連れ立つて、七福神詣りに出掛けました。

（江戸時代に七福神詣りが流行ました。七福神は、谷中と向島にあつて、來は多くの參詣人があつて中々賑ひました。殊に谷中の七福神は古い由緒のあるもので、參詣人も盛んにありました。今でも向島の七福神は、人に知られてゐて、ボツ〳〵參詣人もありますが、谷中の七福神は惜しいことに、今では信仰する人の外知る人も稀れになりました。）

二人は先づ不忍の辨天から始めて、護國院の大黒天、天王寺の毘沙門、長安寺の壽老人、修性院の布袋、青雲寺の惠比壽、東覺寺の福錄壽へと參詣に廻りました。

田端の東覺寺から動坂へ出て、駒込の大觀音の前へ來たのは日ももう西へ傾むく頃になりました。

成金は、木由の袖を引いて小聲になり、

『木由さん後からついて來る者を見ましたかい。』

と云はれて、木由は、

『エッ。』ト後を振り向いて見ると、二三間後から、色の黑い、痩せこけた爺さんが黑い衣を着て、右の手に澁團扇を持ち、左の手に杖をついて、トボ〳〵と素行いて來ます。木由も小聲で

『あれあなんだらう。』

『何んだかわからないが、田端の庚申塚あたりからついて來たらしい。時候外れの澁團扇なんぞ、まるで繪に描いた貧乏神ソックリだ、なんにしても氣味のわるい奴だ。』

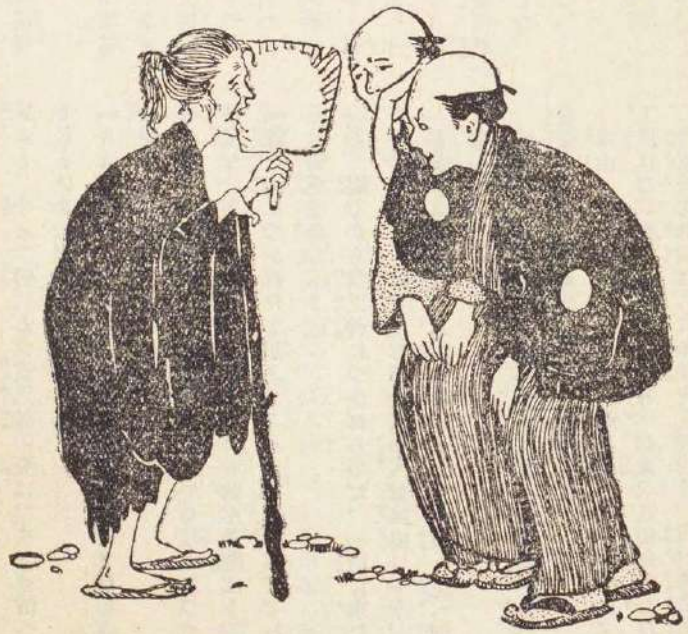
『貧乏神なんて、初春早々延喜でもない、早く行かう。』と、二人は足を早めて、二三丁も來て後を見ると、さつきの通り爺さんが二三間あとにゐるので、二人は顏を見合はせ、點頭合ひながら、スタ〳〵駈け出して、本郷の追分までくると、息が切れて堪らなくなつたので、立ち留ると、後で

『ウフ、、、、、、。』とイヤな笑ひ聲がしました。

二人はギョッとして振り返ると、さつきの爺さん

が、澁團扇で二人をあほいで、
『急いで駈け出して、サゾ暑くなつたらう。澁團扇の風もいゝものだぞ。』
二人は驚いて聲も出ませんでした。
爺さんは、ニヤ〳〵笑ひ顔をして、
『ナニモ驚くことはないよ。お前達がイクラ駈けやうが、逃げやうが、俺は何所までもついて行くのだ。家へ入れば、戸の節穴からでも入れるのだ。どうだお前達の懐へチヨイト入つてやらうか。』と云ひますと、
成金はあわてゝ懐を押へ、
『ジョ〳〵冗談じやあない、ソンナ汚らしい爺さんに入られちや大變だ。』
木由はビク〳〵しながら、
『一體お前さんは何所の人だ、そして何んでわしらについて來るのだね。』
『江戸つ兒に似合はない血の巡りのわるい男だ。形

姿を見ても知れさうなものだ。何をかくさう俺は貧乏神だよ。』
『エッ。』と二人は、ビックリして顔の色も變つてしまひました。
『俺がとうから目をつけてゐるのは、お前達二人だ。今年はどつちかの家へ厄介になるつもりだ。』と云はれ、二人は頭を下げて
『どうぞ御勘辨を願ひたいので。世間には暮になつて、年を越せないで困つてゐる者が澤山にあります。私達は日頃福の神を信心してゐるので、お蔭で無事に目出度春を迎へました。そこで今日は七福神へお禮かた〴〵參詣をいたしたのでございます。』
『今申上げます通りで、福神のおいでになる所へお入りになつても、お心持ちのよいことはございますまい。どうぞ外の家をお見立てになつていたゞきたいので。』と二人は、交る〳〵一生懸命に賴みました。
『イヤ〳〵俺は福神からの賴みで、お前達の家へ行くのだから、そんな苦情は福神の方へ云つておくれ。どうしてもお前達をはなれないよ。』
二人はこの貧乏神の言葉を聞いてガッカリしてしまひました。
『成金さん、初春早々とんだ事になつた。どうしたものだらう。』
『木由さん、こうなつたら仕方がない。何所へかお供をして、一杯上げて御勘辨を願はふではないか。』と、成金はペコ〳〵お辭儀をして、
『エー如何でございませう、春のことで御座いますから、御迷惑でも一寸一ト口さし上げたいので。』と云ふと、貧乏神は怖い顔をして睨みつけ
『ナンダ一ト口など、、お前達は直に酒を飲みたがる。それが俺の氣に入らないのだ。』と云つてから、貧乏神は急に顔を和げて、



『春早々叱言を云つて氣の毒だ。今夜から厄介になる家を相談して極めろ。』

『へイ〳〵恐れ入りました。成金さんこうなつては仕方がない、誰も迷惑は同じことだ。イッソ、クジにしやうではないか。』

『ムヽこれは面白い、クジもいゝが、イッソ手つ取り早く、ジャン拳で極めやう。』

『よからう〳〵。』と、呑氣な二人は、往來でジャン拳を始めました。

二人は、腕まくりをして右の手を出し、

『ジャンケンポン。』

『ジャンケンポン。』とやると、木由は石、成金は紙を出したので、とう〳〵木由の負けになりました。

『勝つた〳〵。』と喜ぶ成金に引かへ、

『アヽ情ない。』

と木由は泣きさうな顔になりました。

木由は『いよ〳〵わしの家が貧乏神のお宿か。』と見ると、今まで傍にゐた貧乏神の姿は、イッカ消へてしまひました。

『オヤゐなくなつた、これは不思議だ、もうわしの身體へついてしまつたのかな。』

『ナルホド消へてしまつた、貧乏神がゐなくなつて目出たい〳〵サア景氣直しに酒でも飲んで遊ばう。』

『貧乏神につかれたと思ふと、イヤな心持ちだ、わしは御免を蒙むらう。』

『そう辭ぐから貧乏神につかれるのだ、一所に來なさい、ナニイヤだそんならわし一人で出掛けやう。』

と成金は陽氣に、木由は悄然として、右と左へ別れました。

成金は、貧乏神を木由へ押つつけた祝ひだと遊び友達を集め、御馳走をして喜びました。

木由はガッカリして、貧乏神を何んとか追ひ出す工風はないかと、いろ〳〵考へた末、日頃知り合ひの青雲寺の和尚さんに相談をしやうと、又日暮の里の青雲寺へ出掛けました。

青雲寺の和尚さんに逢つて、今日の貧乏神の話しをして相談をしかけました。

和尚さんは木由の顔を、ヂット見てゐましたが、ニコ〳〵笑つて

『ナルホド、春早々貧乏神につかれては困るだらう、しかし、イクラお經を讀んでも福の神を賴んでも無駄な事だ、貧乏神だとて粗末には出來ない、運、不運はお前さんの心掛け一とつだ、明日から朝早く起き、商賣に精を出して稼ぎなさい。そしてこの福の神を信仰なさい。』と云つて、恵比壽の掛物をくれました。

木由は和尚さんに云はれた通りにして、恵比壽の掛物を、床の間へ掛け、毎日朝晩となく拜んでゐましたが、今さでよりはだん〳〵商賣は繁昌して、ます〳〵身代がよくなりました。

それに引かへ成金は、貧乏神を追ひ拂つたと喜んで遊んでゐましたが、だん〳〵商賣がさびれて、とう〳〵その年の暮に店を閉めてしまひました。

× × ×

その年も暮れて、正月の二日になりました。

由兵衛が寢てゐると

『由兵衛〳〵。』

と呼ぶ聲に、頭を上げて見ると、掛物にある通りの恵比壽が、枕元においでゞした。

『一年前にお前達に逢つた貧乏神は、わしが假に姿を現はしたのぢや、お前は和尚の言葉を守り、心を入れかへ稼いだので、福運を得る事が出來た。一年前の事を忘れぬ爲に、これをやるぞ。』と下さつたのは一本の澁團扇でした。

由兵衛は喜んで澁團扇を頂くとたん、目が覺めますと、これは目度たい初夢でありました。

（をはり）

岩を小くする

沖野岩三郎

川上四郎畫

後村上天皇さまの皇子に、寛成と申すお方がございました。まだごく御幼少の時、皇子は多勢の家來たちと御一しょに、吉野川の上流

なつみの川岸へ、鷹狩をごらんに、おいでになりました。

川岸に大きな岩があつて、その上に松の木が一本枝ぶり美しく生えてゐます。

寛成の皇子は、それが大へん、お氣に入つたとみえ、お傍にゐた中將河野實爲に、

『歸る時、あの岩と松とを、御所のお庭へもつて行つて下さい。陛下に献上したいから。』と仰せになりました。

岩と云つても大きな岩で、何萬貫の重さかわかりません。けれども、まだお小い皇子のことですから、鷹狩を御らんになつてゐるうちに、其の岩のことは、お忘れになることと思ひました。中將は、

『よろしうございます。歸りにはきつと持つてまゐりませう。』といゝ加減なお返事をいたしておきました。

やがて鷹狩もすんで、みんな御所の方へ歸りました。

途中で寛成の皇子は、忠行の侍從に、

『あ、あの岩を忘れて來たではないか。』と申されました。すると忠行の侍從は、

『あの岩はなか〳〵重うございますから、私ひとりの力では、

とても持つて參ることは出來ませんが、あの民部大輔は大へんな力持でございますから、あとから持つてまゐります。』と申上げました。そして、岩と松との事は、お忘れになるやうに、いろ／＼面白いお話をいたしましたが、皇子は御所へお歸りになると、すぐ河野中將をおよびになつて、

『あの岩と松はどうしたか。』とのおたづねでございました。中將も困りましたので、

『岩のことは忠行の侍從に、よくおきき下さいまし』と申し上げますと、

『では、すぐ忠行の侍從に、こゝへおいでと云つて下さい。』と皇子は、大へんなおむつかり。

忠行の侍從がまゐりますと、

『あの岩はどうした。早くもつて來ないか。岩には松が生えてゐた筈だ。』と仰せになりました。

『民部大輔が、あとから持つてまゐつた筈でございます。唯今大輔をこれへ呼び出しませう。』と侍從はまたいゝ加減なことを申上げましたが、皇子はなかなか御承知なさらないで、

『あれだけ、中將によく／＼言ひつけて置いたのに、どうして早く持つてまゐらぬのか。』と申されて、悲しさうに、うなだれてゐられますので、中將も困つてしまつて、その事を天皇さまに申し上げますと、天皇さまは、手を拍つてお笑ひになり、

『それは面白い、その岩を是非見たいものだ。民部大輔は日本一の力持だから、きつと持つて來たに相違ない。早くこゝへもつて來るやうに言ひつけるがよい。』と申されました。

中將は室の外に行つて、民部大輔に、

『皇子さまが是非、あの岩と松とをほしいと仰せられるが、どうしたらば、いゝだらう？』と相談いたしました。

民部大輔も弱つてしまつて、暫く考へ込んでゐましたが、

『よろしい、いゝ事を考へつきました。かういたしませう。』と云つて、御所のお庭にあつた小い小い岩に松の小枝を縛りつけて、中將と二人で、さも重さうに、よいしよ、よいしよと掛聲して、それを皇子の前に据ゑました。

『川にあつたのは、もつと大きな岩だ。こんな小つぽけな岩ではなかつた。』と皇子は申しました。

『あの大きな岩が、こんなに小くなつたのでございます。』と民部大輔は、まじめな顔で申上げました。

『どうして、そんなに小くなつたのか、そのわけをお話し。』と皇子は小いお膝を進めました。

『あの川岸にありました岩を、兩手に力をこめて、うんと擡ぎあげて、山路をかついで右と左から山と山とのさし出たところまでまゐりますと、岩は兩方の岸に、がつしり挾まつてしまひました。』

『うん、あの山と山との間は狹いから、ひつかゝつたかも知れない。それからどうした？』

『はい、大輔非常に困つてゐますと、後から大きな聲で、何だつて、そんな所へ大きな岩をかつぎ込んだのだ。通ることも出來ないぢやないかと呶鳴るものがありました。』

『その大輔を叱つたのは、誰であつたか。』

『それはあの法螺貝を吹いて、御祈禱をいたします山伏の一人でございました。』

『山伏はどんなことをしたか。』

皇子はだん／＼お話が面白くなつて來ましたので、御機嫌がなほつてまゐりました。

『私は山伏に申しました。そんなに呶鳴りつけるものではない。この岩は畏れ多くも、寛成の皇子さまから天皇さまに御献上なさるお土產でございます。どうしても、これは御所まで持つて行かなければならない岩でございます……すると山伏は急に言葉を柔げて、あア、あの皇子さまのお土產でございますか。それならば、その岩を少しく小さくして上げま

せうと云つて、手にもつてゐた珠數をもみもみ、モジャモジャ、ウジャウジャ……と文言を唱へはじめました。

皇子はにこ〳〵お笑ひになつて、

『岩は小くなつたか。』と申されました。

『はい、岩はだん〳〵小さくなりまして、たうとう、こんなになつてしまひました。そこで、私は、こんなに小くなつては困ります。どうぞ元々通り大きくして下さいと申しましたが、山伏は頭をふつて、これから御所までの途中には、狹い所が何ケ所もあります。元の通り大きくすれば、どうしても御所まで持つてまゐることは出來ませんと申しました。なるほど、それもさうだと思ひましたので、この通り小さくなつたまゝ持つてまゐりましたのでございます。』

民部大輔の話を默つてお聞きになつてゐました天皇樣も、忠行侍從も、河野中將も、みんな感心してしまひました。ところが皇子は可愛いお眼々を廣く見はつて、

『では、しかたがない。しかし、そんな偉い山伏に會つてみたいものだ。早く行つて呼んで來て下さい』と申されました。大輔は殘念さうな顏をして、

『仰せではございますが、其の山伏と申しまするは、とても足の早い男でございましたから、もう何十里さきへ行つたか知れません。今から追つかけたところで、追ひつくことは思ひもよらぬことでございます。』と申上げました。

すると、皇子も殘念さうなお顏をなすつて、

『殘念なことをした。其の山伏を呼んで來たなら、民部大輔のついた其の嘘を、もつと小くしてやるやうに祈らせる筈だつたが。』と申されました。

まだ五歳か六歳の御幼少なころでしたが、お賢い寛成の皇子は、何もかも、ようく御承知だつたのです。そしてこんな奇拔なことを仰しやつたのでございました。

この寛成の皇子が、御成長の後に御即位なされて、長慶天皇とおなりになつたのでございます。

（をはり）

暗闇城

小島政二郎

寺内七郎画

愛讀者へ

私がこれからお話しようとする冒險談は、ナポレオン一世皇帝の部下にその人ありと謳はれた勇將エチエン、ジエラールの懷舊談である。ジエラール將軍が、歳老いて後、巴里のカフエーで、人々の求むるままに、若かりし折の功名手柄を語り聞かした世にも勇ましい物語の數々である……。

一

諸君、まづ最初から話さなければならないが、千八百〇七年の二月に、あのダンチツク（さう、ドイツの北方海岸の市街だ）を占領したすぐ後のことだつた。僕と（その頃はまだ二十五歳の血氣盛りで、中尉であつた）ルジヤンドル大佐とに、ドイツから四百頭の新馬を、戰線へ輸送するやうにと云ふ命令が降つた。その時、わが輕騎兵第十聯隊は、東部ポーランドに陣を張つてゐた。

ところが、非常な寒氣と、エイローの大戰とで、味方は大部分の軍馬を失つてゐた。だから、我々が新しい乘馬を運んで行つたなら、どんなに喜び迎へられたか分らなかつた。しかし、雪は深く、路は惡く、その上、負傷が直つて再び戰地へ歸る兵卒が僅かに二十人、四百頭の馬にこれだけの人數では、思ふやうに路の捗らなかつたのも無理はあるまい。

兎に角、我々がビスチユラ河を渡つて、リーゼンベルグの町まで來た時だつた。ルジヤンドル少佐が一枚の紙を手にして僕の部屋へはひつて來た。

『殘念だが、君とは別れなければならないよ。』と、彼は失望の色を浮べながら云つた。

しかし、僕はそんなに悲しくはなかつた。なぜと云つて、彼は僕にとつて有り難い上官ではなかつたからである。で、なんにも云はずに立ち上つて敬禮

した。

すると、少佐は、

『これは、ラサール將軍からの命令だ。君はすぐ、ロッセルへ行つて、聯隊の參謀本部へ出頭して貰ひたい。』

僕にとつて、これよりいゝ命令はちよつと考へられなかつた。實を云ふと、僕はこの時代から既に有望な青年士官として上官に認められてゐたのだ。だから、このふいの命令にしても、明かに僕に早く聯隊に歸つて來て、以前の位置に就いてくれと云ふ意味が含まれてゐるに相違なかつた。思ふに、ラサール將軍にも、僕がゐないと、中隊が旨く行かないことが分つたのであらう。

僕は早速二階の部屋を出ると、ラタプランと云ふ名の、眞黑な大馬に鞍を置いて、寂しい一人旅に出發した。

第十聯隊の制服の色は、青である。空色の軍帽に、赤い羽根飾。日々の生活に疲れた哀れなポーランド人の瞳には、この僕の姿がどんなに見事に映つたことであらう。身に沁む朝の寒氣は、一足毎にラタプランの眞黑な四肢や、美しい背筋や横腹を、艶々と耀かした。路の上の蹄の音や、勇ましい首の一振り毎に響く手綱の鎖の音が、今でも僕の胸の血潮を躍らせるやうに聞えて來る。かう云へば、諸君にも、第十聯隊の中で有數の騎手であり劍士であるエチエン、ジエラールが、どんな風に馬を進めて行つたか略お分りになつたことと思ふ。さう云へば、リーゼンベルグの町の兩側の窓から、大勢の人が、僕の勇姿を見送つてゐた。

空には雲一つなかつた。明るく冷たい太陽が、涯ない雪の原の上に耀いてゐた。ラタプランの鼻からは、二本の白い筋が流れ出て、轡の端には氷柱が下つてゐた。

正午頃、僕はサールフエルトの村を通過した。僕

の進んでゐる路は、ナポレオン陛下が冬籠りしてゐられるオストロードの町への近路であつた。皇帝の周圍には、七個軍團の歩兵が宿營してゐた。從つて路はそこへ行く馬車や荷車で一杯だつた。僕は、厭應なしに彈藥車や、糧食車や、傳令や、補充兵や、傷病兵の群のあとから、ノロ〳〵と進むより外に仕

方がなかつた。

だから、暫く行つてから、路が二叉に別れてゐるのを發見した時の、僕の喜びは非常なものだつた。その路は、北へ、樅の林の中へと消えてゐた。

その分岐點に、一軒の宿屋の立つてゐるのが目に附いた。その前で、第三コンフランス輕騎兵聯隊の斥候兵の一團が、將に馬に乘らうとしてゐた。入口の階段の上には、スラッとした、色白の若い士官が立つてゐた。彼はかうした鬼神をも取り拉ぐやうな兵卒を率ゐて行くよりも、寧ろ敎會の牧師にでもなつた方がふさはしさうな樣子をしてゐた。

『いゝお天氣ですね。』

僕が馬を乘り近附けるのを見ると、彼は聲を掛けた。

『本當にいゝお天氣ですね。――僕は、エチエン・ジエラール中尉です。』

僕が名告ると、彼は僕のことを知つてゐるらしい表情をした。僕が有名な六人の劍士を相手に決鬪して以來、すべての人が僕を知つてゐた。しかし、僕の碎けた態度のせゐで、彼は堅くならずに話すことが出來た。

『僕は、第三聯隊のヂユロック少尉です。』

『新らしく編入されたのですか。』

『えゝ、先週編入されたばかりです。』

僕は彼の色の白さと云ひ、部下の兵卒どもが馬上で息けてゐる樣子と云ひ、きつとそんなことだらうと推察してゐた。實際、僕にも覺えがある。學校を出たばかりの頃、僕よりは多年戰爭の經驗のある古兵達に向つて、馴れぬ號令を掛ける時には、いつでも顏が赤らんだものだ。號令と云ふよりは、寧ろ

『どうか橫隊に變つて下さい。』とか

『若しよかつたら、並足で進んで下さい。』とか云つた方がふさはしい心持がした。だから、この場合、彼の部下が稍不規律なのを見ても、僕はヂユロック少尉を輕蔑する氣は毛頭なかつた。その代りに、僕は兵卒をぐッと一睨みしてやつた。すると、彼等は鞍の上で急にシャンとした。

『失禮ですが、君はこの北の路を通つてどこへ行くつもりなのですか。』と僕が訊ねた。

『アランスドルフのあたりまで、偵察して來いと云ふのが命令なのです。』

『ぢや、よかつたら、僕も一緒に行かせて貰へませんか。――急がば廻れ、と云ひますからね。』

實際、この路は迂回してゐた。

僕とヂユロックとが先頭に進むと、六人の兵卒が蹄の音も勇しくあとに續いた。このヂユロックと云ふ青年は、實にいゝ人間だつた。彼の頭の中には、サンシールの士官學校で敎はつて來たことばかりで一杯だつた。そのくせ、秣の混ぜ方も知らなければ、馬の足の手入れの仕方なんかも滿足には知らなかつた。それでも、まだ軍隊の惡い氣風に染まらない、いゝ所があつた。

やがて、ヘーノーと云ふ村まで來た。ヂユロックは、驛舍へ馬を進めると、宿の主人を呼び出して

『この邊に、自ら男爵と稱してゐるストローベンタルと云ふ男のゐるのを知らないかね。』と訊ねた。

驛舍の主人はかぶりを振つた。そこで、僕達はまた路を急いだ。初め僕は氣にも留めずにゐたが、次の村でも、ヂユロックが同じ問を發して、同じやうに知らないと云はれてゐるのを見ると、一體ストローベンタル男爵と云ふのは何者なのか彼に聞いて見たくなつた。

すると、ヂユロックは急に子供らしい顏を赤らめながら、

『え、僕はその男に、非常に重大な用向を傳へなければならないのです。』と云つた。

無論これで僕は納得しはしなかつた。唯彼の態度の中に、どことなくこれ以上聞かれることを望まな

いらしい氣振が見えたので、わざと追究しなかつた。しかし、その後も、ヂュロックは、路で百姓に逢ひ

さへすれば、同じ質問を繰り返してゐた。

その間に、僕達は山腹を廻つて、我軍の宿營地からは遠く離れて行つてゐた。見ると、遙か南の方に當つて、凍つたやうな空に、灰色の煙が二三本あがつてゐる。あれは、確に戰線に於る我軍の歩哨線に違ひない。北方には、ロシア軍が冬の陣を敷いてゐるのだが、そこには何物も見えなかつた。

やがて、僕達が低い小山の上に出た時には、太陽は既に沈み掛けてゐた。見ると、右手には、小さな村が散在してゐた。左の方には、高い城が、松林の間から黑々と聳え立つてゐた。

丁度そこへ、荷車を挽いた百姓が通り掛かつた。羊皮のジャケツを着た、髮の毛の艶の惡い、打ち沈んだ男である。ヂュロックは見るより、

『あれは、何と云ふ村かね。』と訊ねた。

『アレンスドルフと云ひますよ。』と、百姓は野卑な地方語で答へた。

『さう、ぢや今夜はあすこで泊りだ。時に、君は、ストローベンタル男爵と云ふ人を知らないかね。』

『あ、そりやあの暗闇城の持主でさあ。』かう云ひながら、百姓は、森の向うの城の櫓を指さした。

ヂュロックは、目の前へ獲物が飛び出した時の狩人のやうに、喜びの叫びを上げた。目は耀き、頰は血の氣を失ひ、口のあたりには一種の凄さが漂つた。彼は一時我れを忘れたやうに見えた。百姓は彼の樣子に氣味惡さうに後退りした。ヂュロックは、そのまま蒼色の馬から乘り出すやうにして、高い眞黑な塔をぢつと見詰めてゐた。

『どうして君はあれを暗闇城なんて呼ぶんだ?』その時、僕が初めて口を出した。

『いえ、この地方の者がみんなさう呼んでゐるんですよ。なんでも、あすこでは、人知れぬ暗い惡事が行はれてゐるに違ひありません。このポーランド第一の惡者が、あの中に十四年も住んでゐるところを見れば、確に惡事が行はれてゐるに相違ありませんや。』

（つゞく）

この道行つたら

中島　允

岩岡とも枝畫

この道行つたら
どこへ行く

さつき
仔牛が　行つたけど

この道行つたら
牧場かな

牧場にや
お馬も　ゐるだろに

丘に　のぼつて
見て　見よか

だけど
牧場は遠いだろ

綴方

彌藤佐次郎選

ある月夜（賞）

仙臺市土樋二四五
阿部和子（十四才）

青いやうな月の光が靜に流れてゐます。『お二階はずい分涼しいのね。』『ほんにねえ、したは暑くつてたまらないわ。』

お父樣にお休みなさいを言ひに來た私達は、もうしたへをりるのがいやになつて、二階のてすりにもたれてうつとりとお月樣をながめてゐました。

『和子姉さんの影、お化けの樣だわ。』妹の聲に驚いて芝生にうつゝた影を見ると、本當にみんなまるでお化けのやうに大きくうつゝてゐます。

『みつちやんだつて。』と言ふと、小さい妹が、『ちえちやんもほら、こんなに大きいわ。』と言つて、自分の影を私に見せました。

今度はお父樣が縁側へ出ていらしつて、お化けのやうな手つきをなさつたので、芝生の上にきみわるい大きな影がうつりました。私が『したで誰か見たら、ずゐ分びつくりするわねえ。』と言つたので妹達は『お母ちやまか誰か見ればいゝのにねえ。』と笑ひました。時々、涼しいそよ風がはいつて來ます。その度に小さい妹は『おゝ涼しい。』と言つて喜びました。

櫻の葉が月の光でうす白く見えます。かすかに川の流れる音がします。川の向ふの家から、白いゆかたを着た人が出て來ました。川岸で立止つて川の中を見てゐます。お月樣はきつと川の中にうつつてゐるでせう。青白い竹林が、風に吹かれて、ゆら〳〵ゆれ動いてゐます。向ふの山は靜かにものを考へてゐるやうです。

『もう私ねるわ。』妹が言つたので私は『そう、そんならしたへ行きませう。』と言ひました。

けれども、またお月樣を見上げました。やさしい美しいお月樣、なんだか心のありさうなお月樣、あのお月樣の中に、地球のやうに山や川があるのだと思ふと、不思議な氣がしました。

『早く行きませうよう。』妹達が言

つたので、やう〳〵お月樣から目をはなして、したへ行きました。

「學校ゝ東方」（賞）
和歌山縣伊都郡妙寺町
齋藤好治（十三）

床に就いてからも、二階から見たあの涼しい靜かな景色が、目の前に見えてくるやうな氣がしました。今はお父樣が一人でお月樣を見てゐらつしやるかしら、お月樣はやつぱり、やさしく美しく光つてゐるかしら、などゝ思つてゐるうちいつか眠つてしまひました。

だまされて（賞）

三重縣員辨郡中里校（高二）
中村マス

『御免なさい』と細い女の聲がした。『おいでなさい』といひながら奥の間で裁縫をしてゐた私はすぐつと立つて店間にき、『何でした』といはふとすると、お客樣の姿が見えない。あれどうしたのだらう、あれはたしか女の聲であつたのにと、不思議に思ひながらあたりをきよろ〳〵見まわしても何一つゐる樣子もない。誰もゐなくてもよい、大きい聲でいつてやらうと思ひ、

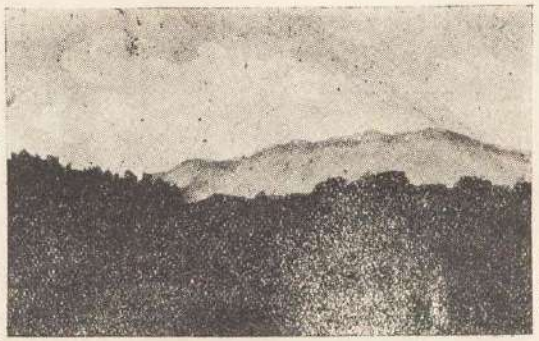
『何でした』とさけぶと、不意にくすくすと何所からか女の笑ひ聲が聞えてくる。よく耳をすましてみるとどうやら庭のすみらしい。

『誰じや笑つておるのは』あまりしやくにさはつたものだから前よりも大聲でさけんだ。

『ふゝゝゝゝ』笑ひころげる樣にして出て來たのは妹である。始めの中はお客樣とばかり思つてていねいにいつてゐたのに、不意に妹が飛びだしたのだからたまらない

『何じやお前じやつたのか、お客樣かと思つて仕事を止めて來たのに人だましやな』とがみがみいふと、『上手にだまされたな。やつは

「風　景」（賞）
京都府宇治郡宇治村
横井修吉（十三才）



がわくわくして一つ二つぶつてやりたい。

『人だまし、人だまし、よろこんでをれ』何もいえない私は、たゞ人だましとばかりいつてゐるよりしかたがない。笑をちよつと止めた妹は私の顔を見て、

『あのこはい顔どうぢや、だましてやつたらおこつてをるに、ふゝゝゝ』妹は思ひだしたのか又笑ひだした。今までいかつてゐた私も、妹の笑ふ聲に何だか面白い節でもついてゐる樣であるので、ついつりこまれて急に面白さがこみあげてくる。又も妹にののしられてはと思ひ、すつと奥の間にかけこんだ。

『あゝほんとうにしかたのない妹だなあ』と、つぶやきながら仕事に取りかゝつた。

『じようやはよい子だねんねしな』やうやく笑がつきたと見え妹は歌ひながら新道の方へ出ていつた。あゝほんとうにしかたのない妹だな。もう二度とだまされやしない。

ねこの子

東京府下戸塚第一校
新津三四子（尋三）

ニャン〳〵とふろばでねこの泣きごゑがしました。私はびつくりしていつて見ますと、かわいゝねこの子が五匹お母さんのおつぱいをのんでゐました。お母さんのねこは、くたびれたやうにねてゐました。

『ねえさん、ねこの子が生まれたのよ。來てごらんなさい。』と呼ぶと、ねえさんたちはかけて來てお

どろいてゐました。

お母樣にさういつたらお母樣は『子ばかし生んでこまるね。』とへんなかほをなさいました。『お母樣このねこの子にごはんたべさせて。』といつたら、皆からわらわれました。あとでお母樣が『こんなにたくさんそだてても こまるからかはいさうだけれど、すてなくてはならない。』とねえさんにおつしやつてゐるのをきいて、こんなかわいゝねこをすてようとするお母樣が、うらめしくなりました。

開かぬ花

大津市女子師範附屬校
松浦美代子（尋五）

今から思ひ出すと今年の五月十四日、それは忘れもしないあの好きな弟の亡くなつた日である。

弟がこの世を去つてから六ヶ月もたつた。悲しい、さびしい、月日はゆめの如くにたつてゆくが『弟の死』といふことはどうしても忘れる事が出來ない。學校にゆくといつも校舍の入口の所にさびしさうに立つてゐた姿があり〳〵と浮ぶのである。黒いラシャの洋服を着て學校帽子をかむつてゐて目はどこか遠くの空を視つめてゐるやうでした。私は『正ちやん』と後から呼ぶと、だまつてこちらをむいて、につこりしました。そして二人は十五分の休みの間むつまじくお話をしました。けれども今はもう姉弟二人で話すことは出來ない。山岸さんが妹さんと登校していらつしやるのを見たり、一年の人がみんなでゆうぎなどをしられるのを見ると、一そう弟のゐないのがさびしく感じられる。

家にゐると、弟の大切にしてゐた靜岡ぬりの箱の中から出て來るのは、幼稚園時の手工、私は時々

「肖　像」　山村カエ
熊本縣阿蘇郡高森尋校（尋六）

「髪結ひ」

和歌山縣伊都郡妙寺校高一

森田友晴

出して見ては涙ぐむのである。ごはんをいただく時でも、第一人ゐないと非常に人が少なくなつたやうな氣がする。あゝこれから開かうとするつぼみの中になぜ死んだのでありませう。今日は何の思ひか、こんなことを書きながら、何となくかなしくて涙がこぼれます。

なつかしいをばさん

神奈川縣鎌倉郡片瀬正修校尋六

岩崎勝子

なんの氣なしに家へはいつた。するとお母さんと、女の人が面白さうにお話をしてゐる。そして妹もそばにすはつてにこ〳〵笑つてゐる。私は、『だれかしら』とくびをかしげた。すると妹が口まねで『おばさん』と言つた。おばさんはまだそれに氣づかぬらしい。私はうれしかつた。私はすぐかばんを下においておばさんに御あいさつをした。するとおばさんもおじぎをした。そして私はえんがはをとほつてお勝手の方へ行くと、姉さんが『今歸つたの、おばさんに御あいさつした』と聞いた。私は『うん』とへんじをした。そしてはかまをとつておばさんの居る部屋へ行つた。するとお母さんが『ほらおみやげをいたゞいたわ。勝ちやんのすきなものを』私ははづかしくなつてお母さんのかげへかくれてしまつた。私はおばさんがあと二日で歸ると言ふ話を妹に聞いた。私はなんとなく、おばさんとわかれる氣がしない。

そしてあと二日がのろく〳〵くればいゝと思つた。私はお母さんのかげからおばさんのお顔をのぞいた。ほんとになつかしいおばさんとわかれる氣がしない。

お松さん

東京芝區三田四國町二ノ二

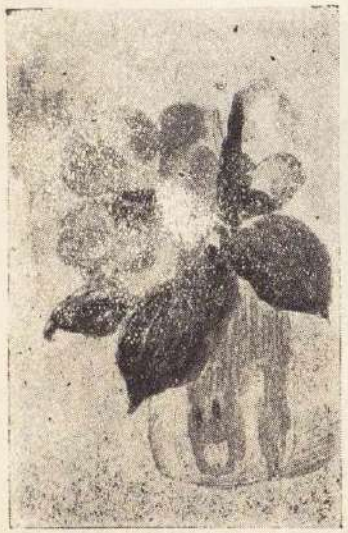
千代田勝弘

お松さんは、僕の家にせんかゝゐる、若い女中でした。僕が尋常二年生の時、お松さんは、お松さんのお母さんにつれられてきて、やとわれました。そしてその時から、いろ〳〵僕の家で一生けんめい働いてくれました。朝はちやんと御飯をたいたり、すつかり座敷をそうじしたりしました。夕方には、お風呂をわかしてくれます。僕が小さい時、無理な事を言つてお松さんを困らせた事を覺えてゐます。又、雨が降つた日なぞ、學校まで傘を持つてきてくれました。

父さんも母さんも『お松は、よく働く娘だ。』と言つてほめてゐます。僕も、お松さんが大すきでした。

けれど、このお松さんが今度、旦那さんをもつので、よそへ行かなければならなくなりました。そして、この二三日前にお松さんは『いろ〳〵お世わになりました。では皆さんさよなら。勝ちやんもよく勉强してね。』と言つて、荷物をみんな持つて出てゆきました。

別れるとき、僕も父さんも母さんも、お松さんもみんな涙を流して泣きました。僕は、お松さんの樣なよく働く人は、きつと旦那さんにも、ほめられるだらうと思ひました。



「つばき」長谷川千春

千葉縣印旛郡久住村住(十五)

床屋

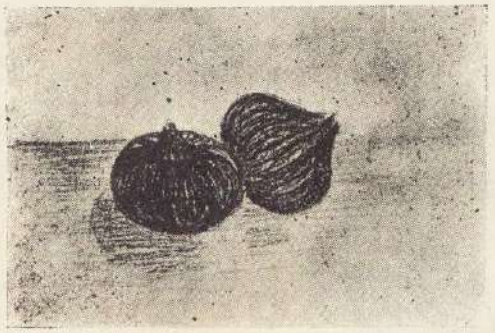
京都府加佐郡中舞鶴町花木通二丁目

前野萬馬(十二才)

ザク〳〵といふ音と一しよに、はら〳〵と赤黑い毛がまつ白な前

「たまねぎ」

東京市深川區伊勢町
沖津清琉（十五才）



かけの上につもる。ガラス戸こしに外を見ると、聲は聞えぬが青い服を着た職工さんたちが口をもぐもぐさせながら歸つて行くのが見える。ふいに電氣の光が反射してぴかりと僕の目をいた。おじさんが、氣が僕の頭の上につりさげたのだ。電燈をながめて居ると、うと〳〵と寢てしまつた。ふいに『こちらへ』と聲がする。びつくりして目を開くと、おじさんがいすに手をかけてにや〳〵と笑つて居られる。いすの前に行くとぐつたりとすわつた。おぢさんはせつけんをとかしてぼくの顏にぬられた。そしてそれが頸すじに流れこんで來て、つめたくつてならない。『おぢさん早くふいてんか』と言ひたかつたが、言ひにくいのでやめた。ぼくは仕方なしそつと前かけでぬぐつた。

姉さん

東京府下瀧野川町田端八四
神藤正七（十三才）

『姉さんは、遠い〳〵お國に行きました。』と、僕は文夫をだましました。今日も文夫を子守りしてゐるのでした。いつも文夫に姉さんの事を、きかれると急に悲しくなるのでした。思ひ出せば學校の遠足に行く日でした。僕ひとり、朝早く起きて遠足の支度をしてゐる時でした。姉は、これを見てか起きて來て手傳つてくれました。その上姉は、朝の寂しい道を、學校まで送つて來て下さいました。姉は、その後遠くへお嫁に行つてしまひました。ここまで考へて來ると、文夫が、

『兄さん、汽車でつこしよう。』

と言つたので僕は庭へまはりました。

うちのぼち

神奈川縣高座郡大野校尋四
石井美代子

私のうちのぼちは、この間えんの下のおくの方へ、大きな穴を掘つて、子をうみました。ずつと奥の方なので、なか〳〵手がとゞきませんでしたが、昨日のお晝頃やつと出しました。穴の中にゐる時には、暗いのでたゞ黑いものがいくつも動いてゐるな、と思ふばかりで、何匹うんだのかわかりませんでしたが、出してかぞへて見たら、ちやど十匹ゐました。『まあこんなに。』と家中のものがをどろきました。

出す時に又ぼちがなくだらうと思つて、うらの梅の木へしばつてをいたのですが、犬ころのなくのが裏まで聞えたのでせう、わんわんわん〳〵とそれは〳〵かなしさうな聲を出してひどくなきさけびました。

可哀さうでしたが、犬ころはすぐ川へ持つていつてすてゝ來てしまひました。

子犬をとられたぼちは悲しさうな聲で、そこらぢう、なきながらかけまはつてさがすので、とても可哀さうでした。夕飯時分になつても、まだ氣がちがつたやうになつて、えんの下から臺所の方まで夢中になつて穴を掘つてゐました。自分の子を見つけてゐるのでせう。

菜の思ひ出

横濱市不老町二ノ一二五
榊原一郎

表を菜を一ぱいに積んだ牛車が通つて行きます。それを見てゐると、フト家に居る頃の事が思ひ出されました。

泥だらけによごれたシャツやズボンをきたない手拭ではたきながら家に歸つて行つた。空は眞ッ赤に燒けてかごの中の菜に迄赤い色がうつつて綺麗だつた。途中でどつかの知らない人がかごの中をのぞき込みながら、いい菜だなあつと賞めて呉れたので、心から嬉しかつた、自然と笑が顏に出て來た。自分で種をまいたり肥料をやつたり長い間苦心したのが今報ひられたかと思ふと餘計嬉しかつた。

通信

自由畫選評

山本鼎

本月は數も少いし出來もよくない。大いに勉强して傑作をどつさり送つて下さい。秋から冬にかけて景色は變化に富み、美しい果物も多い事です。寒くなると温い室の内で靜物寫生に親しむのは樂しいものです。諸君はまだクレイヨンを使つて居るやうですが、クレパスを使つて御覽なさい。クレイヨンより描きよいし、色が自由にまざります。描いた上を指でまぜるとんと油繪の具で描いたやうに平らな美しい色の面をも出せます。

○

△齋藤好治君の『學校の東方』（推賞首席）はデツサンがしつかりして居てよい。圖取りも面白いしトオンもあり、色も綺麗です。そして立體的自然をよくつかむで居ります。まづ傑作の部類ですね。

△横井修吉君の『風景』（推賞次席）――は色が少し單調だが印象の活きた水彩畫です。殊に雲がよろしい。

△山村カヱ子さんの『肖像』無邪氣な寫生ですが、少し堅いですれ、すべてが垂れ下つた髮の毛の處位にふつくらと描けて居るとよいのですがれ。

△森田友晴君の『髮結ひ』は例によつて、面白味があるが、ちと畫面の感じが汚ならしいですれ。今度毛筆で描いて淡彩を施して見給へ。

△長谷川千春君の『つばき』花はよくかけて居るが、餘なぞよくない。影の紫色は影とは見えず、しみのやうです。

△神津清琉君の『ダマネギ』あつさりして程のいゝ繪だが、實はもつと深く眞に迫つて見るがよい（と云つて精密にといふ事ではない）左の方の玉蔥のデツサンはなかなかいゝ。（十一月）

童話の選後に

齋藤佐次郎

○今月もいゝ作がなか〳〵にありました。その中から次の諸作が豫選に入りました。『忘れられた太吉爺さん』『赤屋根の家と腐つた林檎』『お爺さんとお婆さん』『ハーモニカ』『雪の中の苺』『螺夫さんと運動會』『川蒸汽』『新しい帽子』と外に小供篇として『お爺さんと息子』の九篇です。○尙嚴選の結果候補作として左の三つの作を擧げることが出來ました。

（大人篇）

忘れられた太吉爺さん　（岡崎重太郎）

赤屋根と腐つた林橋　（戸木三千尾）

（小人篇）

お爺さんと息子（中村速生）

○『忘れられた太吉爺さん』はなか〳〵いい作でした。文章にところ〴〵氣取り過ぎた言葉があつて、童話の文章としては殊に考へものだと思ふ點がありましたが、その點を除いては、全くいゝ作でした。時代の流れに取殘されて行く馬車屋の爺さんと馬との哀れな姿をあらはすことに立派に成功してゐました。感傷的な涙でもつて說明しずに、峠に黙つてゐる老人と馬とをとらへて、それでよく說明してゐるのは、作者のすぐれた態度と表現力とを認めずにはゐられません。殊に終りへ行つて、小供を乘せて馬車を走らせる太吉爺さんを書いたあたりは全くスバラシクよく書けてゐました。

この作は今月號で推薦します。發表に際して、不適當な辭句を多〻訂正したり、一部削つたりした所もありますが、それは承知していたゞきたく思ひます。尙、題も、『忘れられた太吉爺さん』では味がないので、『馬車屋の太吉爺さん』と改めました。

○十二月號で推薦した吉田初太郎さんの『悲しい玩具』は非常な好評です。恐らくこの『馬車屋の太吉爺さん』も好評を受けるだらと想ひます。

○『赤屋根と腐つた林檎』もいゝ作でした。外國人が日本語をよく知らないために、日本といふ國が惡い人間ばかり住んでゐるやうに思つたところが、日本語がわかつて見ると皆なとお友達になつて、非常に住みいい國になつたといふ題材を扱つたもので、題材のありふれてゐないところが、先づ面白く思はせます。しかし、作者がしつかりしてゐるといふ點からいふと、太吉爺さんの作者からは一寸見劣りがしました。

○『ハーモニカ』『お爺さんお婆アさん』共に、しんみりとした氣分をもつた作で、童話としての新しい味もありました。

○『螺夫さんと運動會』は非常に達者な筆で、小供の心理をよくとらへてゐます。『川蒸汽』の作者も達者です。この作で蘇をいへば終りで少年が勞働者のためは父に賴むあたりを、もう少しわざとらしくなくあつたらと思ひました。

○『お爺さんと息子』はこの人の綴方ばかりこれまでに見てゐたので、一寸驚きました。十五才のこの人にこれだけの作が出來やうと想像しなかつたからです（失禮はご勘辨）水車屋の爺さんが乞食の少年を拾つて來て育てゝゐる内に、本當の親子のやうな氣持ちになつて、お互にこの二人が一緒にゐなければ淋しくてたまらない心持ちをあらはしたものですが、よく爺さんと少年の心持ちをあらはしてゐました。

○川島秀雄さんの『新しい帽子』はたいした上出來でもないが、少年の氣持ちはとらへてゐました。

○兎に角、かうして毎月、いゝ作が集るやうになつたのは愉快なことです。尙一層皆さんの御努力を望みます。

綴方の選後に

齋藤佐次郎

▽今月は特にすぐれた作もなかつたが、大體にそろつてゐました。しかし、入賞の二つの作は何といつてもいゝところがありましたが、他は甲乙のない位ににた程度の作でした。

▽入賞作に就て批評しますと、阿部和子さんのある月夜は月夜の靜かな氣分で、全體をつゝんでゐるので、本當に物靜かないゝ氣持ちを感じました。この作は上手とか達者とかいふのではありませんが、靜かな、いゝ氣持ちをあらはすことが出來てゐるので、その點に感心しました。

▽中村アヌさんの『だまされて』もいゝ作だと思ひました。だまされて、いら〳〵する氣持ちや、腹が立つたりするところが申分なくあらはされてゐます。

▽新津三四子さんの『れこの子』は九才の人の作としてはいゝ作といはなければなりません。中でも『かわいゝれこの子が五匹お母さんのおつぱいをのんでゐました。お母さんのれこは、くたびれたやうにれてゐました』のあたり、氣に入りました。かんたんな言葉の中に、子を生んだ母猫と子猫とをあらはしてゐます。

▽松浦美代子さんの『開かぬ花』は、おとなびたところがありますが、しかし、弟を思ふ心持ちが、あはれに、やさしく讀む者の胸を打ちます。

▽岩崎勝子さんの『なつかしいなばさん』千代田勝弘さんの『お松さん』前野萬馬さんの『床屋』神藤正七さんの『姉さん』石井美代子さんの『うちのぽち』神原一郎さんの『栗の思出』いづれもある程度まで書かうとしてゐることをあらはしてゐます。しかし、尙一層深く、力强くあらはす事を望みます。

編輯室より

（記者）

▽新年號も今日で漸くに編輯部の手をはなれました。新年號は汽車の輪廻の都合で、例月より早く發行しなければなりませんので、一層の忙しい思ひをしました。しかし、兎も角も、今日でほつと生き返つたやうな氣がします。

▽まつたく、今日のわれ〳〵の喜びと、そして今日になるまでの苦しみを皆さんにお知らせしたいやうです。しかし、こればかりは本當に雜誌をやつた人の外にはわからないことなのですから、知つていたゞきやうもないのです。

▽新年號の陣容は、編輯部一同苦心をこらしたものだけに、きつと皆さんから喜んでいたゞける事と思ひます。西條八十先生も久しぶりで童謡を發表になりました。先生獨特の非常に面白いものですから、皆さんから大評判になることでせう。

▽『愛犬物語』でヤンヤといふ喝采を受けた小島先生は、『暗闇城』といふまたスチキな物語を書いて下さいました。長篇では三島霜川先生の『大石主税』があり、久米先生の『漂流』百三十日』があり、新進小城さんの『白帆の唄』のあはれな物語があり、又山本二郎さんの『寃女の島』といふ類のない沓々怪々の物語があつて、今年の『金の星』はいよ〳〵面白くなります。

新らしく出た本

○世界名作叢書第九篇 太平記物語

（木下滋雄編　高坂元三裝幀）

太平記物語は文保二年から正平年間に至る凡そ五十年間の一大戰記史であります。楠正成を始めとして、兒島高德、新田義貞など、後醍醐天皇をめぐる純忠の人々の雄叫びは、如何に讀者の血を湧かせることでせうか。歴史の課外讀本として、普く少年少女諸君にお薦めしたいと思ひます。（四六判箱入頗美本一九〇頁、挿畫十數葉、定價九十錢、東京市外上駒込二八、金剛社發行）

○ポケット音樂辭典

（伊庭孝編　白眉社發行）

このポケット辭典は、一目で外國語の音樂用語が分るやうにと云ふ事を主眼として編纂されたものです。殊に、アクセントには細心の注意が拂つてあつて、どんな初學者でも、この本によれば、眞に正しい發音が得られます。音樂研究家のポケットに、缺くてならぬ珍本です。内容一五〇頁、定價七十錢、東京市外下目黒町四六八、白眉社發行）

自由畫掲載外佳作

島貞巳（臺灣）　土橋虎雄（和歌山）
綾原輝夫（東京）　沖津清琉（東京）
齋藤ツヤ（和歌山）　長谷川千春（千葉）
遠藤逸平（山梨）　高橋武夫（東京）
木曾正二郎（兵庫）　高村忠典（茨城）
刀禰元一（石川）　刀禰元成（石川）
山崎孝（静岡）　服部嘉春（大阪）
長谷川道春（千葉）　伊藤松三郎（東京）

綴方掲載外佳作

森みのる（樺太）　青山正雄（兵庫）
齋藤邦一（和歌山）　柴田しげ（茨城）
柴くに（茨城）　古谷みい（茨城）
茂呂りん（茨城）　茂呂きく（茨城）
森三千憲（鳥取）　原田善郎（不明）
菊地光藏（山形）　勸山形）
木村孝三（東京）　細川公正（石川）
中村義子（神奈川）　山口吉三（滋賀）
藤岡清長野）　山形新次郎（東京）
前野萬里（京都）　丸山妙（東京）
高野修次（東京）　横原正芳（島根）
福岡ちか（兵庫）　佐藤貞（岩手）
岡崎はるゑ（兵庫）　狂純（群馬）
佐藤重男（東京）　加納齋藤　隣二（大阪）

童話掲載外佳作

吉村光雄（東京）　川島秀雄（東京）
野良武員（東京）　瞬可島（山口）
武田幸一（福岡）　新納時秋（札幌）
福井勝秋（愛知）　松田章子（東京）
尾野安子（京都）　石野能次（兵庫）
中村速生（大阪）　海野みどり（東京）
美濃静久（香川）　岩崎勝子（神奈川）
長島多津雄（山口）　門田洋一（東京）
折笠孝（東京）　後藤義夫（東京）
河野清雨（朝鮮）　石澤治男（長野）
岡本昇平（滋賀）　池澤鶴三郎（東京）
茶木七郎（神奈川）　佐藤源五郎（宮城）
貝原昌明（東京）　伊藤昌星（東京）
三好浩太郎（山口）　早川忠雄（東京）

童謡掲載外佳作

【大人篇】

日高紅葉（臺灣）　武田幸一（福岡）
吉村光雄（東京）　縛原一郎（神奈川）
藤野福雄（大阪）　大塚一仁（大分）
中村利雄（大阪）　長谷川賢三（新潟）
井上三千三（鹿兒島）　小谷時信（島取）
内田美和（茨城）　都築保二（愛知）
安藤八郎（宮城）　兼松桃夢（大阪）
三島定市（島根）　五味くに三（山梨）
宗奈葉二（東京）　推能秋（岩手）
小野伴三郎（新潟）　瑛三（東京）
島田八郎（東京）　齋藤與助（山形）
川島秀雄（東京）　東明（大分）
松永平治（京都）　新納時秋（北海道）
河野青雨（朝鮮）　山口吉三（滋賀）
佐藤寛（新潟）　河野清（朝鮮）
尾塔與志枝（岡山）　中村正雄（京都）
鳳よしほみ（東京）　臺タキ（埼玉）
渡邊多枝子（東京）　高橋武夫（東京）
細田わか（埼玉）　松岡經吉（和歌山）
細川公正（石川）　三輪兆男（三重）
山崎秋子（埼玉）　菊地勇子（岩手）
上元芳男（北海道）　柏崎ミツ（秋田）
山崎寛（茨城）　安くくり（茨城）
中山二郎（山口）　筒井杜皃（山口）
栗原康哉（埼玉）　原田武夫（山口）
山村カヱ（熊本）　延原正代（東京）
小倉正太（茨城）　山下ウメ子（山口）
平山和（茨城）　鈴木英夫（神奈川）
西元篤（東京）　沖津清琉（東京）
中村速生（大阪）　石神洋子（神奈川）
松岡嘉一郎（和歌山）　葉山純夫（東京）
皆川治修（茨城）　安あき（茨城）
大谷吉雄（山口）　岡田あき（埼玉）
田口ふみ（埼玉）　信田敎子（山口）
新井滋（埼玉）

新誌友名簿

千葉仔朗（東京）　渡邊善四郎（千葉）
大村京子（静岡）　遠藤保三（神奈川）
鈴木政次郎（京都）　山口ヤス子（廣島）
内藤勝藏（青森）　吉田美代（石川）
小川千惠子（大阪）　岩谷シン（東京）
橋本菲村（群馬）　鶴間惠登惠（栃木）
千葉子郎（東京）　高橋德三郎（茨城）
のむら志郎（臺灣）　千代田勝弘（東京）
小堀義夫（静岡）　松本啓（熊本）
藤山於蒐路（京都）　美濃静久（香川）
山野遠雄（長崎）　河野牧草（朝鮮）
内田好雄（神奈川）　茶木七郎（神奈川）
西里政雄（熊本）　山形新次郎（東京）
磯井勝秋（愛知）　千葉泰雄（宮城）
石倉直造（山梨）　飯島孝太郎（茨城）
種田實（東京）　柿沼喜一（東京）
原田小太郎（神奈川）　伊藤三千夫（山口）
松田章子（東京）　伊藤富士雄（京都）
岡田落木（埼玉）　志村治之助（東京）
島田夕陽（東京）　河合英太郎（東京）
河邊すみ子（神奈川）　戸木三千尾（大阪）
木田鐵太郎（神奈川）　堀川ひで緒（茨城）
鈴村眞哉（東京）　宍戸功夫（朝鮮）
小田三治（北海道）　高谷正太郎（山梨）
牛田いさを（東京）　石原汀香（京都）
小山えうじ（神奈川）　永井孝（東京）
織原輝夫（東京）　近藤健二（神奈川）
嶺洲光太郎（東京）　增田實（茨城）
白井正雄（東京）

【子供篇】

岩田繁雄（岐阜）　中村義子（神奈川）
角田勇二（青森）　神藏正七（東京）
高野修次（東京）　都外川透（大阪）

【讀者だより】

藤野福雄　阪野　潤

『金の星』の會。十一月七日、日曜日）大阪市東區小橋寺町の西念寺内の清潔幼稚園で金の星の會を催しました。朝九時から子供さん達の集で阪野潤氏の挨拶に始まり藤野福雄氏コンダクターのもとに一同おなじみの野口先生作の『青い目の人形』を合唱して十一時にめでたく會を終りました。又午後一時から大人達の集りで、當日は數十名の來會者を得て童謡童話に就て互に意見を交換したり、雑談を飛ばしたりなどして、お互に親睦をはかり有意義な會も、名方和郎氏の閉會の調にて五時頃盛會裡に終りました。會の司會者は左の通りです。

疊田次雄　　郡外川勝
名方和郎　　石川榮一
恩智　淳　　岡本虞夫

會の事務は（大阪市東區岡山町三五二藤野福雄）宛でして下さる事になりました。（金の星の會より。）

△益々御發展の程を祈つてゐます

（金の星社一同）

▲川上先生のみ繪有り難う御座いました。これからずつとお願して下さい。又フランダースの少年の樣なのを特別にお願します。愛犬物語もうれしく讀みました。それから童話行脚もよい讀み物ばかりでよろこんでゐます。（茶木七郎）

▲『金の星』の皆樣にお願ひ致します。いさゝかなりとも童謡の爲めに盡したい考へから童謡冊子『ひのくに』を出す事に致しました。隔月確實に出して內容を充實したいと思つてゐます。皆樣からも是非御投稿下さいませ。冊子は一部參錢送料貳錢でどなたにもお配け致します。冊子は元旦創刊の豫定で居ります。（群馬縣勢多郡粕川村月田『ひのくに』社青柳花明）

▲金の星の十二月號素晴らしい人氣だ。『とんちやんのポチ小僧』『河童大王』を嬉しく拜見した。それにフランダースの少年の完結篇本當に嬉しう存じます。かやうなものを續々お載せ下さい。異國の作品なつかしく思はれます。西岡さんも古村徹三兩氏の御健筆を萬年ち嬉しく拜見して居ます。それと同時に『童謡春秋』誌に童謡ないくらでもお送り下さい。（編問には岩井信實氏榛葉紅椿氏で贊助委員は斯界有名作家が居られます。そして準同人誌友を募集して居ります。皆樣よ、奮つてお應募下さいまし。ではこれで金の星のますます發展並に金の星誌上諸兄姉何卒私等の集ひにお參加下さいますやうお祈り申上げます。（京都市下京區二條通御前通東入ル藤山於蒐路）

▲神野先生や鳴海先生のお名前が見えて實際嬉しくなりました先月御仲間入りしたのですが童謡なやりだして未だ五ケ月しかたゝない駑鈍ものです。皆樣の御指導よろしく御願ひ申します。それから野口先生の十五夜お月樣の童謡をお知りの方は誰かお歌へ下さらないでせうか。（大阪　秋松トウ夢）

△十五夜お月さんですか。それは金の星童謡曲譜第一輯人買船の中に加へてありますから御覧下さい。（編輯子）

▲金の星十二月號は最後に光る增した樣に思へる。雨情先生を筆頭に杜樣龍崎樣いゝなア。僕嬉しくて躍り上つちやつた。古村君も盤はちよつぴり光つてゐる。近頃の御勉强ぶりがうかゞはれる。名方君は自分のことを喚つてやしない？　青柳おぢさんも奮闘してゐるし僕も一生懸命れ！僕まだ坊やなんだけど一生懸命になれば今月の樣に入賞になれるし、坊やだつて偉くなるかも知れない。雨情先生だつて始めは坊やだつたのだから……、金の星と一緒に坊やも歳をとつて漸次偉くなるんだ。雑誌ではもっお止めでとうですね。では雀と一緒に金の星の益々發展するお正月のお止めでたうを申しませう。（小石川の坊やより）

△ぼうやも大きくなつたものですね、でもそのぼうやが歌を作られるやうになられるには、すいぶん永い月日がたつたことでせうね。元氣でお正月を送りませう。（仕給）

▲私は金の星が一日見て好きになつてしまひました。これからみんなの仲間入をして投書さして戴きます。隨分下手なものですが宜敷

お指導下さいませ。終に金の星のますゝよくなつて行く事を祈ります。（京都師範寄宿舍、西浦孝一）

▲金の星の皆樣僕は本屋からの愛讀者ですが、今度誌友の一人に加へて戴きます。そして今月から投書も致します。どうぞ宜敷くお頼みします。ほんとに寒くなりました。皆樣お體を大切に。（埼玉川越田中直介）

△有難う、あなたもお風を引かないやうに遊ばせ。（給仕）

▲金の星童謡作家得點番附（第八卷第一號より同第十二號迄）

横綱　名方和郎（十三點）
大關　阪野　潤（十一點）
關脇　湊　一訓（十點）
小結　山岡靜子（七點）
小結　壇上泰之助（七點）
前頭　島本夫三（六點）
前頭　金森武夫（六點）
前頭　森ほたる（六點）
前頭　古村徹三（六點）

（採點法は推薦三點入賞二點佳作一點）金の星大正十五年度推薦童謡九篇入賞童謡二十五篇合計百八十三篇作家數九十六人、掲載外佳作及び子供篇は除外しました。金の星に集る人々の御健康を祈ります。（煙都の一隅にて、增田明）

▲私は八月號より愛讀者となりました。大へんよく、ためになるよい本であります。はじめて投書しますが、投書の仕方は之でよいのですか。（福岡縣三川町、河野正則）

△なるべく原稿用紙にお書き下さい。（編輯子）

▲給仕の道ちやん相變らず元氣ですね。毎度愚作を汲にせず、先生にお渡し下さるのも此れ道ちやんのおかげです。蔭ながら手を合しておがんで居ます。僕も大いに振ふから先生によろしく云つてくれ給へ。道ちやん僕にやさしい雅號を授け給へよ。童話に出てくるようなやさしいのをれ――時節がら風引かないでれ。（東京　稻垣秀邦）

△あなたも健在でなにより結構です。雅號ですつて、秀邦なんていゝ雅號ですね。それでいゝぢあありませんか僕はそれが大好きです。寒さの折柄あなたも風引かないようにしてれ。（給仕　道哉）

▲十二月號は上々の出來榮です。本誌にいつも童謡がたくさん出てゐるのは嬉しい事です。一月號は今から待ち遠しく待つて居ますからどうぞ素敵な面白いのを作つて下さい。齊藤先生こんな事言つては悪いですが、緩方鋼の活字をもう少し小さくしては如何ですか？そうすれば澤山良いのが載せられるだらうと思はれます。（東京芝區千代田勝）

△御忠告有難ふ御座います。緩方も出來るだけ勉强してゐます。（齊藤）

▲表紙がだん〳〵良くなつて來たのは非常に嬉しいことでございます。野口先生もいろ〳〵御忙しい事と思いますが、童謡の選評を載せていたゞきたいものです。童謡の選評のない事は非常に淋しいことですから。（千葉縣香取　岩木伊三郎）

△これからは出來るだけ勉强して書きます。（野口）

▲十一月號童話推薦、まことに有難ふ御座いますと素直に御禮申し上げるのですが、それでは餘りにうぬぼれが强過ぎませうか？今更讀み返して見ましても餘りのつたなさに辱かしさが先立ちます。でも〳〵お笑ひ下さい。將來の夢で云い譯する氣なのですから。（新納生）

▲斯道研究の爲め靜かな田園生活に入りました。野口先生には御來阪の都度お目にかゝれましたが之からは其の機會が少なくなるだらうと思ひます。私は大自然の懷に抱かれて綺麗な讀げるばかりです寒さ厳しき折から誌上の皆樣の御健康を祈ります。（大阪府豊能郡箕面村櫻井四ノ五西田方　名方和郎）

▲生れ更つた氣になつてこれから忙しい秋、仕事に追はれて此頃は一寸も落着けませんが、金の星が氣持よく充實して行く事は喜しい事です。力强い健實な歩みを續けてゐらつしやる投書家の皆樣、いつも嬉しい氣持で御作を拜見してゐます。益々御健筆の程を。（長崎市　原勝）

▲金の星が段々發展して行くのを嬉しく思ひます。これからは寒くなりますから皆樣御身體を大切にして下さいませ。金の星の双六は昨年も一昨年も實に見事なものでした。どうぞ今年も立派なものを御作り下さいませ。（仙臺荒町　伊藤清）

▲十二月號の推薦童話悲しい玩具實に好い作品だと思ひました。それから『フランダースの少年』最後の場面には深く感動させられました。かやうな好い話を載せて下さつた事を厚く感謝致します。矢に私のつたないそれでも一生懸命の童話一篇少々長くなりましたがどうか御許下さい。（愛知　綱井勝秋）

金の星社 新年號 出版だより

近刊書のお知らせ

十二月中には次の四冊の本が新刊書として發行の豫定になつてをります

○みなし兒（名著大系ノ卅二）

○平家物語（名著大系ノ卅三）

○魔の航海（世界名作童話ノ五）

○利口な驢馬（世界名作童話ノ六）

すつと前に發行の豫定になつてゐた『十五少年漂流記』は裝幀の都合で、後れてをりましたが、この月中には間違ひなく發行になります。

十二月中に出版の豫定になつてゐる四冊の本の內容に就て一寸述べますと、『みなし兒』のことは前月號でお話しましたから、これはぶきます。

『平家物語』は、この本の名前だけはどなたでもご存じでせう。平家の盛んになつたところからお話をはじめて、最後へ行つて平家の一門が壇の浦で亡びるまでを書いたものです。

平家が盛んで樣々の亂暴をやりそのために島流しにされたり、斬られたりするあはれなお話はいたる處に出て來ますが、そのいばつた平氏が、おしまひになつて日本國中住む處がなくなり、遂に壇の浦で一門全部が海に沈むあたり、たれか涙なしに讀むことが出來ませう。

源氏が旗上げしてだんだんと勢力を得て平家とお互ひに命をかけてしのぎをけづる勇壯な場面は澤山に出て來ます。

そのかはり、あはれなお話も澤山に出て來ます。

勇ましい話と、あはれなお話の好きな方には、大歡迎を受けませう。

『魔の航海』――この本は船乘りのシンドバッドといふ男の七度の不思議な、おそろしい航海の話を書いたもので、おそらく童話として、これ位面白い話はないといはれる位に有名な話です。

アラビヤン・ナイトの中に出て來るお話ですが、不思議な面白さをもつたアラビヤン・ナイトの中でも、第一のスバラシイお話だけに、一度讀みだしたらとても中途で止めることは出來ますまい。七度の航海が、どれもこれも不思議な話ばかりです。

大海の中で鳥へ着いたと思つたら、それが大きな鯨の背中だつたので、とんだ目にあつて皆な溺れて了ふ話や人喰人の島へ行つたり、おそろしい毒蛇の島へ行つたり、或は大鷲といふ大きな鳥にさらはれたり、そして最後に大金持ちになつてめでたく本國へ歸つて來るといふお話ですが、僅か六十錢でこんな面白いお話が讀めるのですから、童話の好きな方は是非讀まればなりますまい。

『利口な驢馬』――これは、誤のこもつた、しんみりとしたお話です。そして、次かと次へとお話が面白くうつゝて行くので、筋の面白味もずゐぶんにあります。

利口な驢馬が自分の一生をお話したのが、この本ですから、一寸外のありふれた童話では讀めない面白味があります。

やさしい驢馬が、惡い主人につかはれてひどい目にあはされるところなど、やさしい心を持つた方は、きつとホロリと涙を落すでせう。

また、親切な坊ちやんやお嬢さんに、いたはつてもらつてゐるところ讀んだ方は、實にいゝ氣持ちがするでせう。

この利口な驢馬は、次から次へと飼主がかはつて行きますが、そのたんびに面白いお話があつて、とうとうおしまひに見世物に出て藝當をします。

百三十頁ばかりの長いお話です。

『ピーター大帝』のこと

この本は、十一月中に發行のつもりになつてをりましたが、裝幀と挿畫の全部を擔任された平澤文吉先生がお仕事の都合で少し後れましたので、まだ發行になりませんが、もう間もなく發行になりますから、御註文の方々ももうしばらくお待ちを願ひます。

藤井清水先生の第二作曲集

『夢のお國』を發表して童謡作曲界に大評判だつた藤井清水先生第二の作曲集が近く本社から發行の豫定です。既に原稿も全部集りましたので、裝幀その他の支度をしてをります。今度の題は『しやんこしやんこお馬』ときまりました。

『世界名作童話大系』をまだ讀まない方に

『魔法の薔薇』『ほら博士』『盜まれた王女』『親指トム』とぞくぞくと發行になつた世界名作童話大系は全國各書店で大そうな評判となつてゐます。

『こんなにいゝ本が、こんなに安い定價でよく賣れたものだ。』と本屋さん方が皆な驚かれてゐますが、したがつて愛讀者のあることも大變なもので、初版二千部はたちまち無くならうとしてゐます。

こんなにも歡迎を受けるといふのには、十分その理由のあることで、もしまだこの大系の本を一冊もごらんにならない方がありましたら、兎も角も書店へおいでになつて、どんな本であるかを見るだけでも見ていただきたいと思ひます。

百聞は一見にしかず、とは何時の場合でも本當です。

『近刊豫告』

○フランダースの少年（名著大系）

○支那英雄物語（名著大系）

○沙漠の魔女（名作童話）

○大勇士（名作童話）

右の四冊が、近々出版の豫定になつてをります。樂しみにしてお待下さい。

本社發行圖書の評判

『俵はごろ〳〵』に就いて、

古賀徹三

私は、筑波山の麓で、兒童達に唱歌を教へてゐる者でございます。いゝえ、教へてゐると云ふよりは、寧ろ兒童達と一緒に、心から歌ふと云つた方がいゝかも知れません。金の星童謡曲譜集は、第一輯から十一輯まで、全部揃へてあります。それに今度新しく出ました本居長世先生作曲の『俵はごろ〳〵』を加へて、十二冊となりました。

『俵はごろ〳〵』を手にした時、私の心はどんなに喜びに躍りましたこと。眼を擧げて窓の外を見ると、稻田は今や收穫時で、農夫達は溢るゝ秋の日の下に、喜々として、黃金色の稻をとりいれてゐます。

俵はごろ〳〵
お蔵に どつさりこ
お米は どつくりこで

チュチュ鼠は
につこりこ

私は思はず口吟まずにはゐられませんでした。本居先生の簡素な樂節の中に、上品な、しかも餘韻に富むメロデーには、心からの讃美を捧げずにはゐられません。野口先生のお歌と、しつくりと氣分が融合して、豊かな藝術境を展開して居ります。雨情先生に厚く御禮申上ます。

『俵はごろ〳〵』でもう一つの嬉しい事は、かねて崇拜してゐた初山滋先生が、木版表紙畫を御揮毫下さつた事でございます。私は今美しい『俵はごろ〳〵』を胸に抱いて、溢るゝ喜びの裡に、この御禮の手紙を書いて居ります。（茨城縣新治郡新治村にて）

『金の星』誌友募集

『金の星』の誌友を募集いたします。誌友にはいろ〳〵の特典と便宜とがありますから、御希望の方は本社宛に規則書をお申込み下さい。

懸賞創作募集

《少年少女の創作》

自由畫……山本鼎先生選
童謠……野口雨情先生選
綴方……齋藤佐次郎先生選

【注意】課題は何でもかまひません。諸君の日々見たり感じたり、したことや諸君のすきなものを、諸君のすきなやうに畫なり、詩なり、文なりにしてかいてください。一人で何題出してもかまひませんが、姓名は學校や學年（または住所と年齢）とともにおとさないやうにして下さい。用紙は自由畫はなるべく畫用紙に、童謠や綴方はなるべく原稿用紙（または半紙）に書いてください。よく出來た方には『金の星』待製の賞品を差上げます。次號締切は十二月廿八日（その以後は次號へ廻る）發表は三月號、宛名は東京市本郷區動坂町三五九番地金の星社。

《一般讀者の創作》

童謠……野口雨情先生選
童話……齋藤佐次郎先生選

【注意】童謠は十五行以内、童話は二十字詰二百行以内、優秀な作品は「推薦」または「特選」として發表いたします。推薦の場合は童話には五圓、童謠には二圓づゝ、特選の場合は童話には拾圓、童謠には五圓づゝ、賞金として呈します。但し少年少女の創作童話にして『入選』の場合は『金の星』賞を呈します。締切、發表、宛名は少年少女の創作と同じです。原稿には必ず住所姓名を記して下さい。原稿はお返しいたしません。

定價壹冊金四拾錢送料壹錢五厘
三ヶ月分三冊（送料共）壹圓貳拾錢
半年分六冊（送料共）貳圓四拾錢
一ヶ年分十二冊（送料共）四圓八拾錢
但し新年號は特別號で五十錢ですから、御注文の節は、この分だけ必ず加へてお拂込み下さい

振替口座東京五九五九六番

【送金の注意】
▽御注文は必ず前金で御拂込み下さい
▽送金は振替が一番便利で御座います
▽切手代用は（壹錢切手）一割増しです
▽第何卷第何號よりと書いてください
▽住所姓名ははっきり書いてください

廣告料は御照會次第お答へ致します

大正十五年十二月五日印刷納本（毎月一回）
大正十六年一月一日發行（一日發行）

東京府豐野川町中組百二十七番地
編輯兼發行人　齋藤保
東京市神田區錦町三丁目二十五番地
印刷人　小畑安之助
東京市神田區錦町三丁目二十五番地
印刷所　安進堂　電話神田二二二三番
東京市本郷區動坂町三五九
發行所　金の星社
振替口座東京五九五九六番
電話小石川五三八七番

世界名作童話大系

四六判箱入美本・定價六十錢・送料六錢

第一編　魔法のバラ

惡い王子の戒めに國を追はれた優しい王子が女神から魔法のバラをさづけられ、そのバラのおかげで、あらゆる困難から救はれるといふ面白い〜お話です。

第二編　ほら博士

ほら博士といふほど大ぼら吹きの男爵のお話です。實になんともお腹をかゝへて笑はずにはゐられない面白いお話です。まア一度讀んでごらんなさい。

第三編　盜まれた王女

ペルシヤの不思議なお話です。リンダガルといふ王女樣が惡い魔法使にさらはれたので、それを王子があらゆる困難をおかして助けに行くお話です。

第四編　親指トム

西洋の一寸法師のお話です。親指の大きさしかない親指トムが、ありとあらゆる冒險を行ふ痛快な物語です。お腹をかゝへて笑ふ事幾度か知れません。

第五編　利口な驢馬

驢馬が自分の一生を皆さんにお話したのが此の本です。利口な驢馬だけにそのお話もほかでは聞かれない愉快なものです。見世物に出たりしてなか〜面白いです。

金の星社發行名著目録

沖野岩三郎先生著
日本の兒童と藝術教育

本當のいゝ童話といふのはどういふものかをはつきり述べて、その作法までも明らかにし、日本の兒童にはどういふ童話を與へなければならないかといふ事まで懇切に說いてある。

金一圓八十錢　送料金六錢

沖野岩三郎先生著
森の祈り

これ程淸く尊い物語が他にあらうか。主人公は愛らしい少年と少女とである。家は破產、住みなれた家は人手に渡り、母は小學敎員となる。少年と少女は都へ出て奮鬪する。

金一圓八十錢　送料金六錢

沖野岩三郎先生著
勞働の少年

鑛山に働く二人の少年の物語である。父親は暴動の爲めに殺されて了ふ。孤兒となつた二少年は如何にして暮したか。その運命を書いた興味深い雄大な長篇である。沖野先生の大力作である。

金一圓二十錢　送料金六錢

沖野岩三郎先生著
赤い猫

沖野先生の傑作として何人も推奬してゐる名篇十五篇。これこそ讀本として少年少女必讀の書である。日本最初の童話讀本にして、又日本の童話讀本として最高のものであるとの評を得てゐる。

金一圓　送料金六錢

沖野岩三郎先生著
金のつるべ

『赤い猫』と共に全國的に有名になつてゐる名著である。單純な敎調でなく面白おかしく讀んで行く內に、自ら深い敎訓を與へられるのが沖野先生獨特の妙味である。

金一圓　送料金六錢

金の星社發行名著目録

野口雨情先生著
青い眼の人形

野口雨情先生の最も圓熟せる時代の傑作を集めた本書は日本童謠界の珍寶ともいふべく研究家の座右になくてならぬ名著であります。幀裝と挿畫は豐富で現代の大家を網羅し一大藝術の殿堂の觀あり。

金一圓八十錢　送料金六錢

三宅房子先生譯
家なき子

佛國の大文豪マーローの世界的名著である。名家に生れ乍ら不思議な運命にもてあそばれ旅役者に愛られて旅から旅をさすらふ哀れな孤兒の物語である。フランスの家庭では必ず本書を備へてゐる。

金一圓八十錢　送料金六錢

三井信衛先生譯
家なき娘

『家なき子』と同樣文豪マーローの作になり世界有數の家庭小說である。旅の間に兩親を失つた少女バリンヌが盲馬を道づれに、まだ見ぬ祖父を尋ね行き艱難辛苦する大傑作である。

金一圓九十錢　送料金六錢

小島政二郎先生譯
狼少年

印度の大自然の中で狼に育てられた不思議な少年の物語である。熱帶の森林の中で猛獸と共に暮しつゝ、樣々の冒險を行ふ男壯無比の大雄篇にして、文豪キップリングの世界的名作である。

金一圓五十錢　送料金六錢

武井武雄先生著
ブウ太郎鍛冶屋

日本に武井武雄のある事は日本童話界の一大珍寶であるといはれてゐる程有名である。その武井先生が自作中最も自信のある童話に澤山の美しい挿畫を入れて理想的繪入童話集にしたのが本書である。

金一圓　送料金六錢

大正十六年版

ライオン當用日記

面白い、
爲めになる、
百科全書のやうな日記！
美しい綺麗な日記！

中形（四六判）（定價金壹圓）（送料十二錢）
小形（菊半裁）（定價八拾錢）（送料八錢）

ライオン齒磨廣告部
東京本所區外手町六
振替口座東京四八三五五

新發賣の小形判